

読者 創る新しい性風俗誌

奇譚クラブ

風俗資料研究

1983年

1・2月合併号



◇文献資料◇

狂へる人々・女郎蜘蛛（後編）

奇譚クラブ1・2月合併号目次



本誌特選カラー……………(2)

特集・懐かしの奇ク嬢たち……………(7)

女小学……………(16)

狂へる人々・前篇……………(32)

読者投稿

◇退屈な午後……………(58)

◇S子の匂い……………(61)

◇女医と母……………(65)

S Mイラスト……………(71)

危険な関係・前篇……………(72)

女郎蜘蛛・後篇……………(85)

編集ノート……………(142)

投稿規定……………(143)

独悦の時









欲泣の像

特集・懐かしの奇ヲ嬢たち

モデル・愛川悦子





格子なき監房





懇謝の眼差

モデル・館典子



幽艶なる受刑

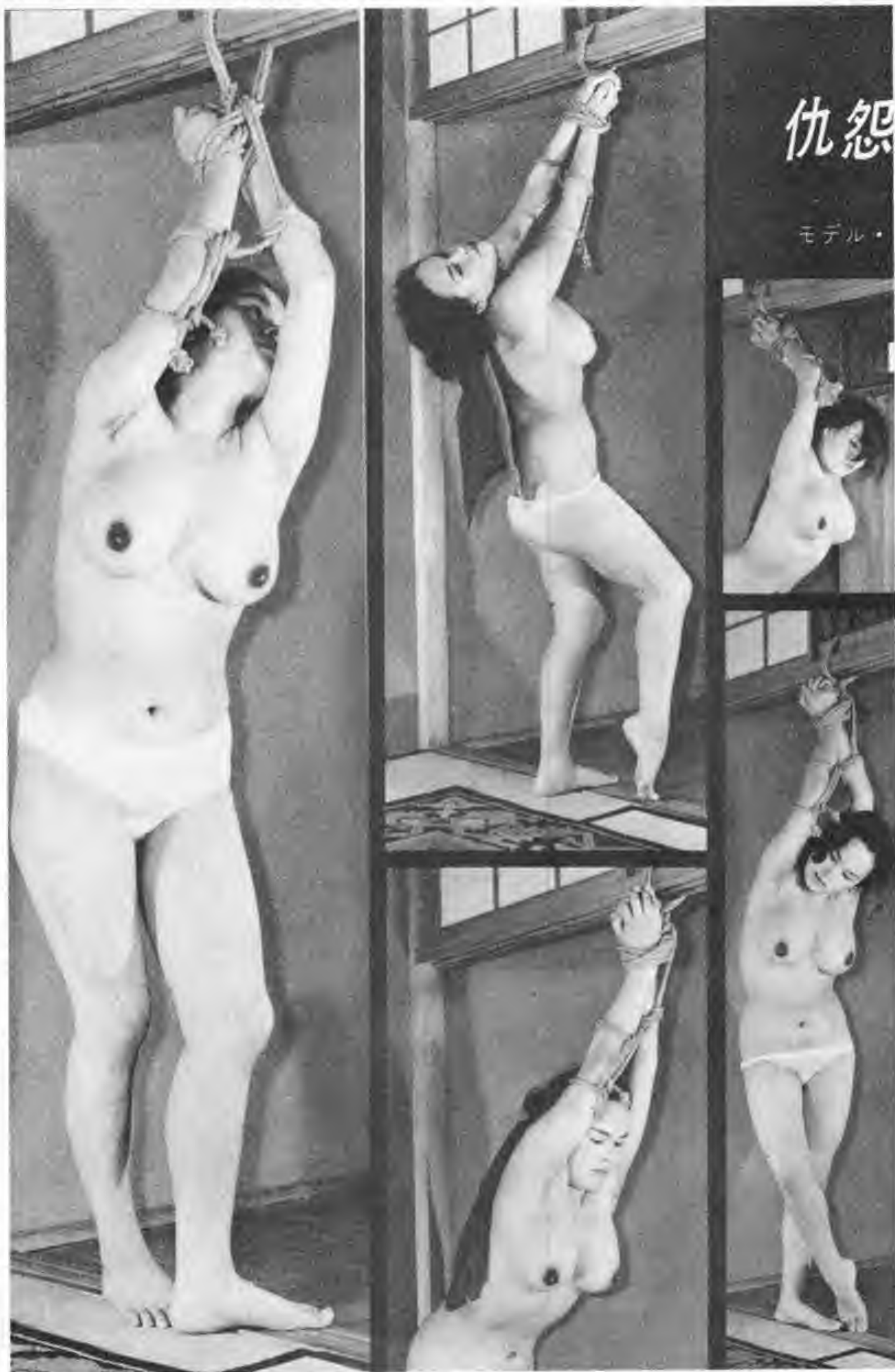
モデル・花坂道子



の欄間

桜井 葉子







麗姿を包む懣辱

モデル・益田房子



昭和35年6月臨時増刊号ヨリ

奇譚クラブ



一九八三年一・二月合併号



◆文献資料◆



抑此佩の戒は過ぎし頃みや
このうち宇保氏の何某とかや、
其女を人のがりやるとて、はな
むけに書てあたへぬる教訓の文
なり、まことに其言葉やすらか
にして市女商人の耳にも通じや
すくしかも聖のかしこき教のあ
となるべし、これをしか名付る
とはすべて婦の婦たう道をまめ
やかに教へて、つねにわすれず
帯のごとくせば終に父母の名を
顯はし妹背山いもせの中のみさ
ほは松竹とともにかはらず鵲の
草くさ色あざやかに、そのさか

えはた鶴龜とおなじくよはひな
がらん事をとぶき、つくく
書て與へけん、親の心や誠に慈
に止まるとかや、實にせちなる
ものならんかし、しかのみなら
ず、わが日のもとは、婚をむす
ぶに帯をもてすなることも常陸
帯の神わざよりして、井手の下
帯一たびむすびぬれば、こと人
に二度とかじとの心ばへにもか
よへる哉、それ人の親の子を思
なる、あるは心は闇にあらねど
もとよみ、あるはぬれたるかた
にわれはねてと詠ず、焼野の雉
子夜の鶴ともにかはる處なしと
を見る、其中にも愚かなるは唯
にとまんとをのみほりして、父
祖をあらはすの名をおもくする
ことをはからず、みだりに婚を
さだめて、名取川あだなる名を



ながしぬるも、たぐひおほきぞ
かし、玆に宇保氏や、此國もろ
こしの貞に節に名ある人のうへ
を遠くあふぎ、近くしたひてせ
ちに其女に訓へ示しけん、白玉
に雪をそゝぐより猶きよくうる
はしきものにあらずや、しかれ
ばかうやうの文のむれ水人し
らず成なん事をあたらしみ、此
度梓にちりばめ正木のかづらな
がく傳へんとほりするものあ
り、予にこれが序かゝんとをせ
む、いなみのゝいなみがたく
て、あるはなきにはおとるとば
をもかへり見ず、みじかき筆を
不老泉のほとりにとる、

富る人は寶をもて餞とし、よ
き人は辭をもてはなむけにす
となん、われはよき人にもあ

らずまた富めるにもあらず、
何にをかはなむけにせん、然
るとてやみぬるも本意ならね
ば、老らくのねぞめがちなる
折から、つく／＼思ひ出すと
をそこはかとなく書つづり一
巻の文を與ふるならし、我を
こひしと思はれ、より／＼此
文を見て夙におもひ夜半に戒
しめよ、能此文の如くつとむ
と聞待らば、わがよろこびか
ざりしらずこそ、
○抑そも孝行をつとむるに品々
あり、父母の側に居て、あさな
夕ないつくしみうやまひまく養
ひ待ること、大よそ子たるもの
道也、汝は故郷へ行なれば、
此つとめはかけぬるぞかし、今
より後々の孝行には何をかせ
ん、我筆のあとを守り違ふこと



なくば、よつもまた心ざしを養ふの孝子なるべし、
○嫁いりするを歸るといふと古き文に見えたり、いかにしてかくいふとなれば必ず夫の家にゆく、されば女は親の内にのみ住みはつくべきものにあらず、夫の家こそ天よりそなはれるわが家なれば、よめいりはわが家に歸りたることわりなり、さるによりて國をへだてゝ行くこと、昔よりかならずあるならひなり、はるゝと海山をしのぎて行くことうたてしとおもふべからず、君みずや、高きもいやしきもたれかおやの内にのみありて、人にゆかざるものありし、よつもまたおもへや、
○今まで親の内に居侍るは是れかりのやどりなり、妻として夫

のためにいのちをすつると人の常也、それは何ゆへなれば、夫はわが家のきみなれば、わがみよりおもきをすればなり、之を知りてわが親より夫の親を厚くしたしむつぶことはりなり、舅姑は天より我にそなはれる家のおやなれば、疎にし侍らるや、いたりていつくしみうやまふへし、のたまふことをばなにはのよしあしをいはず、おほせかうふりぬる事しばらくもおこたるべからず、そのはらにしもやどらねと、みな母木のことはり身にしめておもふべし、
○夫は天にたとへ、女は地にたとふ、さればをつとのたふとき事、天のたかきがごとし、妻たるものゝこゝろえあり、夫婦とおもふ故になるゝにしたがひて



うやまひにおこたり、心ざしに
もたがふぞかし、初よりおはり
まで主君とおもひ、つゝしみつ
かふまつらば、あやまちすくな
からん、此をしへを能くまもり
なば、常にかたはらに居て枕を
あふぎ、ふすまをあたいめんよ
り勝れる孝行なるべし、
○人はわれによからず、我は人
をうやまふに、ひと我に無禮な
らんか、此ときわれよりのした
しみもうやまひもやめ侍るもの
也、世の人みなしかり、たとひ
人はともあれかくもあれ、我よ
りしたしみうやまふべき人なら
ば、我よりするの道をわするべ
からず、人が人ならば我もまた
人のごとくせんとて、我よりす
べきしたしみうやまひを捨る
は、むかふのあしきをまなひな

らふなり、人のわれによからぬ
は我したしみうやまひのたらぬ
ゆゑなりと、みづからかへりみ
てをのれを責むべし、これ孟子
の御をしへなり、かくする事久
しければ人も岩木ならず、かな
らずよくなるものなり、

我がよきに人のわろきがあら
ばこそ 人のわろきは我わ
ろきなり

あだにのみ人をつらしと何か
思ふ 心と我をうきものと
しれ

これみなひじりの御をしへにか
なふうたなり、つく／＼よみふ
かくおもふべし、われ故郷に有
しとき、わらはべの歌うたふを
きく

よしやよしなや人うちむま
じ みだれ車でわがわるい



人にまじはるのをしへ、此うたに過ぎたるはなしと、おもひき、つたなきことと思ふべからず、孔子の御教へにもかなふ、よき人はつたなき言葉にても道にさへ叶ひぬれば捨ずとなん、むかしさるとあり、滄浪の水すまば冠の緒を洗ふべし、にぢらば足をあらふべしと、おさなき童べのうちたふを孔子聞給ひて、人々をいましめ給ふ、水すめる故にたふとき冠の緒を洗はれ、にぢるゆゑにいやしき足をあらはる、人の心もすめば人にうやまはれて、よくもちゐらる、かふりの緒をあらはるゝがごとし、にぢらばあしくいはれて、賤まれん事あしをあらはるゝに、とし、よつや、このをしへをさてもこゝろにぢらんや、あさま

し、
○むかし人にまじはるに、したしみのあつからん事いかしぬらんやと問ふに、とかくのことを言はずして筆と紙とをこひ出して、堪忍の忍の字を百餘り書きて見せ侍る、宜なるかな、われにひとしき人の心はなければ、わが心にあふことのみあらんや、よつも又忍の字をむねに書付るをわするべからず、
○恩ある人に報ひんと人のつねなり、あだなる人にあだにてむくふ事は、みちしらぬ人のこと葉なりとは呂榮公の御をしへなり、よつもまたいましめよや、
○わが身のあしきをせめて、人のあしきをせむることなかれとは、孔子の御をしへなり、よくわが身をかへり見よ、せむべき



事數々なり、これをうちすて、人をせむる事はなほだあやまりとなん、愚かにつたなき人も人のうへをそしり、人をせむることはあきらかなるや、さしもかしくあきらかなる人も身のうへのあしきを知ることはくらしたい人のうへをせむる心にてをのれをせめ、わが身をゆるすところにて人をゆるさば、大よろしからんとは、范忠宣公の弟子をいましめ給ふ言葉なり、人のうへにあしき事あらばよくおほひかくし、よき事あらばあらはしあげよとは朱子の御をしへなり、

○人にまじはるにも下人をつかふにも、心にあはぬ事あればとくと理非を聞わけずしてまづ腹立ぬこと古人ふかくいましめ給

ふ、先づはらをたて、本心を失ふゆゑに理非も耳にいらぬものなり、つとめてはらをたてずして、つまびらかに正し計りて理非をわかつべし、しかるに腹立ちことをさきとすれば、みづからわれをそこなふなり、いかりのしりて人をそこなふと思ふこといとつたなし、たとひ心のまゝに人をそこなひ得たりとも、道ある人の心にあらず、夏虫を何かいひけん心から人も怒りにもえぬべらなれ此本歌はわれもおもひにもえぬべらなれとよめる戀のうたなれども、いかりをこらすいましめの歌にとりなし侍る、此文に古き歌を引きぬる事これにならふべし、人より我にいかるとも、いさゝかうごかず、あやまちは



人より出たりとも、わがあやま
ちなりとをのれに歸してあらそ
ふべからずよきことあらばをの
れが心より出たりとも人にゆづ
るべしとなん、

○たけくしからずこそあらま
ほしき事なれ、茲にありてもに
くまれずとなん古き文にあるを
や、あはれなるやうにてつよか
らず、つよからぬは女の心なる
べし、きみ見ずや、齒はつよき
ゆへにはやくそこね、舌はやは
らかなるゆへに身を終るまでそ
こねたる事なし、古人も齒と舌
とをたとして、人のたけくし
き心をいましめたまふ、
○仲山といふ人は、わか身にあ
やまあるをきく事をよろこび
ぬる故に、ほまれかぎりなし、
今やうの人あやまちあれば、人

のただすをよろこばず、病ある
人のくすりを嫌ふがごとしと
は周子の御こと葉なり、われを
そしるものはわが師也、我をほ
むるものはわがあだなりとは、
誰かいひし、よきをしへなり、
○人をつかふに情ありてよくを
しへたつるわかちをしるべし、
よき人さへいづくまでもことた
りて、いふところなしと思ふは
至りてまれなるものなり、まし
てすゑくは道にくらければ、
一しほたらぬ事のみなるべし、
此ことはりをあきらめしらば、
いさゝかのことをばゆるすべ
し、陶淵明といふ人、子のもと
へ下人をあたふる文に、汝あさ
夕に苦勞をつとむる事いと不便
也とおもふゆゑに、薪をとど、
水を汲たすけに此下人をあたふ



る也、これも亦人の子なり、此ものゝ親も汝をわがおもふやうにあるべければ、なさけありて目をかけよとなり、賊に人をつかふものゝのりとすべき文ならし、
○人ごとにて天道々々と口にはいへど、いかなる事ぞともしれる人まれなり、月日をまつやうのとをのみ天道とおもひぬ、天道よりの人のひとたる道すなはち天道也、人は生るゝとひとしく天より仁義禮智のことをあたふる、扱こそ人たる道を行ふはかの性の外にあらはるゝなり、人たる道正しければ、これすなはち天道なり、家に居て親につかふるうちには親天道なり、みやすかへする人は主君天道なり、人にゆきては舅姑、夫天道なり、わが

心に偽邪なく、或は舅姑、夫、或は主君唯其身のある所にしたがひて、よくつかふまつる是を天道にかなふといふ、わが心と行と天道にそむき天をまつり神にいのるともつけたまふことあらんや、きみ見ずや、にぎり江に月のやどりぬることいつかはある、
心だに誠の道に叶ひなばいのらずとても神や守らん此うたの心をおもへや、まとのみちにかなはずば、いのるとも神はうけじとなり、言葉の外によくきこえ侍る、誠の道とは正しくして人の道に叶ふをすなはち天の道といふなり、かくいへばとて、神をもちやまはず、天をもおそれず、打破れといふにはあらず、よつよ、誠の道にふ



のは人の心なりと知るべし、
盃にむかへばかへる心かな
露うけじとは思ひしかども
此歌をよるづの事におしひろめ
て、物に移りやすき心のいまし
めとすべし、

色見えてうつろふ物は世の中
の人の心の花にぞ有ける
昔たれ人の心を白絲のそむ
ればそまる色になしけん
人皆慾あり、耳目口鼻の慾種々
あり、寶をむさぼる慾のみにし
もあらず、人の恥や皆慾による
とあれば、ふかくつゝしみ恐る
べし、たる事をしればまつしく
ても無慾なるあり、足とをしら
ねば富てもよくふかきあり、足
とをしれる歌
浅くともよしや又汲人もあら
じ 我にことたる山の井の水

○常に眞恐といふ事をよく守る
べし、いにしへの聖のをしへ給
ふは、眞恐の外なる事なし、其
つゝしみおそるゝ事をたとへ
て、ふかき淵にのぞむが如く薄
き氷をふむが如しとなん、此二
ツにのぞむときつゝしみおそれ
ざれば、かならずおちいる、常
に勇しうとめ夫につかへまじは
り、わざになれて物をいふにも、
おきふし立居に付ても、身を守
る事淵にのぞみ氷をふむが如く
おもへとなり、
○汝をよつと名付ぬるは、わが
つけたるにてはあらず、森氏よ
り名付給ひぬる也、ひそかに思
へばまことにゆゑある哉、それ女
に四つの行ひあり、一に婦徳と
は女のとく也、才能人にすぐれ
たるにはあらず、立居靜にして



さはがしからず、身をかへり見て人の知ても耻る事なき處に、つゝしむこと也、二ツに婦言とは女の詞也、物いひあざやかに口をきゝたるにはあらず、よくと葉をつゝしみてこれ也、三ツは婦容とは女の貌なり、貌よく姿も麗はしくある事にはあらず、湯あみ髭あらふ事おこたらず、身持けがらはしからず、朝とく髪ゆひ、常にかたちをとゝのへとりみたさぬを云、四ツに婦功とは女の業なり、たくみな事人にすぐれよといふにはあらず、常に織縫わざにおこたらず、客人あれば食物などいさぎよくして馳走するのたぐひこれなり、此四ツは女の大なる徳にして、家ををさむるもの常につとめとすべき事なり、よつとよ

ばるゝ名をあからさまにおもふべからず、此四つをつとめずばよつにはあらじ、
○伯母君の子となりて行くなれば、常に内に居侍る間はをしへいましめ給ふ事いさゝかも背くべからず、いとこ達をうやまひしたしむ事、あね君につかふまつるがとく成へし、ときうつり年月をすぐるとも、このをしへを守るべし、古き文をもよみならはせ道理をもしらしめたく思ひしかども、此事かの事にいとまなければ心ならず打過ぬる事本意にあらず、されども嘉言一篇をばよく覚え侍れば、をこたらずよみて、しれる人に其理を習ふべし、父として子をいつくしみよく道をおしゆべきとはりなれども、今より國をへだてぬ



れば一言のをしへもいかでかい
ひつたへん、さるによりてつた
なき耳に、ちかき事ばかりをあ
らまし書つゝりてあたふる也、
いひつゝけなば濱の真砂の数よ
りもおほかんめれど、おさなき
耳にさとしかたき事は、書も益
なくかつは筆のちからもなけれ
ばしばらくをくなり、ひさしよ
り高きにのぼり、近きより遠き
に行と、ひじりの御教へなれば、
これらのひきくちかき文を見て
よくおもはひ、高きにのぼり遠
きに行のたすけにもなりなま
し、とほき處も出たつあしもと
よりはじまりて、年月をわたり、
高き山も麓のちりひちよりなり
て、あま雲たなひくまでおひの
ぼれると、貫之もいへる、げに
さるとぞかし、

○常に手ならひをこたらず、織
縫わざもとよりのとなればいふ
におよばず、よくく女四書や
うの文を讀てふかくたふとむべ
し、くり返し／＼思ふぞよわ
が筆のあとを守らば、さいれ石
のいはほとなれるよろこびのみ
ぞ侍らん、此文心あはたしき
折ふし書きぬる故に、常に心に
うかびし歌をもわすれて書おと
しぬ、前にをしへぬるにとなる
事なけれども、おなじとまたい
はじとにもあらず、たゞよろし
かれとねがふは人の親の子をお
もふ心なれば、老の身の追々に
くりとかきてあたふるならし、
○つとに夜半にうやまひいつく
しむべき人を思ひいりて、おこ
たらぬを常あるといふ、
色もなき心を人に染しより



うつろはんとは思ほえ無に
君をおきてあだし心をわがも
たば するの松山浪もこえな

ん
此二首もまた戀のうたなれど
も、心常にあらんとををしへぬ
ると葉にとりなし侍る、君とは
しうとしうとめ夫をさして見る
べし、きのふは肩を打ち袖を引
き、さしも中よく見えぬるも、
けふはいさゝかのとにうらみく
ねり、あらし浪風たちて、仇の
如くに成ぬるも世のためしおほ
し、是常なき人なり、よつよ唯
つねあれや、

世の中の人の心は花染のう
つろひやすき色にぞ有ける
常なき人のさま此うたにひとし
からんとおもふ、
○まことなき人は假令よき事い

ひ出して、人かならず、うた
がふ、人にちぎりしこと葉のち
がひぬる事いとはづかし、つゝ

しめやよつ、
偽のなき世なりせばいかばか
り 人のとばの嬉しからまし
いつはる心よりいひ出したると
葉、などがうれしからん、まど
あれやよつ、

○綿ならばわた、針ならばはり、
綿に針をつゝみぬるさましたる
人いとうとまし、是やうの人を
見て、よつもみづからかへり見
てつゝしめや、

つらからば唯だ一すぢにつら
からで 情のまじるいつはり
ぞうき

此うたのさましたる人はうるさ
し、ふかき人はなにはにつけて
いはず、かの浅はかなる人ぞ、け



しからずのさまは見ゆる、

そこひなき淵やはさわぐ山川
の 浅き瀬にこそあだ浪はた

て
○品かたちこそ生れ付ならめ、

こゝろはなどかかしこきよりか
しこきにもうつさばうつらざら
ん、

かたちこそ深山がくれの朽木
なれ 心は花になさばなりな

ん
植て見よ花のそだゝぬ里もな
し 心がらこそ身はいやしけ

れ

よき人を見てはわれもひとしか
らん事をおもひ、よからぬ人
を見ては、我にもあらんかとみづ
からかへり見よとは、孔子の御
をしへいとありがたし、
○人のもとへゆきて、あるじ情

わりがほにもてなしとめ侍る
に、心づよくたちぬるも心なし、
歸にしほわすれて、長居するも
また心なし、あるじにいかなる
用のあらんもはかりがたけれ
ば、大やうはやく立ぬるもよか
るべし、

いざさらば思ひ立田の薄紅葉

人の心に秋の來ぬ間に

○百のよき事ありてもねためる
こゝろいとうるさし、ねたみふ
かくたけんしくのゝしりぬれ
ば、妹脊の中もうちこそなり
ゆくなれ、いかで心のやはらぐ
事侍らんや、高安のこほりに行
かよひし人も女あしとおもへる
氣色もなく致しやりければ、前
栽の中に隠れ居て河内へいぬる
がほにて見れば、女いとうけ
そうしてうらながめつゝ



風ふけば沖津しら波立田山

夜半にや君がひとり行らん

とよみてけるをきいて、かぎりなくかなしと思ひ、かはちもゆかずなりにけり、ねたむころ露なき故にこそ、かぎりなくかなしとはおもはせぬれ、ねたみふかきは一心しぬる本なし、風ふけばの歌のころをおもふ、つよからぬさまより讀出しぬるすがたなり、すべて人の心にかざれば言葉にあらはる、心は色もなくかもなし、ねためる心つよくて、ひさげの水のわきかへりしなどいふわけなきことならんとぞおもふ、
○力をもいれずして天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけきものゝふの心をも

なぐさむるはうたなりとなん、此文に歌を引てよつををしへぬるも、たけきころをやはらげんためぞかし、此文に引ぬる歌おほくは好色のたねとしてよみぬる歌なれど、心のいましめにとりなしぬればいとよくなりぬ、

○つら／＼ひとりまたおもふ、人のいひ出しぬる言葉も、常ある人のよきさまにとりなししていはるはよろしくきこえ、常なき人のあしざまにとりなしぬるは、僻事にもきこゆ、人の行ひも又しかなり、よつやおのれの身は、道にくらくて人のよしあしかならずいふべからず、
人のうへよしともいひて何かせん いろへばにさる谷川の水



かゝらしめんがため也、
石清水にござらずと思ふわが心
人こそしらね神やうくらん
濁なき心ならば人の知るしらぬ
にはかゝはるべからず、よくお
もへや、つゝしめや、
○獨を憚むといふ事あり、ひと
りとは人しらぬ處なり、此事ひ
そかに我ひとりしりぬれば人は
かつてしるまじとおもふより、
心のにぞり外にもあらわれて輕
きはうき名をながし、おもきは
身をそこなひ待るいとあさま
し、わが心に我ひとり知たる時
は、萬人に見わけらる、いと耻
かしと思ひてつゝしみおそるべ
き也、
なき名ぞと人にはいひて有ぬ
べし 心のとはいいかゝこた
へん

汝つねに物ぬふとによそへてを
しゆべし、針をさしぬるときは
人はしらねども、其あとを通る
糸目を見て、針をさしぬるよし
あしの後に見ゆるぞかし、常の
行ひもまたしかなり、女は閨の
中にのみありて人にま見えねど
も、内にてなすとの善惡外にか
くれなし、きみさけや、内に琴
をしらぶれば聲ほかにきこゆる
と、よつもまたひとりをつゝし
めや、
○それ人の心惟あやふしとは聖
人の御言葉也、たとひ常に色香
にめてむ味にもふけるまじ、ま
してあさましきこゝろをばあら
ためんとふかくいましめおもへ
ども、物に觸て心うごく時は、
常のいましめを忘れて、おちい
る事かならずあり、あやうきも



よしとだにいふまじければ、ま
してあしざまにいふ事、人の本
意ならず、
○人々あやまてる事あり、顔か
たちは見よからんやとて、鏡を
見てみづからあらためぬれど、
心見よからんやとて、鏡を見る
人なし、心のかいみは何ぞとな
れば、古き人の書傳へし文なり、
文をかいみとは此心ぞかし、よ
つや顔かたちをうつし見る鏡は
持なれば、心をうつし見るかい
みは、父が筆のあとなりとおも
ひて、をこたらずよむべし、松
の葉のちりうせず、正木のかづ
ら長くつたへて、その子むまご
までにもあたへよかしとこひね
がふ、



狂へる人々 前篇

一、父の女と密会

お民は脇坂の父の寵愛を受けている女である。三月始めであるというのに、温室育ちの西瓜が新宿の二幸のウインドウに飾られたと言つて、お民が風呂敷の中から取出した。

「お邸に持帰って頂戴、ちよつと荷物になるでしょうけれど……」

「済まん、時に、用事は？」

腕時計にチラと視線をやつて、久しぶりで会うお民の方に顔を向けた。素人作りであるが、ほんのりと漂う衿脚から、腰廻りのいろ気には、かつて赤坂で鳴らした甘いものが匂っている。

「脇坂さんたらいつも急ぐのネ、悠っくり出来ないの？」
丸窓から庭の泉水と雪見燈籠が絵の様に映って見えた。

「君と一緒にいると、どうもいけないよ。何となく変になつて来るんだ。何か用があるんだろう？」

煙草を取出すと、お民の繊細な白い手がマッチを向けた。手入れの行届いた爪に、映画雑誌で見た女優の、物言いたげな指そっくりである。

「あら！何よ。変になつて来るって……ふふふ。いやアなひと……そんな目で見ないで何とかしたらどうなの、パパには内密で貴方の言うなりになるわよ。」

と、座卓の向うから、膝を進めて来て、

「変な女を買ったりしちや駄目よ、悪い病気でも染つたら、それこそ大変なんだから……」

白魚の様な指で脇坂の手を握る、高価な香水の匂いがプーンと鼻腔を突いて来た。忘れた女の匂いであつた。

「いいのか？そんなことをしても……本気にするぜ」
丸い肩を抱寄せる。紅い花びらの唇が、喘いで濡れていた。

「どうせお妾さんですもの、時には浮気位したいじゃないの？」

潤んだ唇を近づける。脇坂は前々から、お民と会つて来たが、そのたびに危いと思つて警戒して来たが、もう駄目

だった。小さな舌が熱っぽく潤んで、独身の脇坂を奈落に突陥す様に、ぐんぐんと押込んで来た。そのまま二つの体が床の間を背に倒れ、乱れ裾から燃える様な襦袢が零れた。唇と唇が貪慾に喘ぎ喘ぎ求め合うと、お民の双ぼうが貪婪に輝いて、

「誰か来るといけないわ、ねえ、次のお座敷に移りましょう。抱いてって……」

頸に白い腕を廻して囁いた。紅の襦袢から雪のような白いふくらはぎが媚めかしく零れた。

「小柄なんだけど、ずいぶん重いんだね」

「そうよ、割に肥っているの、十二貫もあるの、割と重いわよ」

「本当だ。いい匂いがするな、目がくらくらするよ、どれ、綺麗な布団なんだね、この待合の夜具は……」

生きている人形のようなお民をえんじ模様の夜具におろし、青い電気雪洞の影でいっそう媚めかしく見える女に、再びキスをする、

「ああ、うれしいわ」

潤んだ目元で惚々とおとこの顔を見詰める。

「俺だって君を……このまま食べて仕舞いたい……君は可愛い顔をしているんだね」

「ねえ、食べて頂戴！このまま貴方といつまでもこうしていたい、もっと、もっと強く抱いて……骨が折れるまで抱いて」

「こう、こうかい？」

「ええ、うれしいわ、どうにかこのままならないか知ら」
頬と頬を摺合せた二人は、しっかと抱合って夢うつつに呟く、お民の桜貝のような耳が火照って、鬢のほつれが喘いだ。

「ねえ、帯が苦しいわ、解いて……貴方のお洋服、あたしが脱いで上げる」

脇坂はお民に上衣とズボンのバンドを外させながら、シユシユと帯を解いて、枕びよう風の乱れ箱に入れる。お召の着物が丸い肩から滑って、パッと部屋がひ縮緬の襦袢で映えた。裸の片脚をお民のふとももに割込ませる。スポンジのような柔い餅肌のふとももで、しっかと脇坂の脚を締めつけたお民は、

「夢見たいだわ、あたしの胸に手を入れて見て頂戴、こんなにわくわくして……」

と、男の手を裸の胸にいざなう。むっちりした乳房の感触に脇坂はハツとなったが。

「ねえ、凄いでしよう？亢奮してんのよ」

と、胸に顔を埋めてお民は、

「あたし悪い女でしょう？誘惑したりして」

「そんなことないさ、女だって、浮気位いいさ、気にすることはないよ」

と、片手を下に滑らせる。小柄な女に似ず肉付のいい茂みの下に、粘膜の溝が指に感ぜられた。磨きのかかったく

ぼみはやや湿って、商売女しか知らない脇坂は、その柔軟な感触に思わずぞくっとした。

「ああ、あなた！お指が汚れるわ」
ややふとももを締めてシナを作る。

「平気さ、お民のだもの、清潔な君のを何だったら、僕はいたでもいいんだ」

「いや！そんないやらしいこと仰言っちゃ、あたしが後であなたの、いただくわ」

「いいよ、そんなことして呉れなくなつて」

「だって……ねえ、あたしにもちよつと握らせて……いいでしょう？」

と、お民は柔い手で固くなつた脇坂のを探ぐる、一瞬ハッ！となって手を引っ込めたが、

「まあ！脇坂さんたら……叱驚するじゃないの、」と、睨んで見せる。

「何だい？どうかしたのかい？」

「どうかしたもないもんだわ、あたし息が止りそうだったわ」

「さっぱりわからんね、何のことだか……」

「そんな優しいお顔をして、こんな憎らしいものをお持ちなんですよ、」

「何だ、そんなことか、僕のなんか中位のところだよ、」と笑って見せる。そう言えば脇坂は数年前、父の大造と別府温泉に行った当時のことが思出された。ひよいと背中を

流して上げた父の背後から、何気なしに盗見した父の、余りに可愛らしい姿に思わず吹出したことが思出される。

「何だお前……急に笑つたりして……」

振返る父には黙っていたが、脇坂は父に似ず、男としては割に特製を神から授けられていた、学生時代に悪友と較べっこをして、三番になった覚えがあり、昨年の夏、大阪の支社に詰めた頃、宗右衛門町の芸者に後を追廻されたことがあったが、その原因は脇坂の立派な男ぶりに惚れられたのであった。

「うちの旦那はんたら、そりやけつたいなものやわ、やはり男はんはあづまおとこに限りますよって……うち、脇坂はんを離さんさかい、覚悟しなはれや」

と、旦那の目を盗んで、アパートに押掛けられたりしたことがある程だった。お民は二十二の今日まで、男と言えど、脇坂の父しか知らずに来ている。六十に近い老人の世話になつて、慾しいものは何でも買つて貰うばかりか、何一つ不自由をしたことがなかった。不平を言ったら罰が当たるかも知れない。が、お民は物足りなかった。

この頃流行の夕刊新聞や、性雑誌には銀座裏や新宿裏には、若いボーイばかりの喫茶店があつて、有閑マダムや芸者、女給、二号さん達が、時々そのボーイと、うまくやれるという話題が載っているのを見て、

「本当にこんなところがあるのか知ら？」

記事をたよりに探しに出たことがあつたが皆目、わから

ずじまいで戻ったことがある。

老人相手の暮しよりも、お民は例え貧しくとも、若い男にしっかりと抱かれて見たい、膿が溜った膿み口を、先の尖った針先で、思いきりほじくって貰いたい——そんな気持ちであった。

お民は結局、脇坂の新聞社の方に電話をして、何だ彼だと誘っては、自分の満ち足りぬ青春の吐け口を求めた。が、数回会っても、脇坂の父の世話になっているお民は、それ以上のことは自分の方から仕掛けられるものではなく、

「じゃ帰るわネ」

と、しきりに時間を気にする脇坂とは、せいぜい食事を附合って帰る位のものであった。

「ああ、あ、じれったいっただらないわ」

内心地だんだを踏む。

「あたしのこの気持がわからないのか知ら」

挙句の果には脇坂を怨む。

それが思いがけずに、今日の首尾である。お民はただもう嬉しくって、脇坂の胸にしっかりと抱かれて、膿み口を外科医に診せるように、そつとふとももを拡げて、おとこのものを探った瞬間、メスの鋭利さに思わず叫んだのである。鋭利なメスはお民の小さな掌には余る程立派であるばかりか、触れれば焼傷をしそうな熱さに、お民はただもう胸がわくわくするばかり。

「ねえ、汚したでしょう？ご免なさい、」

謝るお民に、

「いいんだ。それよかお民さん、僕、お民さんの呑みたくなった、」と、嬉しいことを言う。

「だって、お口が……」

「君のなら、僕、何とも思っていない。ねえ、いいだろう？一度でいい」

と、お民のしもの方に顔を潜込ませようとするのえ、

「駄目、駄目よ、あたしにもあなたのを、いただかせて……」

お民は起上ると、おしっこをする時の姿勢で、襦袢とお腰を捲上げ、脇坂の顔に逆に蹲がった。

二、壁越しの泣き声

お民の妹が熱海で自殺をはかったという知らせに、脇坂はあれから一週間ぶり、お民と二人で熱海駅に降り立った。伊豆山の旅館に着くと、夕暮れに霧雨が降り始めた。

「お嬢さんは、ようお休みになっておりますよ、大丈夫でございますから、こちらのお部屋で暫くお待ちになって下さいまし、お風呂も空いておりますから……」

馴染の旅館の女将が庭に面した障子を開けながら言う。白梅、紅梅が盛りで、広重の版画の絵の様に、霧雨に煙って美しい。燈籠と苔石の庭に青々と、早春の新芽がふいて、初島が海面に乳色に浮いている。

「原因は何だろうね、失恋かね」

と、隣室の方を顔で示す、お民は女中が置いて行った丹前を脇坂の後から羽織ってあげながら、

「生意気に大学なんか通っているから、あたしには何も言わないのよ、姉さんを姉さんと思っていけない娘ですから……」

と、口では言っても、たった一人の妹が可愛くてならな
いお民である。脇坂は丹前に着換えると、蛇の目傘をさし
て、庭に降り立つと、

「梅が綺麗だね、久しぶりでのんだりして、いい気持ちだ。
昼間より夕暮れが、海も綺麗だ」

燈籠の側に立って、海を眺める。

「そうですか、あたしは怒られると思っていたのに、そ
んなに喜ばれると、誘った甲斐があったわ、」

お民は帯を解きながら、

「ねえ、すぐにご夕飯ですから、お風呂に入って来ると
いいわ、」

「うん、一風呂浴びて、梅見酒といこうかなあきちゃん
には悪いけれど」

と、縁側に戻った脇坂は、

「おやじの方、大丈夫かい？」と、声をおとす。

「おととい、仙台に行ったわ、ご存じないの」

「知らん。何しろ時間がまちまちなんでね」

「そう。あたしがうまくやっておくから、貴方は知らん

顔しているといいわ」

「うん、然し、おやじに知れると、ことだね、こうして
いるだけでも、胸騒ぎがするよ」

「気の小さい……女のあたしの方が、余っ程図々しくて、
願賢いわよ」

と、笑って見せる、お民は嬉しかった。築地の待合では、
追い立てられるように、用がすむとさっさと帰って行った
脇坂が、今夜は一晩中、二人で悠っくり出来ると思うと、
都々逸の文句ではないが、しつぽり、濡れるまで濡れる嬉
しさ。小娘の様にお民の胸はわくわくして来るのである。

隣室の妹は、プロバリンを多量に吞んでいるので、明日
まではおそらく眼を醒さないという女中のはなし、自殺を
しかけた妹には悪いが、これからもちよく命を失わ
れない程度に、自殺をして貰いたいと、お民は苦笑しなが
ら、階下の風呂場に降りて行った。

「あたしよ、背中を流して上げるわ。」

中から鍵が開いて、手拭で前を秘した脇坂が、ガラガラ
とガラス戸を開ける、湯煙りでタイル張りが曇っていた。

「丁度加減がいいんだ、入らないか。」

と、浴槽の中で顔だけ出して言うのえ、

「じゃ、向うを向いて……入るから……」

と、くの字なりにしもを秘して言う。

「免倒臭いんだね、見てやしないよ」

と、壁に向く。お民は浴槽を跨ぐと片脚を浴舟に漬け

た時、いきなり脇坂から背中を抱きしめられ、よろよろと男の膝の上に腰を突いた。

「あら！いやアよう、脇坂さん！」

ジャーと湯が溢れた。

「まるで小娘見たいだね君は……さあ、ちっとしておいで……」

と、背中にびったりと毛むくじやらの胸を押しつけた脇坂は、脇の下から両腕を廻して、双の乳房をぐっと掴んだ。

「ああ、くすぐったいじゃないの、そんなことしちゃ……お茶目さんね」

と、お民は男のなすままに抱かれていると、

「裸になると、君はずい分肉付がいいんだな、屹度、洋服も似合うよ」

「時々、着るには着るのよ、でも、何となく着物と違って、身の安定がつかないの、」

お民はおとこのなすまま、乳房を弄らせている中に、ふっとまたの下に固いものが、ピクピクッと動くのに気づいて、湯の中を覗込むと、まるで自分のまたの下に、男のものが生えているように、脇坂の亢奮したものが上を向いている。

「あら！いやな脇坂さん！びっくりするじゃないの、何だと思ったわ」

と、湯の中で曲折して揺れているのを握ると、築地の時のことが出された。ハッ！と息が止る程立派なのに愕い

たのが懐しく、それにしても、あの日のことは生涯忘れそうもない。

性雑誌の説明によると、文化人になればなる程、男女の閨房術に変化が多いという。原始人や動物は男女の技巧をそれ程使用しないと言う。そう言えばお民も領けた。路傍で見る畜生の戯れや、農家で年に何回か行う馬や牛の種付にしても、人間のように四十八手の裏表を演ずることはない。人間にしても下層階級の筋肉労働者は、それ程、性戯が豊富でないのだ。知識階級になるとまるで違う。芸者時代にお民は旦那の目を盗んで、日劇に出演している三枚目と一夜の契りを交したことがあって、

「まあ！こんなこと……」

腰を抜かさんばかりに、その変態的な行為に驚いたが、脇坂も凄いことをした。文化水準が高いひと程、性戯に変化があると言う。

「ねえ、のぼせて来たわ。」

お民は風呂の中で、乳房を揉まれながら片手で、くりくりした個所を蹴られるので、ただもう生きたそらもなく、しっかと男のを握っている中に、

「もう駄目だわ、かんにんして……」

背中をおとこの胸によせかけて訴えれば、

「いいじゃないか、思いきり出しな」

「だって……温泉が汚れるじゃないの、悪いわ、そんなこと……」

「後で流して置けばいいさ、何だか僕もアジな気になって来たよ」

「仕様がないわね、」

と、口ではなじつても、お民にして見れば産れて初めて風呂の中の悪戯である。熱いお湯がおとこの指の動きと共に、体中深くにジーンと忍込む心地良さは、例えようもない位である。その中にお民の掌の中で、おとこのがビクビクッと動いたと思うと、ふんわりと白い、糊の固りのようなものが、水面に浮いて来た。

「あら！あなた！凄いわよ」

と、産れて初めておとこの正態を見た。いつもなら京花ですぐ仕末して仕舞うので、おとこの洩したのを見たことはなかったのである。ずいぶんの量であった。水面に浮いた白い糊が、横にふわふわと拡がるのを見詰めていたお民は、

「あア！あなた！」

思わず叫んで、身をよじった。

その時廊下で、バタバタとスリッパの音が近づいて来て、

「ねえ、あたしいやアよう、独りでなくちや……ねえ、

貴方は向うへ行らっしゃいよう」

若い女の、甘えた鼻声と共に、

「いいじゃないか、恥かしいことないさ」

と、男の声。暫く声が止んで、結局は二人の男女は一つの家族風呂に這入った様子。やがて、思いがけぬ情景が展

開され、二人は顔を見合せた。

「ねえ、かんにんして……いやアよう。いたずらしちゃア……」

と、女の鼻声。

「ちつとしておいで……誰かに聞えるじゃないか」

「だって……あなたが悪いのよ。ねえ、くすぐったいわ、もう、止めてエ」

又、声が止んだ。脇坂と二人はジッと息を殺して、疲れた体を白いタイル張りに、後手で支えていると、お民が石鹼で脇坂のおしもを洗いながら、

「あのひと達、恋人らしいわねえ」

と、顔で隣りの浴室をさす。

その中に、急に隣りの浴室がシンとなったと思うと、女の噛み殺した声で、絶え絶えに訴えながら哭き出す仕末。お民と脇坂はそのせつなげな女の泣き声に、いつしかしかつかとお民を膝の上に抱上げて、ジッと耳を澄していると、隣りの若い女は、今にも息を引取りそうな声で、しきりに泣いている。

「いい声で泣くわねエ」

「うん、上手なんだね、泣きかたが……あれじゃ男だったまらないうらう」

「ほんとうに……どんな女か知ら？」

「覗けないね、どっか節穴でもないかな」
と、壁一枚の隣室を気にする。

「お止しなさいよ、罪じゃないの」

と、たしなめる。その中に脇坂も再び亢奮したと見え、固くなったものをお民に握らせていたが、隣室でのなやまし気な女の泣き声に、我慢出来なくなつて、

「ねえお民……」

と、抱き寄せる仕末、

「まあ！ いやアねえ、いいんですの？」

と、呆れる。脇坂の父は月に二度か、時には一度ということもある。それもお民にホンのお義理の為めの、おつとめであつたのに、やはり年齢は争われないものである。

「大丈夫だよ、一晩に七八回、遊んだこともあるんだ」と、脇坂はどうとう目的を達する。お民は嬉しかった。

二十二の今日まで、旦那を持っていながら、生理的には満足したことなかったお民は、つづけて二回、思つても見なかった嬉しさにポーッと頬を朱に染めた。

三、盗んだ処女

「凄かったね」

湯上りの二人は、座卓をはさんで、食前のビールで咽喉を潤していた。窓越しにチラホラと漁火が動いて、暗い海面が三日月に照されていた。表通りに自動車がエンジンの音を時々残しては去って行く。

「ええ、あのひと達、まだ学生じゃないか知ら、女のひ

と、お下げ髪だったわ」

と、お民はホンノリ赤くなった目元で言う。

「うん。そうらしい、全くアプレ連中は困つたものさ、然し男は年輩だった。二号か、それとも勤先の部下の娘なんだね」

「呆れるわね、あんな泣き方は、子供なんか出来るものじゃないわ、男に教わつたのか知ら？」

と、思出して言う。

「どうなんだろうね。あの齡頃で、本当に泣く程いいもんかね、」

と、脇坂は今さっき、風呂場から出て来た娘のことを思出す。せいぜい齡頃は十九八ではなからうか？ 見たところ体は一人前の女に發育していて、浴衣の胸も相当膨んではいたが、顔立ちはまだ子供である。その娘が、まるで年増女顔負けする位の、泣き方をしていたのである。隣室に寝ているお民の妹、さち子よりは一つ二つ若く見える年頃であつた。

お民が夕食後、隣室の妹の部屋に立った時、

「あのう、お友達の方からお電話でござえますが」

と、女中がお民に声をかけた。お帳場に降りたお民が戻ると、

「海岸通りで旅館をやっているお米さんからなのよ。遊びに来ないかって……あたしひとつ走り、車で行って来るわね」

「うん、行つといで……待っているから」

やがてお民は車で出て行つた。脇坂は腹這いで雑誌を読んでいると、隣室のあき子が何か知らず言を言い始めた。

「……………」

誰かを呼んでいる。男の名前である。自殺の原因は失恋かなと、脇坂はあれこれと思案していたが、やがて、脇坂は襖越しに見えるあき子の白い、鼻筋の通った、紅いおちよば口を見詰めている中に、悪魔の様な、鬼畜に劣らない空想にハッ!となった。が、一度思立った、畜生の様な興奮は、波の押し寄せるような勢いで、ザ、ザアと脇坂の脳神経を刺戟した。脇坂は酒に酔った勢いも手伝って、夢遊病者のように、フラフラと泳ぐように襖の向うに這って行く、まるで、せむしか悪鬼の如く、あき子の布団の足元に蹲ると、夜具をそっと持上げた。

真ッ白い雪肌の脚が、乱れた寝衣の裾に、ややももを上げた格好で脇坂の目を射た。クンクン鼻腔を鳴して、彼は顔を近づけると、匂う女の臭気に、なおフラフラとなって、夜具の裾を大きく捲上げた。

十九の少女とは思えない、パンティのゴムひもの喰込んだふとももが、脂肪づいて、白く透いて見えた。

「あァ……何て清純な体だ!」

呟くと、そっとパンティに顔を埋めた。ふくらみとふくらみの三角帯の盛上った丘は、大きく膨んで、下の溝に桃色のパンティが、なだらかにへこんでいた。

「いい匂いだ……」

パンティから匂う、女になりきった、魚のような臭気が、ほのぼのと脇坂の鼻腔をくすぐる。柔軟な温みのある、餅肌の感触を、彼は顔一杯で味わった。父のお妾であるお民に劣らぬ、成熟しきった肉付である。もぎ立ての水蜜桃のような、ふとももの膨みからは、歯をいれれば、潤沢な水が溢れそうである。

「……………」

脇坂はパンティのゴムに指をかけた。腰から桃色のパンティが、スルスルと雑作なしに膝の下に剥がれていった。

「あッ!」

思わず彼は目をみはった。俗に言う、皿という奴である。すべすべした丘に、一本の樹木も生えていないのである。十二三の少女のように、盛上った膨らみは、脇坂の目には、貴いものに思われた。

「……………」

そっとふとももを上げ、粘膜面の、バラのように紅い肉は、ざくろの実が割れたように紅く、色づいていた。破爪されない、処女特有のじつは、淡紅色に色づいて、お水で幾らか濡れている。

「完全な処女だ!」

心で叫んだ。尊い。人生に最大の歓喜を与える泉——脇坂は夢中になって、匂う、その尊い泉に顔を埋めた。プロバリンを多量に呑んだあき子は、鬼畜のような、無

頼な侵入者が、舌端で、口唇で悪戯されているとも知らず、深い、深い眠りに陥っていた。

自殺の原因は失恋であった。然も、脇坂が貴いものと思っている、皿が原因であった。恋人の男は、あき子を旅館に誘い、散々、肌身を楽しんだ最後に、あき子の肉体に、あるべきものがないと言って、冷く、突っ放した。

「こりや愕いた。君のような娘と関係すると、男は一生不幸になるといふ。僕は、僕は不幸になるのはいやだ！」

彼はそう言って、裸のあき子を放り出して逃出した。あき子は地獄に突陥された思いで哭いた。一途に思詰めたあき子は、信頼した恋人から裏切られた苦痛に、熱海の旅館に来て、処女のまま死を選んで、プロバリンを多量に嚥下した。幸い、一命は取止めたが、意識を取戻す為めには、数時間を要する筈である。

お民が戻って来たのは、十一時少し前で、脇坂があき子の体から、何も彼も盗んだ後であった。

「あら！まだおやすみになっていないの？ご免なさい、遅くなって……」

と、羽織を脱いで、枕元に座ると、

「お米さんの旦那さん、南京虫の密輸の件で捕っているんですって……」

と、煙草に火をつける。

「ふん、そんなことをしていたのかい？お米さんの旦那というのは……大部儲けたんだろうから、ぶっ込まれる位、

何でもないじゃないか」

「そうらしいわ、何しろお米さんの旅館も、ずい分建てましをして、凄く立派になっていたわ」

と、うまそうに煙草の煙りを輪にする。

「政治家と言ひ、財界の連中といい、役人といい、この頃の連中は皆、悪いことをして、金を儲けようとするご時世だ。本当を言えば悪いことをしない限り、金は儲からないからな、南京豆だって、まあそうさ、どんどん輸入して、慾しい奴等に売ればよさそうなものだが、質の悪い時計しか製造出来ない、日本の業者は質のいい時計を作って、外国製品に対抗すれば、誰も外国の時計を買いやしないのに、妬きもちを焼きやがって、政府の役人に働きかけて、輸入をさせずに、悪い時計を拵えて、儲けようとする、まあ、日本は万事がこの調子だからね」

「あたしにはそんな難かしいことはわからないけれど、ねえ、お米さんの旦那さん、何とか早く、娑婆に出られるように、ならないものか知ら、実はね。頼まれちゃったのよ、脇坂さんと一緒に来ていると言ったら、お米さんたら貴方は新聞記者で顔も広いから、何とか骨を折って貰いたいわって」

隣室のあき子がまた浮言を言い始めた。しきりに男の名をよんでいる。

「あきちゃん、失恋したんじゃないか知ら？飯島さんとかあったのネ」

と、お民は妹のことで思案顔をする。

「その飯島というのは、知っているのかい？」

「ええ、やはり大学生で、あきちゃんとは仲がよかったらしいわ、」

「ふん、」

と、脇坂はお民の留守の間に、意識不明のあき子の肉体を盗んだので、あき子のはなしは興味がない風を装う。

風雨はいよいよ激しく、雨戸を叩く音と共に、自動車のエンジンの音が、間 的に響いた。帳場で流れるラジオの音楽が、静かに、奥さまお手をどうぞと、流れて来る。

「もう寝ようか？眠くなって来た」

四、紅梅、白梅

昨夜からの風雨ははれ、開け放された窓越しに、紅梅、白梅が鮮やかに咲き乱れ、垣根の向うの、青々とした海原には、蒸気船が一艘、黒々と煙を曳いていた。初島が灰色に浮いて、錦ヶ浦の断崖が、日本画の風景画のように美しい。

襖越しに白い顔のあき子の横顔が、彫刻のように端麗で彫りが深く、死線をほう徨した女とは思えない、紅をさした様な紅い唇が、さくらんぼのように可愛く見える。生きてゐる娘の胸が、夜具の下から大きく膨んで、

「あら！」

と、つづらな双ほうを開けて、辺りを見廻した。脇坂の方に貴族的な顔を向けて、

「あたし、生きていたのね」

不思議そうに言う。十九の乙女の無邪気な顔である。

「ああ、生きているよ。」

と、脇坂も彼女の方を向いた。新鮮な果実のように、あき子の顔は生き生きとしている。

「そう。生きてよかったわ、死ぬなんてバカバカしいことだわ」

「そうさ、バカなことは二度とやるものじゃない。知識階級のお嬢さんらしくもない。原因は失恋なんだろう？」

と、脇坂は昨夜のあき子の肉体のことをふっと思出した。さっぱりした、魅惑的な肉体であった。

「ええ、考えると、バカバカしいことだわ、」

と、あき子は吐捨てるように呟いてから、

「失恋が原因なんだけれど、本当はもっとバカバカしいことだったのよ、白状すれば、脇坂さんに笑われるわ」

と、洗いざらい言って仕舞う腹を決める。

「笑いやしないさ、あきちゃんが真剣に考えた挙句、生命を投出す覚悟をしたんだ。笑いやしないよ」

「そう、嬉しいわ」

と、考える風であったが、思切った表情で、

「あたし、本当は片輪だったのよ。彼氏、あたしの片輪を知って、逃げて行ったの」

「ふん、片輪？君が片輪とはおかしいね」

と、あき子の貴族的な顔を見直す。お民と違って八等身型の美人であるあき子である。

「ちよっと恥かしいけれど、あたし、あるべきところに毛が生えていないのよ」

と、襟首を真紅に染めて、

「彼氏、縁起が悪いと言ったわ、一生、不幸で暮すのは厭ですって……」

と、顔を反向ける。脇坂は昨夜の、あき子の肉体を思い出した。

「バカな奴だな。そんなこと迷信じゃないか。相場師の株屋の仲間や、博徒のやくざ仲間では、怪我をしないといつて、尊ばれてもいるんだぜ」自殺原因が余りバカバカしかった。

窓越の木枝に止った鳥の舌に耳を澄した。腕時計が十時を指している。

「お姉さんは？」

あき子が再び脇坂の方に顔を向けた。

「今朝早く帰ったよ。お昼頃、おやじが旅行から帰って来ると言っただけ」

「そう。デリケートな仲なのネ。脇坂さんは前からお姉さんと？」

「違うんだ。つい十日程前にね、前々から危いとは思っていたけれど、遂々、出来て仕舞ったよ。親子で一人の女

を、まるで獣見たいだろう」すらすらと白状した。

「そうも思わないわ、運命よ。仕方ないじゃないの、お姉さんも、いつまでお妾でもないでしょう。好きなひと位いたって、いいじゃないの、その好きな人が、たまたま旦那さんの息子だったまでですもの」

「おやじの世話になっっている女と承知して、出来た僕に罪があるんだが……時期を見て何とかするつもりでいる」

「お姉さんが可愛想だわ、お姉さんに涙を流さないような、解決のつけ方をあたしはして欲しいわ、こうしてあたしが大学に通えるようになっていけるのも、お姉さんの犠牲の中なんですから……」

と、真剣な表情で言ったあき子は、上半身を起した瞬間、白いシートに、赤い血が着いているのにハッとなった。

「あら！あたしどうかしたのか知ら？」

胸の中で呟いて、若しや？と脇坂を疑った。メンスは十日程前、あがった筈なのに……あき子は本能的に、脇坂を疑った。もしや脇坂は？……。そう思いながら、あき子は自分の肉体を、心の中で調べて見た。果して、下腹深くに、何か、固形物状のものが挟った思いであった。

「犯人は脇坂さんだわ」

決定的に脇坂を疑った。昨夜のあき子は、意識を失い、肉体の自由が利かなかったのである。何でも云うなりに出来た筈であった。

あき子はさり気なしに、窓外を眺めている脇坂に、

「お姉さん、昨夜どっかえ行っただの？」
と、訊ねて見た。

「うん、夕食後、海岸通りのお米さんの旅館に行って帰ったよ」

「そう。じゃ脇坂さん、昨夜、あたしに悪戯したんでしよう？」

と、不態を突いた。果して、凶星であつたと見え、脇坂は慌てて、

「え？いたずら？」と、あかくなる。

「凶星ね、いやアな脇坂さん……」

と、睨んで見せてから、

「お姉さんに言いつけるわよ、」

と、きつとなって見せた。

「あきちゃんが余り、綺麗な顔をして寝ていたんでね、ついフラフラと……でも、悪いと思っっているんだ」

「いいのよ。どうせ、あたしは彼氏に体を許そうとしたことがあるんだから……卑きような男にアレされるよりは、脇坂さんにあたしの処女を上げたことは、後悔しないわ」

「そう思って呉れるか。すまん、謝るよ」

「でも、残念だわ、一生に一度、女にされながら、全然記憶がないなんて……珍らしいことだわね」

と、あき子は寝巻一枚で起上ると、立って縁側に出た。
またに物が挟んだ思いであつた。

「綺麗な朝なのネ、東京ではこんな美しい、朝は見られ

ないわ、あの、青い島が初島というんでしよう。海面にぽっかり浮いて、ずい分綺麗な島なのね」

と、白い指をさす。後姿の腰が、十九の娘とは思えない、丸い肉付であつた。成熟した女のそれである。脇坂はあき子の後姿を眺めながら、自分が女にしてやった女だと思うと、急にあき子がいじらしい程可愛いく思われた。

「後で散歩に出ようか。もう一日、熱海で泊って帰りたいよ」

「そう、そうしなさいよ。この旅館じゃ、後でお姉さんに悪いでしょう。どっか、移りましようよ」

と、振返った。

「うん、後悔しないかい？僕と一緒に……」

「しないわ、もう、あたしは脇坂さんの女ですもの。後悔なんかしないわ、」

「それならいいけれど……そうと決めたら、もう起きようかな」

と、上半身を起しかけると、いきなりあき子の体がまりのように転がって来て、

「いや！いやアよう、まだ起きちゃ……あたしいや！いや！」

二ツの体が一ツになって、ひしと抱合って離れなかった。

五、少女供養

婦人の装飾用として愛玩されている、小型の腕時計は香港を中継して、日本に密輸されている。俗に言う南京虫という腕時計で、一個に対して十ドルの純利があった。主に航空便を利用して密輸されているが、税関役人を売却して大掛りな密輸を計画した一味の主謀者、笹島茂氏はやっと保釈出所した。

熱海海岸通りの旅館「笹屋」の奥座敷――。

「社長、お芽出度うございます」

腹心の乾分牧村が裏口から姿を見せた。

「うん、お蔭さまでやっと、陽の目を見ることが出来たわい」

と、豪傑笑いをして見せた。お米が笹島氏の側に座って、「牧村さんも、これからは大手を振って歩けるわよ」と、意味あり気に言うと、

「そうですか、さすがは社長です。いや、これで安心しました」

と、お民と笹島の両方に、改めて手を突いた。指名手配の肩身の狭さを、牧村はつくづく味わったのである。

何しろ気の小さい税関のお役人連中じゃから、わしの一言でどうなることじやろうと、ずい分気を揉んだことじやったろう、うん、あれから何か連絡はあったのかね」

と、訊ねる。税関の上層部には、笹島の黙否で当局の手は伸びなかったのである。

「はア、電話でちよいちよい連絡をしたり、そつと新橋

で会って来ましたが、何しろ気の小さいお役人のこと、全く見ちゃいられませんでした。その癖、何だ彼だと言っては、せびる仕末でしたが、出来るだけのことはしましたが……」

「ふん、仕様があるまい。何しろ女につき込む金でも大変じやろうからのう」

と、応揚に言った後、お米が席を外すと、辺りを見廻してから、声をおとして、

「例のあの娘を、電話で呼んで呉れんか？ お米に知れんようにな」

ニヤツと笑う。牧村は、

「ぬかりはございませぬ。富士ホテルの方に手前がお連れしておきましたから……」

「うん、そうか。すまん。う。じゃ後でいつもの通り頼むぞ。お米には絶対感付かれんようにな」

そこえお米が戻って来た。何喰わぬ顔で

「近い中にそのお役人も、一席招ばんことにはなるまい。お米と相談してのう」

と、鼻の下の黒いものをひねる。

座卓に酒肴の用意が出来て、牧村と笹島が酒杯を交す。そこえ、熱海の地元の同業者が数人挨拶に来た。牧村はそれを機に姿を消した。表に出ると、星が降るように輝いている。

久しぶりで大手を振って歩ける嬉しさに、牧村はわざと

パトロール中の警官の方に近づいて、

「富士ホテルはどう行けばいいでしょうな」

と、立止る。

「その右側の、あの、高いところに旗が見えるでしょう。ネオンのある……」と、指をさす。

「いや、どうもすまんです」

と、胸を張った。三月間、指名手配中であつた牧村は、大地に立って大声で叫びたい気持であつた。

富士ホテルには、今日牧村が連れて来た娘が、しょんぼりと部屋の籐椅子に座つて、窓外のネオンの七彩を眺めていた。

「大部待ったかね？」

と、冬子の側に寄る。

「いいえ、こうして夜の景色を眺めているの、あたし大好きですの」

可憐な少女の瞳が潤んだように見えた。

「そうか。まあ安心していらっしゃるんだね。これから冬ちゃん
は玉の腰に乗る訳なんだからね」

この春、中学を卒えたばかりの冬子は、まだお下げ髪
の姿であつた。牧村が二三日、銀座で買ってやつたツイ
ーピの洋服が、田舎育ちの娘のようにさえ見える。うぶ
毛の残っている額が富士型の冬子は、鼻立の整った愛ら
しい唇に、紅をさして、丸く膨んだ胸が少女雑誌の口絵
のように可憐である。

「あたし恐いわ。何だか……」

「何恐いことあるもんかね。笹島の旦那は場合によつては、養女にしてもいいと仰有るんだ。大変、冬ちゃんが
気に入つてね。まあ、可愛がつて貰うんだね。言うことを大
人しく聞いていけば、それでいいんだからね。冬ちゃんも
十七といえ、子供じゃないんだから」

と、あれこれと、初夜の注意を与える。が何と言つても、
十七の小娘である。遊びたい盛りの齡頃で、ひ々爺々の夜
のお伽にはちつと無理とは承知していても、牧村にはどう
にもならないことである。

笹島は月に一二回、少女を世話しろと、牧村に無理を言
う。金は幾らでもお望み次第であるが、世話をする牧村は
余り、いい気持ではない。断ることも出来ないまま、これ
まで何十人の少女を世話しつづけて来ている。が今度とい
う今度はちつと困つた。いつも、少女を世話して呉れた
男が、十日程前から悪周旋屋として逮捕されてしまったの
である。急に笹島氏が出所することになったと知つた牧村
は、八方、手を尽してやつと近所に住む冬子を口説きおと
したのである。貧しい日雇人夫の五番目の娘で、外食券食
堂の女中をしていた。その日、その日の生活に追われてい
る家庭には、五万円という金は大金であつた。嫌がる冬子
を口説き陥して、やつと今日連れて来たのである。

「そのおじさん、こわいひと？」

何回も同じことを訊ねる冬子に、

「さっきも言った通り、優しいおじさんなんだ。もう、寝てもいいよ」

と、肩に手を置く。震えていた。

「何だ。震えているのか。気が小さいんだね君は……」

さあ、僕が寝かせてやろう」

背中のホックを外してやると、冬子は立上って、

「いいわ、自分でするから……」

と、ホテルの寝巻を手にした。腕時計は十時を廻っている。

牧村は笹島氏に電話をかけた。お米が出て来た。

「奥さまでご座いますか。牧村でご座いますが、東京の西野課長が今来られましたね、是非社長にお会いしたいからとのことで……はあ、ちょっと社長を電話口まで……」

お米を欺すのも楽ではなくなった。

笹島氏を一夜外泊させるのに成功した牧村は、すっかり寝衣に着換えた冬子を残して、自室に引揚げると、ボーイにパンマーを頼んだ。

「若くて美人をね」

六、漁色癖の果て

「こんな遅くに呼ぶなんて、どうも迷惑じゃが、仕様が
ないわ」

洋服に着換えた笹島氏は、さも、難かしい表情をお米に

見せる。

「そうでもないでしょう？ 今夜は若い妓をたんと楽しめるから、お楽しみじゃないの」

お米はじつと笹島氏の顔を覗込む。漁色癖の彼を知っているだけに、例え、重大用件で外泊の予儀なくとも外で大人しくしているとは思えなかった。

「バカを言うんじゃない。あのお役人は大変固いご仁で、女なんか見向きもせんものじゃ」

皮肉に言うお米を後に、星空の表に出た。自然に足取も怪く、心もはずむ笹島氏は、後を振り返り富士ホテルの玄関を這入った。二階の洋間に牧村が連れて来た娘が一人、ベツドの中で漫画を読んでいた。おさげ髪の小娘がすっかり気に入った笹島氏は

「名前は何と言うんじゃない」

と、眉尻を下げる。

「冬子と言います」

「いい名前じゃのう。としは幾つ？」

「十六、万です。数えて十七です」

「そうか。十六か。可愛い顔をしているのう」

と、笹島氏は上半身を起している冬子の胸の膨らみを見る。まりを入れたように、丸く盛上って、幼い顔立ちであるが、品のある鼻筋と、小さい紅い唇が可愛い娘である。

「もう横になるがよい。わしも寝る仕度をするから……」
と、洋服を脱ぎ始める。猛獣が捕えた獲物を前にして、

悠つくりと眺めながら、その味具合をアレコレ思案するかの如く、笹島氏は幼い小娘のうぶ毛の残っている額際を見詰めた。齡をとってから、どういふものか年増女には興味が薄くなつて、年々、若い娘に食指を向けるようになった。半玉の水揚げにも一時熱も上げたが、今は商売女にはまるつきり興味がなく、素人女の、それも十五六の小娘に、特に情慾を感じる。思春期前の、小娘の胸の膨らみや、腰の丸味を見るだけで、笹島氏はもう亢奮するのだ。

花に例えるなら苞というところである。不況のどん底に喘ぐ農家や漁村から、この頃流行のひと入れ稼業の、遊廓や料亭の女中に売込む、桂あん業者の手を通して、笹島氏は時々小娘を手に入れていた。

今度の南京豆の密輸の件で、暫く刑務所暮らしを送った彼は、久しく娑婆に出ず、鬱積した情慾の吐け口を、お米に求めるのには余りにも勿体なく、丁度来合せた牧村が、氣を利かせて呉れたのである。

冬子はここもち震えていた。壁画の美人は意味あり氣に、笹島氏を見下して微笑していた。二十五貫もある肥満した体軀の、すね毛から太もも辺りの黒々した毛と、臍から胸の廻りの熊のような毛並みに、十六の冬子はもう胆を失っていた。

「はははは、何もそう恐がることはない。うん、わしが恐いのか？」

と、近寄ると母親が赤子をあやすように、福々しい顔を

ニヤツかせて、夜具に潜込み、そっと、団扇のような掌で、少女の寝巻のすその奥を探る。柔い、羽二重のような感触であつた。

「あゝ小父さん！」

思わず身を退く腰を、ぐっと抑えて、

「どうしたんじゃ、え、うん、大人しくしなさい。小父さんがどうも、しやしないから……ちつとしておればええ」
猛獣が捕えた獲物を、優しく撫でるようにして、寝巻の腰ひもを解いた。冬子は鼻の下のひげを頸筋に押付けられ、掌でお尻の辺りから背中、背中から肩の辺りを撫で廻された挙句、乳房を掴まれ、

「小父さん、あたし恐いわ」

と、体を固くする。

「何も、恐いことはありやせん。小父さんが今に、ええことをして上げるから。うん、どうじゃこれは……」

と、小豆大の乳首を指の間にはさんで、親指の腹でくりくりと揉みながら、片手をぐっと下に伸して、固くすぼめているふとももの間に割込ませた。

「アレ！ 小父さん！ あたし……あたし……」

と、いよいよ太ももを固くすぼめるのを。

「そう、恥かしがることはない」

と、片脚を差込んで、テコの様にぐっと左右に拡げた。盛上った丘には、まばらなものが生え、蕾のように固くなった沼は、開くにはまだ早かった。笹島氏はこくんと生

唾を吞下すと、

「可愛い娘じやのう。さあ、ええ娘じや、わしがうんと可愛がってあげる。体を固くしていいいで、楽な気持でいなさいよ」

左右に蕾を開げると、急所を、暫くの間なぶりつづけた。固くなった苞が、やや、お水で濡れ、指の働きは活潑になった。

「小父さん、くすぐったいわ」

やっと気持がほぐれて、固くなな冬子が眉根を寄せた。

「そうか、まあ、暫くじつとしていなさい。今にもっとよくなるから……」

世間知らずの小娘を、ここまで持って来るのは容易なことではなかった。笹島氏は、手折るにはまだ早い小娘が、何とも言えないのである。枕元の青い電気スタンドの光線に、うっとりとなつて、小さな唇を白痴のように開けて、もじもじと腰を動かしていた。東海道線を急行が通るたびに、ゴウと音を立てる。階下のホールからルンバの曲が流れて来た。時々、外人の男女が面白おかしく、笑い合う声が混る。腕時計の針が十一時を大部廻っていた。テーブルの葉ボタンが一葉、音もなしに落ちた。

七、雪肌の女

大阪からの同伴客が一组、横浜の貿易商が二人、やっと

落着いて、お米は、明朝早目に立つ客の勘定をすませせていると、

「女将さんは居るの？」

と、玄関で男の声、帳場の窓越しに、お米が顔を出した。

「あら！ 脇坂さん、いらっしゃい」

と、立上つて、脇坂の後の方をチラと見る。

「お一人なの？」と、訊ねる。

「仕事で来たんだ。遅くなつてね、一晚、泊めて貰うよ」とくつを脱ぐ。

「ええ、ようござんすとも……さあ、こちらえ……」と、お米は脇坂を帳場に通した。改まったお米は、お座座布からおりて、

「このたびはえらいお世話になりました。主人も大喜びで、まるで子供のように、悦んでおりますわ」

と、笹島氏が保釈になったお礼を言った。弁護士やその他有力者達数人に、数万金を費つて保釈の運動をしたが、無駄弾丸に終つてしまった。ふらつとお民が訪ねて来て、しのび逢いで来たのよと、ぼーッと頬を染めて、

「これには内証よ」

と、親指を出して見せた。

「お安くないのネ。今夜はタンとご馳走になるから」と、昔、同じ赤坂に出た朋輩のお民をにらんで見せた。

「それがね、込み入っているお相手なのよ。あたしッて本当に悲劇に出来ている女ね」

「誰なのさ、そのいいお方は……」

「笑わないで頂戴、実はあの若旦那なのよホラ、新聞記者をしている……」

「へえ！ そうなの、大変だわ。よくある奴じゃないの、親子どんぶりッて……」

「本当に困ってしまうの。ひとに言えやしないわ。悲劇よ」と、しんみりして見せる。

「そんなにしよげることないわ。どうせ、あたし達はひかげの女ですもの、少々浮気しても、誰も文句を言いやしないわ。お民さんもその中に、何か商売をするのネ」と、お茶をいれながら、

「あたしのコレも、何だ彼だ言っつて、また籍をいれて呉れやしないのよ。男って、腹の底は素人女を正妻に据えて、あたし達は言わば玩具にしたいのよ」と、愚痴をこぼす。

「そうなのネ。うちのコレもずい分前から、築地辺りにちんまりした小料理を出して呉れるとあれ程約束をして置きながら、またそれつきりなのよ。商売女って、いつまでたっても、浮ばれないものネ」はなしが身の上ばなしになるのは、ひかげ女のつね。

お民は脇坂に紅茶をいれながら

「お民さんからみな聞きましたよ。あの子は昔から氣立のいい子で、それや、評判だったわお民さんが脇坂さんを死ぬ程好きだって、言っていたけれど、ねえ、あたしも苦

勞して見たい」

と、凝っと脇坂の顔を見る。名妓で鳴したお米の、品のある顔と、身のこなしに、何とも言えない色気が漂って、お民とは違った。アジがあった。

「バカだから、本気にしますよ」

と、言い残して、脇坂は女中の案内で、二階の奥座敷に通された。十一時を過ぎた、湯の街熱海は、七彩のネオンが明滅していた。窓越しに明滅する夜景を見ながら、寢床を敷く女中に、

「若い妓を呼んで貰おうか。独りで寝るのも野暮だからな」

「まあ！ お殿方はようございますわね。お好きなことが出来て……女なんて本当につまらないわ」

「そんなことを言っつて、いいことをしているんじゃないのか？ どうもその顔じゃ男がただではおかないだろう」と、からかう。やっと二十位の女中は、ぼうッと頬を染めて、

「あたし見たいな田舎育ちの女、誰も相手にして呉れませんわ」

「へえ、いやに謙遜するじゃないか。何だったらこの僕ではどうだ？」

と、夜具を敷く女中を、丸いお臀を後から飽かずに眺める。

「あら！ ご冗談ばっかし……女将さんに怒られますわ。」

それこそ……」

「そんなに五月蠅いのかね？　ここの女将は？」

「いいえ、そうじゃないんですよ。女将さんがお客さんに、お気に召している様子ですもの」

「バカを言え、僕みたいなもの、あの女将が相手にする訳がないよ」

女中がお休みなさいませと出て行った後に、階下でひとつ風呂浴びた。いつかお民と熱海の伊豆山で泊った夜、隣りの浴場で上手に泣く女の声聞いたことが思出された。

広い大風呂で、のびのびと四肢を伸ばした脇坂は、なみなみと溢れて行く湯の流を聞きながら、お民は今頃どうしているのだろうと、この頃さっぱり姿を見せないお民のことを考えて見た。いつか別れなければならぬ運命にある二人ではあるが、それにしても、一人の女を親子で——モラルが許さない気がする。

お民もおやじの世話になっていればこそ、贅沢三まいで日を送る事も出来ようが、海千山千の新聞記者では、お民の普段着一枚も買ってやれない訳である。このままずっと、ずるずるべったりと、腐れ縁をつづけた日にや、いつかはおやじに露見されるに決まっている。すると、泣きの目に会うのはお民一人ということになるのだ。

あれこれと、お民のことを思案していると、カラカラッとガラス戸が開いて、誰かがお風呂にでも這入って来る様子、どうせ、この時間に風呂浴びに来る奴は、寝る前にひ

と勝負して、寝汗でも流しに来たのだろうと、後も振向かないで、背中を見せたきり、浴槽の中にいた脇坂は、ガラランと鳴る蛇口の響に、ふッと横を向いた。

「？………」

裸の背中を見せて、立膝でおしもを流している、白い、脂肪の乗切ったヘップバーン姿の女であった。こんもりと胸元が膨んだ、双の乳房は美事に突起していて、腰の線が素晴らしい。顔形はよくわからなかった。白いタオルで、前を覆うようにして、女はくの字になって、くるっと前向きに歩いて来た。

「あら！」

女は誰も居ないと思っていたのか、一瞬立止って顔色を変えたが、脇坂の方に軽く会釈して向う端の方に行った。前を見せないように、くの字になって、膝を曲げて浴槽を跨いだ。

脇坂はチラと視線を投げて、女の顔を見直した。

「果てな？　どっかで見た顔だが……」

思出せないまま、女の白い顔を見ながら、

「静かな晩ですね」と、視線をそらす。小雨の窓外が暗にとざされていた。やや横向きの女は、タオルで胸のあたりを包んだように、肩まで湯につかっていた。女は白い歯を見せて

「本当に静かな夜ですわ。昨夜なんかずい分五月蠅かったんですよ」

愛想のよい微笑であつた。脇坂はその声でハッと思出した。

「そうですか」と、脇坂は言つて

「お嬢さん、僕はお嬢さんと一度お会いしたことがあるんですよ」

「あら！　そうですか？」と、女は改めて脇坂の顔を見直していたが、

「どこか知ら？　あたし思出せないわ」

髪形は變つていたが、慥に数週間前、伊豆山の旅館で会つた女であつた。相当年輩の男と隣室の浴場で泣いた女――その娘である。

「いや、お嬢さんはご存じないかも知れません。僕だけがお嬢さんの顔をチラと見ただけなんですから」

「そう、でもよく覚えていらしたのネ」

髪形をヘップバーン姿に変えているので、あの時チラと見た年齢よりは、一ツ二ツふけて見えた。それでも二十は越していそうもなかった。誰かの二号さんなのか知ら？

と、脇坂は女の生態をあれこれ思案していながら、

「妹にそっくりでしたから、覚えていたんですよ。お勤めですか？」

「え？　ええ」と、女は曖昧に返事をして、

「そんなに似ていますの？　お妹さんと」

「そっくりですよ。お齡も、それに眉根のところの黒子まで……」

「まア！　いやあだわ」と、女は初めて心安そうに笑つた。伴れの男は別に姿を現わさないのので、

「お一人ですか？」と、訊ねた。

「ええ、父と……」と、女は言つて、

「貴方もお一人ですか？」

「仕事で先刻来たばかりです」

「大変ですよネ。お商売ですよ？」

「いや、新聞社に勤めているんです」

「あら！　そうですか？」と、女はさッと顔色を変えた。

脇坂は女の表情で何かあるかと睨んだ。

「じゃ、お先に失礼します」

と、浴場を出た。

帳場の女に宿帳を見せて貰つた脇坂は、

「これ、これだ？」思わず心の中で叫んだ。S銀行の公金壺千万円横領の係長田島專吉と、やはり同じ銀行の女事務員宮沢孝子の二人であつた。父娘と称しているが、二人はこの頃流行の老いらくの恋で、情痴の逃避行脚である。

脇坂は考えるとところもあるので、部屋に戻つた。枕元の電気雪洞に、青い灯が燈つて、並べた二ツの枕に、女が向う向きに顔を半分出して寝ていた。呼んでおいた芸者と思ひ、寝巻のすそを拵げ、パンツを脱捨すると、其まま夜具に潜込み女を後から抱寄せた。甘い香水の匂いであつた。

「こつちへ向かないか？　顔が見えないやね」

枕の下腕に力を入れて、片腕で女の胴を掬つた。くる

ツと女が前を向いた。女の顔を見て脇坂は思わず、

「あッ！ 女将さん！」

叫んだ。お米は茶目な黒い双ぼうを向けて、

「あたしじゃいけないの？」

と、びったり体を摺寄せ、裸の太股を割込ませて来た。

八、色じかけ娘

往年の女優川崎弘子そっくりのお米は、

「疲れたわ」

と、全身からすっきり力を抜ききった姿で喘いだ。膨んだ胸を大きくはずませて、息づかいがやっという風情である。溢れたお水が流れて白いシーツを汚していた。満ち足りたお米は、暫く、睫の長い眼を閉じて、悠っくりと余韻を楽しんでいるかのようにだった。間 的に動くのを、時々、収縮して応じていたが、

「ずいぶん久しぶり……こんなこと初めなのよ、破目を外して、あたし恥しいわ」

やっと思づかいもおさまったお米は、紅潮した顔で言った。人妻とも言えない、つつましいお米の情熱に、脇坂は一瞬戸迷った。何処にこんな大胆な情熱がそう審りながら、二人はまるで旧知の間柄のように、大胆な行動をしたのであった。

「でも、見直しちゃった。見たところ、とっつき難い程、

ツンとしているお米さんが——そんな情熱が秘んでいるなんて、意外だった」

と、あらわな双の乳房を見下す。張りのある膨らみが、生娘のように弾んでいた。

「貴方が悪いのよ。こんなあたしにしたんですもの。つい、いつの間に、破目を外しちゃって、お上手なのネ、誘いが……」

「とんでもない、僕なんか駄目ですよ」

「じゃ、お民さんに仕込まれたんでしょう？ あのひとつ、大人しい顔をして、割とその方は凄いいんじゃない？」

と、お民との間を擲う。激しくなった雨が、聲をいよいよ激しく叩いていた。

「案外あれで、お民は恥かしがり屋でね。滅多なことではないと裸を見せやしない」

「ふん、それじゃあたしの方が、その点凄いつてことになるのネ。ふふふ、でも、怒るでしょうね、あたしと貴方と、こうなつたと知ったら……」

「怒る訳がありませんよ。どうせ、いつかは別れるに決まっている仲なんだから……秘密を持つにしても、どうも、一ツ家の屋根ではね」

「そうね、でも、お民さん、がっかりするわね。死ぬる程貴方が好きだって、そういつていたわ。この齡に初恋だつて……」

と、お米は枕の下から、白いガーゼを出して、汚れたも

のを始末する。旦那を持って、初めての浮気であった。齡を老った旦那とは違った、若々しい脇坂の肉体に、お米は身を絞られるような疼きの後味が何とも言えず、

「ねえ、今度東京に行くわ。会って頂戴」

起上って、乱れ髪を直して、床の間のすがた見に向った。満ち足りた、若々しい自分の顔に、

「約束したわよ。あたしもお民さんに負けずに、浮気をした」

くの字のこし廻りに、贅肉がついていて、お米は品のあるシナが、その体に漂っていた。

やがて、立上ったお米は、足音を忍ばせて姿を消した。

お米の丸いお臀が消えて、仰向けになった脇坂は、疲労を覚えながら、タバコの煙りを天井に吹いていた。窓外は相変わらず斜軸に雨が降っていて、湯の街らしい深夜がやって来た。

「……………」

すーと障子が開いた。青い電灯に白い顔が向いて、

「お邪魔してよろしいでしょうか？」

辺りをはばかり小さな声の主は、今、風呂場であった娘であった。青い電灯を明るくして上半身を起した脇坂は、何となく予期していた表情で、

「ええ、かまいませんよ。さあ、どうぞ、こちらえ……」

と、裸の下半身の彼は、夜具をそのままにして、足元の座布団を示した。娘はその座布団を敷くと、

「こんな遅くすみませんわ。父のところにお客さんが来たものですから。あたし、そッと拔出して来たんですの。お迷惑なんでしょう？」

愛らしい小首をかしげて言う。脇坂はちよつと戸迷った。彼女がこの深夜、彼の部屋を訪れた真意は、もつと他にあった筈だがと、何となくはぐらかされた気持ちで、

「そうですか。かまいやしませんよ。冷えるでしょう。足をこの中に伸ばしませんか？」

と、布団の端を持上げる。娘はものおじせずに、両脚を入れて来た。冷んやりした足がちよつと触れた。公金横領の銀行員であることを脇坂に感付かれて、彼女が、どうぞ見逃し呉れと——と、期待していた脇坂は、飽迄もシラを切っている彼女が、どう出るかをアレコレと思案して見た。「棋をやり始めると仕末に困りますの。パチパチ響がして、寝られないでしょう」

娘は何気なしに、布団の下足を、そつと脇坂の足の間に差込んで来た。絹のような柔い感触であった。色仕掛けで脇坂に、自分達二人を見逃して呉れ——という策戦であると見て

「じゃ、この部屋で暫く休んで行かればどうですか？」

女中さんに、別にお布団でも敷かせましようか？」

「いいえ、いいんですわ。このままです……」

と、脇坂の足元にするすると下半身を入れて来る。どうせ色仕掛けの手だと見抜いた脇坂は枕元の電気スタンドを

青に切り換えて、

「……………」

思いきり娘の方に上半身を寄せ、ぐつと肩を抱寄せた。抵抗はなく、そのまま娘の体が彼の胸に埋って来た。

と、玄関の方で女中の声と共に、男の声が森と静まり返った部屋に流れて来て、自動車の停るエンジンの響。やがて、車が走り去った。脇坂は内心仕舞った！　ッと思ったが、素知らぬ風で、娘の襟元に手を入れて乳房を探った。伊豆山の温泉の中で聞いた、娘のせつなげな泣き声がふつと思出された。今夜の娘も、あの時と同じ声で泣くだろうか？　脇坂はそれのみが気になるのであった。

九、犬と戯れる女

夜来の風雨ははれ、海岸特有の紺碧の空には雲一つ浮いていなかった。熱海は桜花燎乱の真最中で、開け放された二階の窓外に、庭の桜木が五六本、枯枝に紅を散りばめていた。娘は端麗な白い顔をやや横にして、健康な鼻をかいていた。女学校を出て間もない齡頃の娘は、公金を横領した中年男に仕込まれたのであろう。お民やお米のように、芸者上りの女でさえ、ちよつと真似の出来ぬことをちゃんと知っていて、十八九の娘とは思えない娼婦振りであった。いつかは暗い運命に陥る娘とは思えない、無邪気さと、大胆な行為は、アプレ娘の典型的なものであろうか？　脇

坂は無心な寝顔を見せて柔い片脚を彼の太腿の間にはさんでいるのを、そつと離して起上った。疲労の為めであろう。ぐつすり眠っている娘を遺して、脇坂は洋服を着た。

早朝、政界の大立物である某氏を玉の井別館に訪ねる用件を持っている脇坂は、机の上に、

（昨夜、君が体を張って、旦那を逃したことは、何も知らぬことにする。が、天網恢々疎にして——ということわざもある。若さを無駄にせずに、狂える愛の逃避行は精算して欲しい）

と、書置て表に出た。

その頃——

東京の下北沢のお民の家では、旦那の脇坂大造氏が格子戸をカラカラッと開けて、

「お民！　お民！」

地声の大声で奥に向って叫ぶ。その声にお台所から女中のお久が、手を拭き拭き走り出た。つづいてお民が、朝化粧を了えた粋な着物のすそさばきも鮮やかに、

「朝から、大きな声で、パパったらすーっと上ってらっしゃったら……」

涼しい目元でにらんで見せる。女中が靴を仕舞う。二十五貫もある肥満体の旦那は、血色のいい、目尻の下った好色そうな目で、お民の後姿舐めるようにして、お座敷に通ると、

「メリーはどうした？　見えんようじゃな」

と、愛犬家の彼は、十五万円も出して買ったポメラニア種の牡犬のことを訊ねる。その声に縁先で鶏と戯れていたメリーが、跳んでお座敷に入ると、大造氏の膝に戯れかかる。

牡犬にメリーもおかしいが、呼びいい名じゃもの、どうでもええわと、そのままメリーメリーと呼びつづけている。犬の種類にもいろいろあって、番犬用、猟犬用、愛玩用と、その家々によって種類が違うがご婦人や、二号族、有閑婦人達は主に、愛玩用の犬を飼う。中には猫を飼う婦人も多いが、まあ犬を飼うご婦人は生活に余裕のある方で、重いものと言えば箸より重いものは持ったことのない、それこそ、旦那筋から蝶よ花よと、可愛がられている女達である。「お民、女世帯じゃ、さみしいじやろう、わしが犬を買って来て上げよう」

と、今年の正月過ぎに買って呉れた犬が、愛玩用のポメラニア種のおす犬である。愛玩用の犬としてはテリア種、コリー種と共にご婦人の孤閨を慰めるには手頃なもので、図体が小柄である割に、舌の長いことと、それに愛犬は亢奮すると、人間のそれに較べてやや太目で長いのが何より特徴であるので、未亡人やひかげの女達から、こよなく愛せられている。お上品に構えた礼儀の正しい犬で、ご婦人の白い指で觸ったりすると、犬とは思えない程、人間さまと同じものが、下腹からニョッキリと出て来て、ご婦人を満足させて呉れたりする。

旦那の大造氏は六十に近い年齢で、もう、若い時のように、女を満足させることは及びもないことで、気分はそのつもりでいても、何しろ体が言うことを聞かない仕末、そうかと言って、お民のような若い女を、そのまま寂しい思いをさせることは出来ず、考えて末に思いついたのが愛玩用の犬である。

「わしはこれまで、張型を使つて、何とか女を満足させて来たが、女はやはり生身の方がええらしい様子、そこで、噂に聞いた犬を飼つて、実験して見たが、ウフフフ、大層な喜びようでな」

と、同僚の繊維会社の社長の言に、

「ホホウ！ それやうまい考えじゃわい」

と、脇坂大造氏は早速一匹の愛玩用のおす犬を買つて、お民に験して見たのが今年の正月過ぎで、

「あら！ 可愛い犬なのネ」

と、抱上げた。旦那の下心を知る筈もないお民は、女中を映画にやって、玄關の錠を下した、嫉妬深い後妻の爲め、旦那は滅多に泊ることはなく、訪れて来るのは午前中か、それとも昼日中ばかりである。奥座敷に寢床を伸べて、朝化粧のまま寝巻に換えたお民が、旦那が買って来たポメラニアをお台所に出そうとすると、

「いや、追ッ払はなくともえて、ちよつとこちらに寄越なさい」

と、座敷に置たまま、大きな図体の旦那は裸姿に一枚の

ビジアマを引っかけて、お民の白い柔肌を抱いて

「この犬はな、普通の犬と違って、それ、その、男の役目を果す犬でな」

と、お民の体から股をぐっと押し上げる。掌の平一パイに成熟した女の、果実のようなうれきった丘に、硬質のザラザラした、ちやうど猫の腹のような感触と共に、お水で汚れた沼が既に亢奮していた。

「あら！ いやなこと言うわね、犬がそんなこと出来る訳がないわよ」

と、お民は枕元の猫より、やや大柄の犬の頭を片手で撫でながら、自分の体は旦那の好きなようにさせる。毛並の白い、手触りのよい犬の体が、お民には可愛くてならなかった。犬も尾を振って、クンクン鼻を鳴して、お民の顔に体を寄せ寄せて来る。

「それご覧、犬が馴れ馴れしく近寄るじやろう。この犬はな、小柄な割に舌が非常に長くて、それに、そら、お民のその柔い手で、犬の下の方をそろそろと揉んでご覧」

「こんなにですか？」

と、お民は旦那に言われた通り、犬の下腹部を探って見た。丸い玉が二つ、光った毛の先を、お民は柔い手で、人間と同じようにそろそろとまさぐって見る。

挿絵画家求む！

本誌の小説、読者投稿作品、文献資料などに応しい挿絵を求めています。リアルなもの、イメージふうなものなど、独創的な画風を歓迎します。

- (1) ペン、筆、鉛筆
- (2) ケント紙、画用紙、和紙。
- (3) サイズ

タテ描き—本誌—ページ大。

ヨコ描き—本誌1/2ページ大。

優秀な作品は本誌に掲載、次号より原稿を依頼するほか、他誌にも紹介、推選します。

○画料・一枚三千円

そのほか、カットも求めています。奮ってご応募ください。

〈宛先〉

現代芸術研究会・編集室

※郵送中に破損することがあるの
で包装にご注意ください。

退屈な午後

円谷喜美枝

くり返し言いました。

偶然、男女交際の相手探しを目的としたK通信が手元にあつたので、好奇心とアンニュイから「三十六才、百七十二センチ、六十二キログラムで中流会社の社長です。自分で言うのも変ですが、容姿は良い方ですし、女性には優しく親切です。秘密厳守出来る方と大人の交際を希望します。もちろん相応の事は考えています」と、メッセー

ジを載せた方に、会を通して連絡し、ホテルのロビーで会いました。

会ってみますと、成程、顔立ちは整っていて経済的にも安定しているように見え、ピンと張りつめた皮膚にはシワが見えませんでした。

彼は私のミルクティーに砂糖を入れてくれながら真白な、いやに印象的な二本の前歯を見せ「貴女のように若くて美しい人が来たのは初めてだ」と、

なつたのでしよう。素敵な方いませんでしたか。」

「ええ。皆オバアさんばかりで、貴女みたいな方はいませんでした」

「あらっオバアさんが来るんですか。何才位のオバアさんですか」

「四十位かな。一応三十八って書いてあつたけど……」

「四十でオバアさん!!」(何と早く女性に歳を取らせたがるのだろう。)

「で、割り切った交際はなさつたのですか」

「しました」

「好みのタイプではなかつたのでしよう」

「男として、わざわざ来て貰って、そのまま帰す訳にはいかないでしょう」

「お金は、お払いになつたのですか」

「払いました」

「いくら、お払いになりましたか」

「三万円です」

「あらっ、随分安いのですね」

「安いですが、普通はいくらなのですか」

「普通と言われても、分かりませんが、私の知人などは何年間か、五万円で売

り続けて、土地を買いしましたよ」

「では五万円お払いすればお付き合いして載けるのですか」

「まあ、多売の場合は薄利でも良いでしょうが、私は初めて売るので顧客もありませんし……」

「では、六万円ではいかがですか」

「私は今、五万や六万のお金に困っている訳でもありませんし、六万円ばかりでそんな事したら、私の方が損をします」

「では、いくらならお付き合いして載けるのですか」

「こんな風に値段を決めて割り切って付き合う位ならトルコへ行った方が良くはありませんか」

「トルコ嬢の場合は仕事だから事務的で味気ないんですよ。七万円ではいかがですかね、七万円をお願いしますよ」

「男女の力関係って、最初と最後では違います。たとえ最初に七万円載いても、二回目も三回目も、七万円載えるかどうか分かりません」

「では、八万円ではどうですか」

私が考え込んでいると、「ねっ、八万円をお願いしますよ。二度目からは、

もつと安くなるのでしよう」最後の言葉聞いて、かなり興奮めました。私は真面目にこのやりとりを続ける事に腹を決めました。

「私の場合は、いくら回を重ねても五万円以下にはなりませんよ。自分を守る為です」

「それでは近いうちに八万円で、お願いしますが、貴方は日曜以外はダメなのですか」

「そうです。ウィーク・デーの夜は仕事があるので、仕事を休むと、保証やら罰金で二万円損をするのです」

「では、その二万円を払えば良いのですか」

私はなるべく、引き延ばしたかったので、「いいえ。それでは貴方の負担が大きくなりますから、もし付き合うのなら日曜日の昼間にしましょう。今週の日曜日は用事がありますから、来週までに、八万円払う価値があるかどうか良く考えてみて下さい。私の方でも、もう一度考えてみます。」

八分程遅刻して店へ入り、客が来るまで、ぼんやりと八万円で何が買えるかを考えてみました。

靴とハンド・バッグと時計が買える。私は、それから、型や色、どこで買ったら安くて良い品が手に入るかなどを考え、三万円で靴二足。二万円でハンド・バッグを一つ。三万円で時計などと考え、その後で、避妊と病気の事を考え、憂うつになりました。

お金で付き合う場合、男性はスキンを付けてくれるのだろうか。この事を、もう一度電話で確認しなければ……今は恋人がいないのでピルも飲んでいなければ、ビジネスでセックスをするとしたら、客は避妊の負担まで負ってくれないのかも知れないから……。

万一、子供が出来たら……八万が何になろう。オギノ式の日数計算などをしているうちに、客が来たので、考えは一時中断されました。

翌日も、彼のセックスはノーマルだろうか、もしかしたら、サド・マゾかも知れないなどと考え、気分は憂うつになるばかりでした。電話が鳴る度に彼ではないかと恐れしました。

二、三日後、例によってグラグラ煮立ったお湯をポットに注ぎ、ミルク・ティーを飲むとしている所へ電話が

鳴りました。

「八万円をお願い出来るのでしょね」

「貴方の住所も分からないのに……もし、お付き合いをした後で支払っていただけなかったら困ります」

「それは、前金でお払います。もう時間を決めておきましょうか」

「いいえ。もしかしたら日曜日はコンディションが悪いかも知れませんが、又金曜日あたりに電話を下さい」

ゆっくりとミルク・ティーを飲みながら考えました。私はもう、自分の人生に“愛”を信じてはいない。たとえ、私を“愛”している“という人がいたとしても……。幾人かの男性と、それぞれに何十回くり返したでしょう。

「愛しているよ」

「ねえ、私を愛して下さい」

「もちろん愛しているよ」

「いつまで……」

「死ぬまで……」

言葉だけの愛が何になりましたか。私達は、お互いに愛し合っていない事を知っていて言葉で空洞を埋めようとしていたのかも知れません。が言葉で埋められるものは、互いのロマンチシ

ズムだけではないでしょうか。生活の安定や、地位や虚栄心の満足の下に位置する感情に“愛”という立派な名前をつけてしまったら、いつか奇跡が起こって、本当に“愛”という言葉を使いたい時に困ります。自分とは縁のなかった“愛”、多分生涯縁のない“愛”ですが、やはりこの言葉は大事に大事にしまつて、共に土の中深くに眠りたいと思うのです。

私は滅入った気持ちを引き立てる為に、過去の恋人の一人、妻帯者のNを呼び出して、意地悪をしようと思いつきました。私がお金でセックスをする事を知ったら、彼も少しは傷付いてくれるだろう。そうだハツタリを付ける為に、二万円ゲタをはかせて十万で売ると言おう。

「そんなにお金を払ってセックスをして、あちらは、どんなメリットがあるのかしら……」

「普通は、セックスって“愛”によつてするものだと考えられている所を、“お金”でセックスをするのは新しい刺激なのかも知れない。だが、十万とは安いなあ。」

ああ、Nを傷付けて楽しもうと思つた私のもくろみは失敗に終わり、又昔の焦立ちが心に広がって行きました。“愛”によつてセックスをするですって……一体、貴方の愛が何になるの。決して行動しない愛が……それならせめて私の商品価値に驚いて、「よくやった」と、肩でも叩いてくれれば良いものを……「安いですって!!」

彼は傷付きも、驚きもせず、私の大嫌いな鱈の焼いたのを、おいしそうにパクパクと食べていました。



S 子の匂い

川田 大

ベットで身悶えている女。縛られたい、縛られたい——とナワを握って四苦八苦している。足を縛り、手も縛ろうとするが、手は足を縛るようには縛れない。しょうがないから胴にぐるぐると巻きつけて、そのナワの端を手で持って縛られたつもりになっている。何というわびしい風景だろう。女もすぐいやになったらしくナワを放りすて、大の字になって両手をうしろにまわして悶えている。

SM映画やビデオでこんなシーンを見たたびに私は非常にかなしい気分になる。ムリにもSかMかと大別しようとするなら、やはり私はMじゃなくSだと思うのだが、聞くところによると、他人を唯々いじめていじめ抜くところにだけ喜びを覚えるというサディストもいるそうである。異性を苦しめ、困

らせるところに快感をもつと言った悪魔のようなのがいるかと思うと、相手の気持などどうでもよいから人形でもよいのだというのもいるという。私はそんなサディストではない。

あくまでも、縛られていじめられる苦しみをエンジョイするマゾヒストの心を心としていじめる——というサービスをしようというサディストなのである。むろんサディストの大半がこんなタイプであればこそ、本誌の読者ポストやそれに類した交換欄で、マゾヒストの異性との交流をよびかける声が殺到しているのであろう。

が、御承知の通り、なかなかうまく行くものではない。人間がマゾヒストになるのはそのサディストに好まれる性別、容貌、体付といったものと無関係なのであるから。ヒゲを生やしてい

自衛隊の将官だろうと、鬼軍曹だろうと、女でもその男の好みでない顔付をしていようと、年増であろうと無関係にマゾになってしまうのである。

されば、マゾヒストなるものに奉仕することをもって本命としている私としては自分の好みを一切白紙にして、ベットの上で縛られたい、縛られたいと身悶えているMの老若男女を縛ってやらねばならないのである。そう考えて随分血のにじむような努力をして来た。そして、遂に成功したのである。自分で自分を緊縛する方法に。

自縄自縛を成就させた仕掛品は、N電器で製造している足温器のY字型コードであった。左右の電気ブーツに差し込まれる、Y字の上半の二つに分れているコードをくくって輪を作り、頭からかぶり、二の腕を含めた胴を縛る。Y字の下半の一本のコードは背中にしたらしていて、かつ後ろ手に廻した両手首のあたりを縛るにしように、途中に輪を作っておく。そこへ両手を入れて、床に垂れているコードを足で引張るとキュッとしまってしまう。途中に作った輪が二重ぐらいでもほどくの

かなりかかる。三重だと三十分はかかる。もうダメかと思った。二度と三重にする気はしない。(二の腕を含めた胴を縛るコードを別につけ加えるとほどくのがよけいラクでなくなるだろう縛られる——というのはそれだけでもこんなに体力を消耗するものかとつくづく驚き入った次第である。

とにかく、生れて始めて後ろ手に縛られたのだった。私は自分が男であること、それも五十歳近い、虚榮に満ちた男であることを忘れた。さも、うれしければ笑い、悲しければ大声をあげて泣くことのできる小娘でもあるかのような錯覚に陥ったのだった。そんな小娘のあたしが縛られている。運命にほんろうされて泣き叫んでいる。許して、許してと言いながら暴行されている。それはこの上なく安らぎに満ちた、この上なく快いことである。

それが、いましめが解かれ、現実の私に戻るや、ずしんと重い鎧兜に身をかためられる。武田信玄のような髭が生えて来て、一国一城の主としての責務と天下取りの野望のためにはどんなに非情な犠牲を自他に強いることをも

辞さぬ——といった人間に戻ってしまったのである。

そういう平常の自分に戻ると、縛られて小娘のように泣き叫んでいる自分の姿など、思うだけでも身の毛がよだつのである。言わんやそれを他人に打明けるなぞ死んでもできぬことなのだ。それは或る程度推察しえていた。が、実際に縛られてみて、その快感、恥辱が想像以上のものであることを思い知ったのだった。

ところで私、どうしてこんな、マゾヒストの心を心としたようなサディストになってしまったのか——と言うと、S子のためである。もう二十年も前に或る町の女子高校で教えた生徒である。私と六つぐらいしか違わないからもう四十歳を過ぎているのだが、私のまぶたに灼きついていいるのはセーラー服の少女の姿でしかない。

色白で非常に清楚な可憐な感じの子であつたが、かわいそうに非常に強い体臭をもっていた。特に梅雨の頃がひどかつた。自分はそのクラスの副担任

もしていたので毎日行つたが、廊下から匂つていて目をつぶつていても行ける感じであつた。嗅覚というのに私が人一倍敏感なせいもあつたろう。

当時の女子高校生はゴム引きのレインコートを着ていた。通気性の悪いゴム引きは汗をかくことが多いらしく教室のうしろの壁や廊下にずらりぶらさげられている。色とりどりのどれもがむれたような匂いを発散していた。多少とも体臭のある子の着ているのはゴムと汗の匂いにまじつてそれが一層拡大されていた。しかし、その中にS子のはなかった。彼女の着ている紺のゴム引きは便所のわきの汲み取り口のところに掛かつていた。

彼女の父はいろいろ事業をやっていたが、清掃社もやっていたのである。町の有力者で市議長を勤めることもあつた。川に排液をタレ流しさせたりして甚だしく評判が悪かつた。彼女の体臭はその父親ゆずりのものであつて、それだけに一層肩身の狭い思いをしているらしかつた。家に帰つても女グセの悪い父親に代つて継母にいじめられているという。

非常に無口で、夏休や冬休に提出させた日記にもあまりはかばかしく突込んだ感想を書く方じゃなかった。が、やがて私の彼女への関心というか、好意というか、そういうのを察知しえてか、三年生になってからはいろいろと悩みを訴えるような調子に変わって来た。そして、私もそれに対してこちらの感想をそのノートにつけ加えた。三年の冬休には次のような言葉を誌してやったのだった。

「人間の苦しみというのは物理的にでなく、心理的にあるものだ。他人の目からは何一つ不自由のないような羨ましい境遇にありながら自分は不幸だとか、つらいとか強く意識している人もいる反面、どう見ても悲惨だ、かわいそうだといった境遇でも耐えている人もいる。むしろ鈍感でそうなっている人もいようが、感受性の強い人でも耐えている人もあるのだ。」生きることは「つらい」ことの連続ゆえ、生を満喫するためにはつらいこともエンジョイせねばならぬ」と。

ところが、その後間もなくS子は家出して自殺をはかった。さいわい未遂

に終わったものの、父親は外国旅行中で、継母は彼女がそうになったのは学校の責任だからと身柄をひきとるのはそちらにさせろと警察に言ったという。資生堂だか、カネボウだかの美容教室に写真判定でS子がモデルに選ばれたのが原因なはずだというのだ。そこで、担任の女教師と私がその、自殺をはかった温泉町まで赴いた。

病院から旅館へ連れて来た夜、クリスチャンでもある女教師はS子にいろいろと自殺の罪深さを教えていたようだったが、私はもうこれ以上何も言うことはなと思います、黙っていた。ところが、その夜半、「先生、先生」とよぶ声に目をさまし、戸をあけたらS子が立っていた。「先生、お願いです。私を縛って下さい」と言うのである。仰天した私は彼女と同じ部屋で寝ていたはずの担任をよぼうと立ち上がった。泣いてあばれ出した。そこでやむなく彼女を言うままにうしろ手に縛った。丹前の帯で、もったときつくきつくと命じながら縛った。

私は全く気が気ではなかったが、彼女の方は落着いて来てポツリポツリ語

り出した。先生が日記に書いて下さった意味がようやくわかりました。そうしたら、むしろように先生に縛っていただきなくなつてたまらなくなつて。わたし、もう決して死のうとしません。死にたくなつたら又縛っていただきま

す。それに対して何と答えたらよいか、わからなかった私はこんなことを言つてしまった。医学が急速に進歩した今、整形外科、美容外科の体臭を消す技術も相当なものになったと聞いている。けれどももしもあなたからこの匂いが消えてしまふとしたら、とてもさびしい。私はこの匂いが好きなのだ。

すると、突然S子はコロンとうつ伏せにつんのめつた。あわてて彼女を縛ったひもをほどいて抱きおこしたら、赤くなっている。畳が濡れていた。

それは私にとって大変な衝撃であった。確かに私はいやがるS子をムリやり縛って、そして陵辱した——なんていうわけではないがそれも物理的に言つてそうしなかったまでで、心理的にはそれ以上の乱暴をしてしまったのである。教育者にあるまじきとんだこと

をしてしまったと寝ても寝れないような気持ちで、S子と顔を合わせるのが恥かしくできるだけ避けるようにした。

それだけに、それから十年ほどたって、S子がSM雑誌のモデルをしていると聞いた時には本当に驚いた。卒業後すぐ上京したのは知っていたが、まさかSMのモデルになっているとは思わなかった。それにしても、それだけ——つまり誰かに縛ってもらいたくなるだけ——つらい生きざまをしているのではないかと心配でならなかった私は書店でSM誌らしいのを見かけたたびにS子がうつっていないかと立ち見するようになった。

女が裸なんぞで縛られているグラビヤをパラ、パラ、すごい勢いでめくっている、よくうさくさそうにこちらを見ている人の気配を感じることがあった。が、私は自分はどう思われてもよいと思った。とにかくS子さへ無事であればよい。もしや自殺したらと気がかりで、そのコーナーにあるSM誌を全部点検せずにいられなかった。しかし、どれにもない。写真が匂いも伝えられるものであったらと唯々うら

めしかった。

遂にたまりかねて、或るルートから調べてもらったところ、S子はどうにSMモデルをやめていたのだった。が、私のSM誌との縁は切れなくなった。S子によく似た子の縛られている写真のある雑誌は買って帰るようになった。そして、S子のための（S子のようなマゾヒストのための）自縄自縛法を開発しようとひたすら努めたのである。

その自縄自縛が既に述べたN足温器のコードによって成功を収めたのは昨年十一月ごろであった。早速一度頼んだことのあるルートに又依頼してS子がどこで何をしているか調べてもらったところ、実にもって信じられぬ情報を送って来た。彼女は何とサラ金会社の社長になっていたのである。しかも同じサラ金でもかなり悪質の、非道なもので、暴力団員をもやとっているらしいという。

それを読んで気を失ないそうになるほどガツクリした私は、長距離電話して彼女の体臭のことをきかずにいられ

なかった。

「ええ、すごい体臭だそうです。みんなから手術して、代りに入れ墨でもしたらどうかと勧められても、わたしはこの匂いが命なのだって言っ



母と女医

影 浦 栄

(一)

私が小学生のとき、といつても三十数年前の話ですが、当時住んでいた地方都市で異常な体験をしました。

そのころ私の家は、両親と父の母親である祖母、私と年齢の離れた妹、それにお手伝いさんを置いた六人暮らしでしたが、父は東京で仲間と始めた会社が忙しく、一カ月も二カ月も家を空けたままにすることが多かったのです。実は、私の産みの母は、私が物心つかないうちに死亡して、育ての母は父の後妻として迎えられた人でした。

日本風の美人で、その当時、まだ三十歳を少し出たばかり、継母と子供のあいだに存在するという感情のわだかまりもなく、私たちの母になつていました。

たしか小学校四年生の頃でしょうか。

私は、自分の母のところへ、近所のお医者さんが往診に来ていることを知り、四月のある日、まだ新学期が始まったばかりで、持業も昼前で終わって帰ってきた日、近所の遊び相手が見つからずに所在なく自宅の周囲をうろついていた私は、黒い革カバンを提げた女の人が自転車停めて、私の家の玄関を入っていくのを見ました。

その人は、相田さんという名前で、小さな個人医院を開業しているのを知っていました。近所の大人たちの話では、産婆さんをしていたのですが、のちに医専に入学して、医師の資格をとった努力家で、お産の世話もできるし、ちよつとした病気の治療もしてくれるので、結構この町では重宝がられていたようでした。

私も道路で遊んでいるとき、何度かこの相田先生が往診の途中らしく自転車を滑いでいるのに会いましたが、四十歳前後のふっくらした顔立ちが、やさしそうな女医さんだと印象に残りました。そうしたとき、荷台に乗せている黒カバンには何が入っているのか、往診先でどんなことをするのか、など気になったものです。

その女医さんがわが家に入ったので、すから私の心は平静さを失いました。その日、父はむろん不在、祖母も外出しているのを知っていましたから、家の中でお医者さんに用があるといえは母しかおりません。

だが、母は病気の様子もなく、つい先刻、私にお昼を食べさせてくれたばかりです。これから何が起るのか、好奇心にかられ、私は玄関から上から、裏口から縁側づたいにそつと母がいつも使っている座敷の隣りの部屋に忍びこみました。

そこは空襲を避けて、親戚の者が預けた家具や衣装箱がうず高く積まれているため、陽もほとんど入らない部屋でしたが、私は時折入りこんで、古雑

誌から漫画の拾い読みをしたり、友だちから借りてきた冒険小説を読んで空想にふける場所にしていました。タンスのあいだに耳を入れると、板戸の間から隣りの座敷が手にとるように見えることも私は知っていました。

育を立てないように潜りこんで、光の入ってくる方向をすかしてみると、私は思わず息を吞みました。座敷のほぼ真ん中には蒲団が敷かれ、その上に母が仰向けに寝ているのです。普段着にしていた和服は、帯をとり、いつでも前がはだけられるようにしてあります。

ちやうど私の視線と向い合う位置に、相田先生が坐って、折しも聴診器を耳にはさもうとしている時ではありませんか。黒いゴム管が生き物のように、くねくねと揺れ、白い象牙の先が女医さんの形のよい耳にさしこまれている。あの光景は、今でも私の頭の中にしっかりと焼き付いています。

女医さんは手をさしのべて、母の着物の前をはだけると、胸にゆっくりと聴診器の先を押しつけていきました。少し半眼を閉じるようにして、どんな

小さな音でもとらえようと耳を澄ましているようでした。母も黙って先生の顔を下から見上げるようにしているのですが、眉のあたりに恥しそうな表情が漂っているのがよくわかりました。

胸全体に聴診器を当て終わると、女医さんは指先で母の胸板をポンポンと打診してから背中中の診察に移りました。今度は寢床から起き上がった母は、着物を肩から滑り落すようにして脱ぎ、その真っ白な背中を露わにしました。本当に母の背中はいきれいで、夏の行水のおりなどに、子供の私でさえ、ふと見惚れてしまったのを憶えています。が、今、それが無防備な状態でさらけ出され、聴診器の黒いゴム管が延びてきているのです。

「大きく呼吸をなさって……。はいお止めになって」と指示を与えながら、女医さんは背中全体に聴診器の象牙の部分で当てていきましたが、よく見ると、使いこんだためか、そこがあめ色に変色しているのがよくわかりました。背中が終わると、母は再び着物に肩を入れましたが、前をはだけたまま、蒲団に仰向けになりました。先生は膝を

立てさせ、着物の下に手を入れるようにしながら、母のお腹を押ししたり揉んだりしました。

私も以前、カゼをひいて病院に行ったとき胸の診察が終わると、看護婦さんにレザー張りの診察台に乗るよう指示され、そこに寝た途端、いきなり若い男の先生が、パンツの間に手を入れるような感じで、お腹を掌でグイッと圧されて、驚くと同時に、何かくすぐったいような、変な気分になったことがあります。それを窃視している目の前で、母がやられているのです。

しばらく腹部の触診を続けていた先生は、また聴診器を取り上げ、耳にはさんで、母のお腹を診察しました。それが終わると、その日の診察は終了したらしく、あらかじめ準備されていた洗面器で手を洗いながら、母に何か注意を与えていましたが、私はその場にいたたまれない気持ちで、音を立てないようタンスの隙間から抜け出ると、また裏口から外に出て、懸命に走って、近所の遊び仲間を見つけ、日が暮れるまで遊びました。

家に帰ったとき、母は白い割烹着を

つけ、夕食の準備をしながら、鉄砲玉のように遊びに出ただけでは困るじゃないのと、叱言を言いましたが、私はつい数時間前に目撃した光景が思い出され、感情を押し殺すのに苦心しました。女医さんとたった二人で、肌をさらし、羞恥の表情を浮かびながら診察を受けていた母と、いま目の前で毅然とした賢母ぶりを発揮している母とは、どうしても同一人物とは思えず、さっき見たのは白昼夢ではないかという気さえしてきたのです。

(二)

診察を受ける母の姿を窃視して以来、私は何度もその光景を心の中で再現しました。診察の手順や、そのときの患者である母と、医師である相田さんの表情を甦えらせると、性器が硬くなってしまうのでした。まだオナニーなど知らない頃ですから、発散、処理の方法もなく、時どきぼんやりして、学校では教師から、何を考えこんでいるのかと注意されたこともあります。

春の盛りになってくるにつれて、私はどうにかして、もう一度、先日のよ

うな場面が見たいと思い続けましたが、やがて一つの因果関係に気がつきました。

祖母やお手伝いさんとの対話から、母のお腹には新しい生命が宿って成長していることがわかりました。相田先生の往診はそれと関係あるのではないかと、別に病気でもない母を観察していて、私はそう直感しました。また前回の往診が、祖母の不在中であつたことを考えると、同じような事態が今後もし起こるのではないかという予測も成り立ちます。

私の祖母は、大体月に一回ぐらいの割合で東京の親類へ泊りがけで用事を足しに行きますが、相田さんが家に来るとしたら、その日しかない、私は考えたのです。

約一カ月後、祖母が東京に出かけました。朝、それを知った私は授業が終わると、わき目もふらずに家に帰りました。すでに往診が終わっていないことを願いながら。そして友だちと野球をしていると言つて外に出ましたが、家に通じる路地を見張りながら、誰かが入ってくるのを気にしていました。

晩春の一日が物憂く暮れかかるころ相田さんの自転車が路地を曲がるのを見た私は、何回も練習してあつた通りに、例の部屋に忍びこみました。この機会に備えて、板戸のすぐ近くに身が寄せられるように空間もつくっておきましたし、話し声も聞き取れるよう目立たないところに隙間を設けておいたのです。

思ったとおり、いつの間にか座敷には蒲団がのべられ、洗面器にはお湯と石鹼とが用意され、相田さんを迎える準備ができていました。すぐ間近で二人の会話が聞こえます。

「遅くなってごめんなさい。今日は急患があつたものですから」「いいえ、まだ夕食の仕度には間がありますから」「その後、順調ですか」「ええお蔭様で」「今日はお宅が往診の最後ですから、ゆっくり診察させていただくわ」「あら、ええ、よろしく願います」

こんなやりとりがあつて、相田さんは黒カバンから診察に必要な医療器具を取り出します。聴診器が出てきて、畳の上に置かれたとき、私はドキドキしました。そして相田さんは真っ白な

診察着を地味なスーツの上に羽織りましたが、こうすると、急に顔付きが引き締まり、神々しいような美しさが醸し出されます。母は着物を脱ぎ、ピンクの縦縞の入ったタオル地の寝巻にわざわざ着換えました。そのとき腹帯を解いたのを見て、やはりお腹が大きくなっているのがわかりました。

最初に健康状態の問診から始まり、脇をちよつとめくってみたり、舌を出させてみて、それから胸の聴診と打診、背中の聴診、腹部の触診に移る順序は前回と全く同じですが今度はお腹の診察が念入りなのがよくわかりました。

ただで圧すだけでなく、両手でしごくように撫でてみたり、片手で下腹部からお脘の方向に押し上げてみる。後年、産科の専門長で妊婦の腹部触診法にはレオポルト式という一定の手順があるのを知りましたが、相田さんは、これを忠実に実行していたのです。さらに母の少しふくらんだことが、私が窃視している位置からもわかるお腹には、胸を診たときの聴診器でなく、真黒なラッパのような形の器具を使い、その広がった方向を白いお腹の上にび

ったりつけ、反対側を相田さんは耳に当てました。

これも後に知った胎児の心音や腸の雑音をとらえるためのトラウベ式聴診器というものだったのです。

それにしても、女医の相田先生と母とのあいだの空気には、診察という医療行為よりも、まるで二人が戯れているような、なまめかしいものがありました。一つ一つの手順もとても丁寧で、私、学校の身体検査で受けた診察とは比べものになりません。正確に時間を測っていたわけではありませんが、三、四十分は時間が流れていたのではないでしょう。

こうして祖母の不在、相田先生の往診、母の少しずつ膨らんでいくお腹の診察という図式は決定的になりました。私はその日を心待ちにして、何はさておき、隠れ部屋にこもって、一部始終を窃視し、次の機会まで、何度も反すうして、秘かに興奮を味わったのです。だが、これも大人たちの話から、母は出産は、その都市にあった大学病院ですることと決めていることがわかっていました。そうである以上、定期的

な検診も大学病院で受けていたはずで、す。では相田先生の往診はどんな意味を持っていたのでしょうか。

これは、成人してからの推測ですが、相田先生による往診は、母にとっては暗黙のうちに成立しているレズビアン・ブレイに似たものではなかったのでしょうか。当時、自宅には余り帰らなかった私の父は、別の女性と同棲に近い関係にあり、夫婦は危険な状態であったと、これも後でわかりました。

そうした状況下で、何かの機会に母は、気心の知れた同性に身体の上を診せて、その間にセクシーな感情を味わうということをしてみる気になったのではないのでしょうか。だから祖母が確実に不在になる日をねらい、相田さんに来てもらった。賢く苦労人の相田女医は、母の心理を見抜き、とくに診察を念入りにして、ある程度の満足を与えるように仕向けたのではないのでしょうか。

もしかすると、相田先生は、母のセクシーポイントを知り、聴診器の当て方や、触診などの純然たる医療行為の中で、適当に刺激していたのかも知れ

ません。母の時折みせた恍惚とした表情や、私たちには絶対に見せなかった女らしい羞恥にあふれた動作を思い合わせて、そう思えるのです。

(三)

私は、このようにして、数回にわたって往診場面の窃視を続けていました。最後にそうした中で最もショッキングだった場面を書くことをお許しください。

あれは夏も終りころ、母のお腹も西瓜のようになり、立居振舞も大儀そうに見える頃でした。祖母は東京へ、私は夏休みとあって、今日こそは朝から相田先生の訪問をじっくり待てると思い、心した日、やはり、黒いカバンを乗せた自転車は現われました。

たしかその日は、昼下りのまだ早い時間で庭では蟬の声が激しかったようです。私はいつもの場所から、どんな動きも見逃すまい、どんな会話も耳に残そうと、息をひそめ、口の中がカラカラに乾くのを感じていました。

母は朝顔の模様を染めた、糊のきいた浴衣に細帯を締め、白いシーツの上

で診察を待ち受けていました。型通りの診察が進み、相田先生は真白な小さな山のように盛り上がった母のお腹を撫でまわしていましたが、下腹のあたりで手を止めました。

「奥さま、お通じは？」「ええ、このところ少し滞ってるようですが……」
「何日ぐらいないのですか？」「ええと、あのう今日で三日ぐらいかしら」「この張り方じゃ、もっと滞っているのじゃないかしら」

相田先生は、何度か母の下腹を圧して、その張り具合を確かめてから、膝を立て、腰を持ち上げるよう指示しました。私の視角からはよく見えませんでした。どうやら相田先生は母の肛門に指を入れていたようです。

「入口の近くで便が固くなっていますよ。このまま放っておくと、便通がいよいよつきにくくなりますよ、お浣腸しておきましょう」

と言う相田先生に対して、母は全身を恥しきで染め上げたような風情で一応は抗ってみせました。それでも、いまお通じを貯めておくと便秘が癖になるし、臨月に近い大切な時期に悪い結

果を生じるからと説得され、浣腸を受けることになりました。

相田先生は、洗面器のお湯で石鹼水をつくると、母に膝を立てさせ、静かに呼吸させました。そうしながらガラス製の器具に石鹼水をたっぷり吸い上げたのです。私は、それまで浣腸といえば、幼児がされるイチヂク浣腸とばかり思っていたので、大きな針のない注射器のような浣腸器は初めて見ました。

脚を持ち上げ、口でハアハア呼吸している母の肛門に、先生は浣腸器を挿入し、内部の石鹼水を注入しました。そのままの姿勢で二本分の腸が行われたのです。

それが済んで、仰向けに戻され、浴衣の前をかき合わせた母に対して、相田さんは、片手でお腹をマッサージしていたようです。もう一方の手は、たぶん肛門に置かれ、脱脂綿でその部分を抑えていたのではないのでしょうか。
「できるだけ我慢なさってくださいね。腸の内部がゴロゴロいって、どうしても我慢できなくなったらお手洗に行ってください。その方が一気にお通じが

きますから……」そんなふうに言っていたのが耳に残っています。

数分後、母は起き上がったて急ぎ足で厠の方角に消えました。残った相田先生は、浣腸器を片づけていましたが、私はその場に飛び出して、僕にも浣腸してと懇願したい衝動を抑制するのが精一杯でした。

厠から戻ってきた母が大きなお腹をさすりながら「すっかり出たようです。張っていた感じが消えましたわ」「それはようございました」と相田先生と対話していた声が、蟬時雨と重なり合っていました。

さてその出来事あたりを最後に、私の診察窃視も終わりを告げたのです。間もなく母は大学病院に入院して、無事妹を産みました。退院後、相田先生は助産婦の仕事として、新生児にお湯を使わせに来ましたが、もうこの時には祖母もいたし、診察はありませんでした。私は何か大切なものが自分の目の前から失われたようで、残念でたまりませんでした。

それから数カ月後、父との仲が和解したのか、一緒に住む方が得策と判断

したのか、私たちは一家をあげて東京に移り、父と暮らすようになったため、相田先生の姿を見かける機会も失われました。

だが、私は、あの数回の窃視が与えたショックから戻れませんでした。中学生になってオナニーをおぼえても、頭で想像する場面といえ、いつも女医さんの診察や、腸でした。母と相田さんの関係を、好みの映画女優やよく見かける近所の女子大生に置き換えることはありましたが、いつまでもその呪縛から逃れることができませんでした。

また街でお腹の大きい女性を見かけたり雑誌の挿絵などで聴診器を持っている医師や看護婦の姿を見ると、胸が高鳴って仕方ありませんでした。

十数年前、私にとって優しい育ての親だった母は世を去りました。おそらく女医の相田先生も亡くなったのではないかと思われまふ。この二人が展開した妖しい光景は、私に痕跡を残し、今日に及ぶ、姪婦嗜好、浣腸への興味、診察を窃視したいという願望、あるいは女医さんに対する特殊なあこがれ、

白衣や聴診器に対するフェティシズムとして定着したのです。

十代の終わりから二、三十代にかけての体験については、つぎの機会に告白するつもりです。

挿絵画家求む

本誌の小説、読者投稿作品、文献資料などに応しい挿絵を求めています。リアルなもの、イメージふうなものなど、独創的な画風を歓迎します。

- (1) ペン、筆、鉛筆
- (2) ケント紙、画用紙、和紙、サイズ
- (3) タテ書き—本誌—ページ大。ヨコ書き—本誌1/2ページ大。

優秀な作品は本誌に掲載、次号より原稿を依頼するほか、他誌にも紹介、推選します。

○画料・一枚三千円

そのほか、カットも求めています。驚ってご応募ください。

へ宛先

現代芸術研究会・編集室

※郵送中に破損することがあるの

女体エビ責地獄

(滝れい子・画)

深夜の温泉場で展開される妖しい悦唐絵巻、人気のない脱衣場で女中の幾代が湯で磨きあげた、柔軟な姿態を番頭の祐吉から責められているのだ。全身を二つ折りになるまで締め上げられても、悲鳴どころか呻めき声さえたてぬところを見ると、今まで存分に責められた経験を持つ幾代だろうと思われる。



危険な関係

前篇

◇女医と少年

和夫は十八の少年である。高等学校に入学したその年の夏、胸の患ひで休学しているので、毎日叔母の家でブラブラしているが、叔母の雪子は岐阜在の和夫の家に帰郷させようとかとも思っている。叔母にはなっているが、雪子は今年二十六の処女で、神田のS病院の内科女医として毎日神田まで通勤している。一日中、家を空けておくこともならず、そうかといって女中も雇へない身分であるところから、和夫を留守番としてずっと家に置いておきたかった。万一のこともあるまいが、後で和夫の父母から何か言われでもしたらそれこそ一大事と思っていながら、も、つい手離せないでいる訳である。

思春期の少年である和夫は、叔母の

雪子が朝、病院に出て了うと何の用事もなかった。時々、雪子からお使錢を貰う代りに、「和夫、洗濯しておいてね。シューミーズとブラウスと、それからこの寝巻も頼むわよ」

と頼まれる、いや、頼まれるというよりはチャツカリ屋の叔母なのである。朝の出掛けに叔母が脱ぎ捨てたものを洗うつもりで、洋服箆笥の乱れ箱を探している、雪子が脱ぎ捨てて丸めてあるズロースがあった。ズロースや乳バンド類は何時も叔母が自身で洗うので、和夫の目の届くところには一度も置いてないのに、仕舞ひ忘れたのか、白いメリヤスのズロースが丸めたまま投げられているので、何気なしにそれを手にした和夫は、ドキンと胸が鳴った。それこそハツと心臓が止る程胸を抑へて辺りを見廻した。和夫はかねてか

ら叔母の雪子に異状な尊敬と興味を持っているのみか、雪子の白い肌や、むっちり盛り上った乳房、丸味のある恰好のいいお臀の廻りに、何気なく視線を投げることもあるが、それこそ眩暈がする位に和夫の全身の血がカツカツと熱くなるのだった。雪子叔母は晩秋から冬にかけて、それこそ寒がり屋であるため、夜、安火か炬燵か湯たんぽのつもりで和夫を抱いて寝る。

「和夫、裸でなくちやちつとも暖くならないわよ、裸になってよ」

と寝巻は勿論、パンツまで脱がせる。和夫とて冬の真最中に裸で寝るのは寒いが綺麗な雪子叔母の柔い滑々した肌に抱かれて寝るのはいやではないので、びったりと抱きつく。

「和夫の体は本当に暖かくて好きよ。」雪子は柔い両太腿で和夫の両脚を挟

んでは、顔を自分のむっちりと盛り上った乳房に抱きしめる。気嫌のいい時なんかは、

「和夫さん、どれ、大人になった？」
といきなり股間に掌をやっては撫んで見る。

「ああ、叔母さんのスケベエー」

叱驚して雪子の手を抑へるが、叔母はそういう時はかへって意地悪をする。握りしめて離さないばかりか、時には包茎の皮かむりを小気味よげにくるつと剥いたりする。和夫は全身の血がカッーと頭に上るばかりか、電気に当てられた見たいにピリッと全身が痺れ、

「あッノ叔母さんノ」

と叫ぶ。商売が医者なのでそうなのか、人間の肉体をそれこそ乱暴に扱う。「あらノこの子はもう色気がついたのねエ」

そういうなり、叔母は上半身を起して和夫の股間を覗いては

「和夫、お前、もうスマターベーションやっているの？」

と訊ねた時は冷ツと心臓が止まる思ひであった。マスをかき初めたのは大部以前であったので、返事をしないで

いると、

「かいているのねエ、仕様がないわ、子供々々と思っていいたら、もう大人の真似をしているんだから……ねえ、和夫さん、あれは体に悪いのよ、特に和夫なんか胸が弱いんだから」

と説教を始める仕末、

「でもいやだわ、和夫は……小供にしてはペニスが余り大き過ぎるんですもの、大人もこんな大きなのは余りないわよ」

と握ったものをつくづく覗込んで感心する仕末、挙句には面白そうに弄っている手を止めず、くいぐいとしごきつつけるのであったが、思春期の少年にとつては若い姉さんのような叔母の柔い掌に握られただけでも刺戟が強過ぎた。それを、上下にしごかれたり、覗込まれたりしては木石であらずともたまったものでなく、

「叔母さんノああアッノもう、もう」と身悶へると、

「いやな子だね、気をやるの？仕様がないわねエ、この子は」

と京花で尿道口を包んでしごきつつける中に、湯のような熱い精液がすご

い勢ひではじき出されると、

「あらあらノ大変だよ、すごい勢ひだわ」

と独身の叔母は感心しているばかりである。

「ずい分出るものね、驚いたわ」

と固形物の白い粘液まではじき出さ

れた京花を拵げて眺めた挙句に

「人間ッて不思議な動物なのね」

と汚れた包茎を綺麗に拭いて仕末してくれたりした。然しそれは冬の間に限っていた。

乱れ箱から叔母のズロースを見つけた和夫は、辺りを見廻してからそつとズロースを拵げて、鼻腔に持っていくと犬のように鼻を鳴して見ると、叔母の体臭が強烈に匂うそれは、女の恥垢の匂ひで、和夫がマスをかく時に、自分の包皮の下に溜っている恥垢の臭気とは違っている。

「ああノ」

鼻腔一パイにズロースの恥垢で穢れた箇所を吸込んだ和夫は、溜息をついた。尊敬している美貌の叔母の秘密の

匂ひを腹一パイに吸込む嬉しさと満足であつた。

やはり冬のこと、雪子叔母さんと一緒に眠つた時の或る晩のことであつた。

深夜、ふつと眼を醒した和夫はなかなか寝付かれなく、叔母の片脚の太腿が和夫の下腹にしたらに乗ったままになつていた。丁度、少年の××の上に柔い叔母の太腿が重しのように乗つてゐる下で、和夫の××は木のようにおえきつていて、ピンピンと脈打つていた。

「ああ……」

溜息をつきながら、柔軟な太腿にそつと腰を動かしながら、叔母の太腿を楽しんでいた和夫は、ぐっすりと眠つてゐる雪子叔母の太腿の間に、それとなく片手を割込ませて見ると、ズロースがピッタリと太腿に嵌つていて、指一本奥に進められなかった。残念に思つた和夫は、ズロースの上からそれとなく女の神秘境を搜つて見るに、掌の平一パイに盛り上つた恥丘の肉付の具合は何ともいへず、手触りから察して密生した春草に、柔い凹みが縦に流れ

てゐるのが何とも言へない感じである。何とかして邪魔になつてゐるズロースを太股から剥ぎ取りたいと思案しながら、和夫は頭を布団の下に潜らせた。

「……」

叔母の太腿の辺りに潜つた和夫は、腰のゴム紐を出来る限りぐつと拡げると、難なくズロースが下にすり、膝の辺りまで引きずり下すことが出来た。

「ああ……すげエや……」

和夫は思わず叫んだ。産れて初めて見る女の神秘境である。予想通り豊満な肉付の恥丘には、黒々と密生した×毛が生へ、その下には柘榴のような真紅な××が和夫の目を魅きつけた。見れば見る程、不思議な魔力があるばかりか、和夫の目には一種の芸術品であつた、何とも言へない芳香が和夫の神経を麻痺しながら、底無しの湖のような誘惑を覚へた。

爛熟しきつた女体に備わつてゐる中心点にこんな不思議な芸術品を持つてゐる女……和夫は産れて初めて女の生態を見たが、この眼の下にあるものがどんな働きをするのか知らないが、怖らくは、一度男の肉体が触れれば、生

きては戻れそうもないように見へた。和夫は叔母のそうした個所を眺めてゐる中に、思わずそこに顔を埋めた。柔い感触が頬や顔に感じられ何とも言へない。そつと指で紅い肉を押し開けて見ると、和夫は口で舐めて見た。

柔い肉が舌に感じられ何とも言へない。それこそ柔い肉の感触を舌先で味つていた和夫は、肉の奥から透明な液が流れて来るのを見ると、その液を舌に乗せて吸つて見た。味こそなかったが尊敬してゐる叔母の体から流れるものなら、例へ小水でも糞でも穢いとは思へなかつた。

和夫は夢中になつて舌先を動かしてゐると、

「あらノ和夫さんノ」

何時の間に眼を醒したのか叔母は上半身を起すと、叱驚して裸の太腿を退くと、

「何をしていたの？ いやアな子ねエ」
睨みながらズロースを元に戻した。

「ご免、ご免よ」

悪戯の現場を親に見つかった子供のようには怖る々々謝る和夫に、
「仕様がな子だね、子供だとばかりし

思っていたのに、もう悪戯をしたりして……そんなところ舐めたりして穢いじゃないの」

裸の少年のとは思へない美事なすが雪子の目に止った。

「ねえ、どうするつもりだったの？そんなところを舐めたりして、バカねエ」

雪子は叱るだけ叱った後、

「さあ、いらっしやい、叔母さんがアレしてあげるから」

和夫はその時の事を思出しながら、乱れ箱の中から搜した叔母の穿いていたズロースを拡げると、ズボンを脱いだ。

裸になった和夫少年は叔母の穿いたズロースに足を通して見た。何とも言へない感触と快感である。

「ここが叔母さんの丁度そこだな」

そう思うと痺れる程体中が熱くなってきた。

「ああ叔母さん！」

叫ぶ和夫はしっかりと膨起したものをズロースの上から抑へた。叔母の柔い感触が現実的に感じられると、まるで、雪子叔母を抱擁したようにその手を上

に下にしごいた。夢遊病者のように雪子の体を犯すその如く。

固くなっているものをぐいぐいと動かした。

「ウウッノ叔母さんノあッノ」

少年はまるで叔母の白い体を抱くように腰と手を動かしながら、チュッチュツと××した。熱い液体が恥垢に汚れたズロースの個所を汚していった。

風呂場でパンツ一枚になった和夫は

叔母の脱ぎ捨てた下着を洗濯しながら口笛を吹いていると、ガラス窓から、

「何してんの？和夫さん」

お下げ髪の花江が覗いた。隣家のお嬢さんで女学校三年生のピアノの上手な娘であった。

なかなかおませな奇抜な姿で、自転車に乗廻している娘であった。

「洗濯なんだよ、入らないかい？」

半袖のブラウスの二の腕が白く、胸が女学生にしては膨み過ぎていた。丸いお臀で鼻唄の調子をとりながら、

「まァノ呆れたノ男のクセに女の下着なんかも洗っているのね」

和夫は先刻自分が手淫で汚した叔母

のズロースを洗っているところであった。

「いいじゃないか、男女同権の世の中だもの、小遣錢を買ったもの、仕方がないよ」

「いやな和夫さん、何ぼ何でも女の下着位は断わりなさいよ、穢いじゃないの」

「それはそうだけれど、でも、うちの叔母さんは清潔好きだからね、毎日取換へるよ」

「バカねえ、そりや女ですも、毎日取換へるわよ、でもいやアだわ、男のくせにそんなこと……不潔よ」

「チェッノ不潔じゃないよ」

「不潔よ、第一女のひとは男と違うんですもの、男は……」

「男は何だい？文江ちゃんは何でも知っているような口ぶりじゃないか？」

「ふん、生意氣よ、あたしはレディですもの、知らないわ」

「チェッノ何が何だかわかんないや、今すぐ済むからね、俺の部屋で本でも読んでいないか、すぐ行くから」

「うん、レコードをかけているわ。」

と文江は三四回和夫の部屋に遊びに

入ったことがあるので、部屋に入ると
ポータブルの蓄音機のネジを廻した。

ルンバである。文江は一人でスカートの端を軽く掴むと、踊りながら唄う。
丸い肉付の太股のブルマーが思ひきり
奥まで覗かれた。

女学生の健康な肉締りと、胸のふくらみとは成熟した女の匂ひが漂っていた。

文江は籐椅子に上半身を倒し、長々と脚を伸した。レコードのメロデーが
甘く流れ、文江の健康な頭から睡魔が襲って来た。ドロドロとまどろんでいる中に、レコードが停るのにも気付かず、軽い軀を洩しながら、文江は両腕を下腹の辺りに置いて眠込んだ。

裸の二の腕が白く、おとがいの辺りはまだ少女のようなあどけなさがあつたが、鼻筋の通った高い鼻梁と、睫毛の長い瞼から広い額が智的な美しくさである。花に例へるならば未だ蕾というところであるが、肉体は既に女になりきった肢態と成長である。小さな紅い唇が大胆に見へた。

和夫は洗濯を終へてから、冷蔵庫から冷へたジュースを盆に載せて部屋に戻ると、文江がスカートの下から太い

裸の二本の脚をむき出しにして、怪い軀を洩しながら眠っていた。

「何だ、眠っちゃたのか？」

ジュースを独りでグツと呑み下した和夫は再び文江のセーラ服の下、媚めかしい肢態を改めて見廻した。

「ねえ、いらっしやいよ、何でも好きなようになさるといいわよ、ネエ、ネエいらっしやいよ、和夫さん」

と文江の体が誘ひかけるようであった。和夫は一瞬カッ／＼と全身の血が頭に逆流した、「……………」

和夫はコクンとジュースを一気に呑下すと文江の足元にうずくまった。

裸の二の腕とむっちり盛り上った双の乳房が、薄いブラウスの下に息づいていた。

スカートの下の雪のように白い二本の脚が、短いスカートの奥まで覗かれる。

「文江ちゃん……………」

そつと呼んで見た。返事はなく、無言でスカートの下の奥の付根から、

「和夫さん、何サ、勇気がないのネ、さあ、いらっしやい、あたしのブルマーを下までグーッと下してから、ネエ、

見て……………見て頂戴／＼和夫さん」

と誘ひかけるようであった。憑かれたように和夫は文江の寝顔を覗上げながら、ソーツとスカートを腰の辺りまで捲上げた。真白い健康な太股の肉が、思春期の少年の目を強烈に射た。

「あッ／＼」

思わず成熟した女の太股の太さに驚歎の叫びを残した少年は、太股の肉にびったりと喰い込んでいるブルマーのゴム紐の辺りが魅惑的であった。びっちり成熟しきった臀部に密着している白いブルマーを通して、こんもりと盛り上った恥丘の辺りには黒い×毛さへ透き通って見へる。ブルマーの織目から一二本の×毛が刺さっていた。

「……………」

和夫は下腹部の肉に喰込んでいるブルマーのゴム紐にそつと一本の指をひっかけると、文江の顔色を覗上げながら、出来る限り感触を与へないように、ズーッと太股の方に引きずり下して見ると、思ったより容易にブルマーの紐が下にずり下りたが、籐椅子と臀の重みのところはどうしても無理である。和夫は腕を伸して机の上の鉄を取ると、

ブルマーの前を縦にズーッと切り離した。

（和夫さん、勇気があるのね、その意気、その意気よ、さあ、よく見て頂戴／＼ねえよく見て頂戴／＼どう？あだし……おデコに髻を生やしたのをどう思っ
て……ねえ、男のひとがあたしを見る
と、誰もがあたしに虐められたいと思
うんですって……混んでいる電車の中
なんかで、中年男なんか図々しいのよ、
そつと掌の甲であたしをスカートの上
から抑へて見たりする助平なひともい
るのよ。ねえ、和夫さん、よく見て頂
戴／＼さア／＼よく見て）

と微笑むが如く、真紅に色づいた柘榴のような秘肉が誘うようである。

和夫は前にも言った通り雪子叔母の肉体をそつと覗込んだことがあったが、その時は相手が叔母であつたので、怖さ半分と好奇心半分で覗込んだが、その時も、不思議な魔力で和夫をぐんぐんと誘入んだが、文江の場合もそれと同じであつたが、それにしても女の肉体を白昼の光りでこれ程眼近に眺めたことは産れて初めてである。

叔母の場合と違って、文江ならいざ

という時にも、それ程怖しい目に合わさずにすみそうなので、和夫は大胆になつて来た。ズボンを脱ぐとランニング一枚の姿になつた和夫は籐椅子に横臥している文江の足元に膝まづいたまま、そつと指で文江の真赤にいろづいた秘肉を押し拵げて見た。

「ウウーム……」

和夫は唸つた。かつて、叔母のこうして指で押し拵げて、口で舐めて見たことがあつたが、それ以上のことは一度もなかった。

指でぐつと拵げて見ると、何とも言へない匂いが和夫の鼻をついた。

（どう？この匂ひ……我慢出来て？ふふ、でも和夫さん、ずい分よ、そんな大きな目で覗込みながら、ぐつと指で拵げるんですもの）

レディに対して失礼じゃなくって？あたしもね。自分で時々そうして指で拵げて見たりするのよ。鏡に向つてしたり、鏡をお尻の下に置いてしたり覗いて見ると、それこそ奥の方まで見へるのよ、ねえ、和夫さん、ずっと奥の方

を覗いて見るといいわ、でも無理かな、あたしは処女でせう？奥の方にある子宮はちよつと無理ね、でも、どう？女の肉体は？素晴らしい？それとも汚い？と問ひかける様なので、和夫はゆつくりと指を拵げて中を検討した。

産れて初めてこうしてハッキリと覗込んで見る少年の和夫には、まるで魔のような魅力でぐいぐいと自分の血を搔廻しながら、

（さア、和夫さん、舐めて頂戴／＼そう大きな目で覗込まれちゃ、あたしたまんないわ、ねえ、そのお口で舐めて頂戴／＼どんなにいい気持か知ら／＼舐められると……ああア、はやく……和夫さん／＼）

と誘ひかける風に感じられた。

「……」

和夫は踞んだまま裸の下半身を裸に、文江の真赤な秘肉を口に吸込んだ、柔い何とも言へない感触がザラザラした舌端を通して感じられる。和夫は雪子叔母の××を前に一度舐めたことがあつたが、その時はもう夢我夢中で何が何であつたかわからなかつたが、今こうして舐めている感じからいって、和

夫は今までにいろいろと物を食べたり喰ったりしたが、これ程柔い感じの舌触りは未だかつて初めてである。

（ねえ、和夫さん、どう？あたしの味？素晴らしいでせう？柔かくって……何だかあたしもそう和夫さんに舐められちゃ、もう、頭が呆ッとなって、五臓六腑がドロドロととろけて仕舞いそうよ。ザラザラしたその舌で、そこそこをそう舐め廻されちゃ……あアあア和夫さん！そ、そこが……そこ、そこを何と言うのか知ら？バカに刺戟が……あアッ！）

と悶へるようである。和夫は十分に口で味っている中に、怒脹したものがピリッピリッ脈打ちながら

（さア、何をしているんだ、一体俺をどうして呉れるんだ！）

と文江の肉体を求める様に感じられ、和夫は顔を文江の股間から離した。

見ると、真赤に充血した××がピンと臍の方に向いて、木の様に固くなっている。

（和夫さん、いらッしやい、何を考へているのよ、考へることないわ、今まで口で舐めて下さったクセに、これで

後に退くことは卑怯よ、さア、いらッしやいさア、はやく！そうよ、勇敢に……）

抑向けになっっている文江は怪い厭をなおもつづけているが、腰まで捲れ上った恥部からはしきりに和夫を誘惑しているが如く、微笑みながら招いでいた。

「……………」

和夫はピンと怒脹したものを手に添へると紅く色づいた××にそっと押し当てて見ると火のような熱さが感じられた。ピリッピリッと電気のような感触が全身を伝わる。そろそろと手を添へたまま××のあたりをくじり廻して見ると、××のみがやっと秘肉の中に少し××っているのが何とも言へず、和夫はただそのままぐつと××めばいいものと思ひそろそろと腰を使って見た。

「あアッ！」

思わず全身を走る官能の刺戟に、そのままぐつと腰をひねったその時、

「アレー！な、なにをなさるの？」

ぐつと差込んだ苦通に、文江が眠りから目を醒して上半身を起したが、自分のあられもない姿と共に、和夫の×

×されているのを知って愕然となったが、アプレ娘の常で内心諦めるのも早かった。和夫は一瞬間却したが、初めからこうなるのは覚悟していたから、

「いいじゃないか、文江ちゃんが眠っていたから、つい、ご免よ」

と謝った。

「いやな和夫さん、あなた、叔母さんの下着やブルマーを洗うだけあって、少し不良だわ」

睨んで見せてから、

「非道いのねエこんなことをして……でもないわ、許して上げるわ。」

茶目に顔でふふふと笑って見せてから、自分の太股に幾らか××されたさまを覗込んでから、

「いやアねえ、和夫さん、まるで大人見たいに大きいじゃないの、大丈夫？そんなことしても」

と指で和夫のものを探って見る。

「平気さ、もう、ホラ、少し×つたもの、痛かった？さっき……」

「ええ、びっくりしたわ、何だか斬られる見たいに痛かったんだよ、だから、あたしびっくりして飛起きたんだわ」

「ご免、ご免よ、今も痛む？」

「ウウン、今は何ともないわ。」

「じゃ、どんな気持？文江ちゃんはず？」

「何となく……体がだるいような……」

和夫さんはどう？

「僕はね、こうしているだけで、頭が

ボーツとなって来て……文江ちゃんを

食べてしまいたいような、何だか、ぢ

ッとしていられないんだ」

「そう、あたしはそうでもないけれど、

何となくただ……」

「じゃ、いいね、全部×れるよ」

「ええ、大丈夫が知ら？」

「平気さ」

「ならいいわ、全部×れても……」

「らん」

思春期の少年と少女は好奇心と、大人の真似をする嬉しさでただ夢中にな

って、ソロソロと腰を使うと、

「ああ文江ちゃん……何だかよくなっ

て」

と半分程×れてからそつと文江の顔を眺めれば、文江もそつとして結果や

如何と見つめている。

「そんないい気持？どんな気持なの？」

と顔をしかめている少年に訊ねる、

「わからない、口ではとてもいいへない

よ、ただ何んとなくボーツと体が痺れて……」

とつづけて腰を使ひながら、少しづ

つ姿を消して行く様に、膝をついたま

ま覗込む。

雪子叔母さんに一度、柔い手で自慰

をされたこともあったが、その時は、

もう、体が痺れてどうにかなるのかと

ただ悶へに悶へている中に、サツと走

る背筋の悪寒と共に××をしたが、そ

の時とはまた違った官能の痺れと肉体

の疼きが全身の血を湧き上らせた。

「ねえ、大丈夫？そんなに×れても」

「うん、大丈夫さ、文江ちゃん痛む？」

「ううん、何ともないけれど」

「なら平気さ、もう、ホラ半分以上×

ったよ、のぞいてごらん」

「いやーンバカノそんなにのぞいちや」

「だって、心配なんだろう？」

「でも、いやノいやよ、恥ずかしいじ

やないの、バカノ」

と口では言うが、怖いもの見たさに

文江は上半身を起して下の方を覗込んで、

「まァノすごいノ怖いわ」

と鼻声を出す

「怖いことあるものか」

「うん、だってエ……ねえ、和夫さん、

経験ある？」

「ううん、初めて……全然初めてなの

さ」

「そう、何だか自信ありそうなんです

もの」

「自信はないけれど……こうするのか

な位は想像つくじゃないか」

「それはそうだけど……でも、すごい

のねえ、大人ッて誰でもこうするのか

知ら？」

「それはそうさ、皆すました顔してい

るけれど、大人なんて夜となると誰だ

って、こんなことするさ」

「そうね、うちのパパなんか二号さん

も三号さんも囲っているのよ」

「へえノそれやすげえや」

「すごいでしょう？うちのパパと来た

らいやアなのよ、時々、あたしを連れ

て映画に行くのよ何だかわかる？」

「うん、わからない」

「でしよう、実はね、うちのパパッた

らママが五月蠅いでしょう。だからね、

あたしを連れて映画に行くふりをして、

あたしに小使銭をくれてから二号や三

号さんの家に連れて行くのよ、あたしたまならないわよ」

「へえ、それやすげえや、それで、どうするの？」

「お父さんと二号さんと用がすむまで、あたしは別の部屋で本かレコードでも聞くわけよ」

「ふん、その間大人はいいことするわけなんだな、それで文江ちゃん、見たことある？」

「本当を言うと、見たこと何回もあるのよ、うちのパパッたらすごいのよ」

「へえ、どんな風に……」

「まア、言へば変態的ね」

とませた顔をする。

その間、和夫はそろそろ腰を使ひながら残りの半分をスッポリと××した。

「ああ、いい気持……文江ちゃん……」

と××まで××った快感に少年は居ても立ってもいられず、二三回××しただけで、陶然と骨身の蕩けそうになり、

「文江ちゃん、僕、何だか……ああ文江ちゃん」

「和夫さんあたしも何だか……変よ。」

「うん、僕も……僕も……」

となおもつづけて二三回×を×っている中に

「あッ、文江ちゃん、文江ちゃん」

「和夫さん、和夫さん」

「文江ちゃん、駄目、駄目」

和夫は産れて初めて女の肉体に××する快感に、ただ夢我夢中になって女の名を呼びつづけた。

ジーンと背筋が痺れ、ドウツと全身の血が女の体内に流れて行く思ひであった。

庭に咲いている花園のくちなしの花びら一ツ、風もないのにひらひら落ちていた。

奈良東大寺近くの近江屋旅館の奥座敷、床の間を背にどっかと胡座をかいたまま、チビチリビリと女中相手にお酒を呑んでいるのは川崎修造氏である。和夫少年とふとしたことから思春期の少女文江と越えてはならぬ一線を踏み越えた女学生の文江の実父が川崎修造氏である。五十になったばかりの川崎氏は、旅の恥のかき捨てと思ったのか、女中にしては色の白い男好きのする丸

顔を眺めやりながら、

「独りで呑む酒はまずいものだ、どうだね、一パイやらんかね」

と杯を女に差出した。女中のお常は

男の腹がわからぬでもなかったが、関東地方の客には珍らしく、部屋が決つたその晩にこれはほんの少しだが……とチップを握らされた。関西方面の客なら料理屋や旅館に這入ると、先ず何を置いても最初に女中にチップを握らせる。勿論、好色な関西の男性のこと、

下心があつてのチップであるが、関東の客は関西の客と違って、チップは帰りに置いておくのが習慣である。サービ

スが悪ければ、お客によつてはチップを一銭も置かない客がある代りに、関西の客と違って女中に対しての下心はないものである。この東京の客は旅館に入ってから多額のチップを握らせて

いたので、

「あら、駄目なんですわ、あたし……」

「あ、一パイだけ……」

と白い手を出して杯を受取ろうとするその手首をいきなりむんずと握まれた。

「あら、お客さん、ご冗談はいけへん

わ」

とはずみに男の胸に上半身を倒したその瞬間、アッ／＼という間に腋の下から手を差込まれた

「何て名前だい？君は？」

男は脇口からむっちり上った乳房をぐツと掴んで離さない。

「お常と申しますのよ、ねえ、誰か来るといけないわ、離してエ／＼」

チップの効目で大きな声で、誰を呼ぶ訳にもいかず、乳房を握った男の掌を着物の上から抑へながら、上半身を退こうとすると思ったより頑丈な力であつた。

「いいじゃないか、見たところ生娘でもなさそうだし、男位知っているだろう。さア、わしが一パイ吞ませて上げよう」

と片手で並々と注がれた杯を取り上げる

「吞むわよ、だから、離して下さいな、このままじゃどうにもならないわ」

「いや、このままの方がいい、さア、口を開けてごらん、わしが吞ませて上げる」

顔の上に杯があつた。動くとも熱い酒

が顔に零れ落ちそうであるので、仕様なしに、

「静かにするから、吞ませて頂戴／＼」

唇を開けると、男はその杯を彼女の唇に近づける様子なので目を瞑った。

すると男はその杯の酒をいきなり自分の口に含むと、女の唇におのれの唇をびったりと吸付けて、口移しに酒をお常の咽喉に流し込んだ。

「う、うム」

思わずお常は口を閉じたが、もう遅かつた。男の口から生温い酒が流れて来るので、そのままコクンコクンと咽喉を鳴したが、男の熟柿臭い唇は離れず、お常の舌をきつく吸込むと離さない。

「ウウ……」

舌を吸込んだまま、男の片方の手がいきなりお常の乱れ裾に割込んで来た。

「アッ／＼」

と叫んだが、舌を吸込まれたお常はどうにもならず、バタバタ下半身を動かすと、舌が千切れそうに痛むので、静かにしていると、男の手は無造作に彼女の太腿からズロースを剥ぎ取った。

「アレッ／＼」

叫ぶにも、泣くにも舌を吸込まれたお常はどうにもならず、男の生温い手がいきなり急所をクリクリと揉みながら、二本の指を奥まで×める仕末、横抱きにされたお常は、不覚も不覚、こんな凄いいお客は女中に出て一年になるが今夜が初めてである。

今までいろんなお客から、それこそ危い目にも会ったり、乳房は勿論、時にはいきなり布団を敷くところを押し倒された内股に手を差込まれたことはあつたが、然し、それまでのことである。ズロースまで剥がれる時には大声を声で助けを求めたり、ベル位は押したものだ。が今夜のお客のような目に会ったのは初めてである。

最初から、何か悪戯位は仕掛けられると覚悟はしていた。が、その時は何時もの通り大声を出すかベルを押せばいいとタカをくくったのがいけなかつた。声を出すにも、ベルを押すにもこれはどうにもならなかつた。肝心の舌を男に吸込まれて仕舞つては、声を出すにも、身を動かすにもどうにもならなかつた。それこそ、抜ける程強く舌

を吸込まれ上に良人にしか触らせたことのない個所をこうも自由にされては、流石のお常も怒るところか、男の手際の凄さに舌を巻く程である。

男は指でそれこそ、膿んだ個所をホジくるようなやり方で、クリクリと急所を揉みながら中に×れた指で××まで弄り廻す仕末に、

「ウ、ウ、ウ……」

思わずふツと鼻で息を吐きながら、力一パイ穿めた太腿を緩めた。生き身の悲しさ、例へ相手が無茶な浮気とは知りつつも、痒いところを掻いて呉れば快い気味になるのは人間の常である。お常は知らず知らず股を抜けてもじもじと×を×いながら男の腰を抱いていた。が、男は最後まで油断をせず、舌は吸込んだままお常の顔を見ながら笑っている。

「ねエ、離してエ……どうにでもなるから」

と目で言うが、
「すッポリと×れるまでは安心が出来ないねえ。」

という要心さ、お常は産れて初めて良人以外の男性からこうされたが、や

はり、見知らぬ男から女の生命とされている敏感な個所をくじられる快感は格別である。乳首をくりくりと揉まれながら、下の方まで指を××まれていくいくとくじられては生きたそらとはなく、恥も外聞もなしにもじもじとお尻を廻していると、自分でも恥ずかしい位全身がポツポツと緩くなりながら氣ざして来る。

「ああ、どうしよう」

思案も何もない、本当に体の方が言うことを聞かない、いつそうハメを外して男に甘える腹でいると、

「……」

男も我慢が出来なくなつたと見え、の下の手を取ると、お常の手を己れの怒脹したものを握らせる。お常は男のものを握らされた瞬間、

「あッッ」

思わず心臓の停る思ひであつた。齡は五十に近い男であるにしては余り元気がよく、然も、良人のモノに較べると驚く位大きかった。

良人のものしか手にしたことのないお常であるから、勿論他の男のものは知らないが、こんな大きいものは初め

てである。それこそお常の掌に握り切れない程の太さと、ゆうに二握り半程はある長さである。お常は珍らしさと好奇心でそろそろ××いて見ると、何とも言へない程掌の感触が快く、くいくいと××きつずける中に、

「アレッッああ……」

思わず身をよじらせた。耐えに耐えていたお常は、男の太いものを××××している中にアジな氣がいつそう募り我慢しきれなくなった。

「……」

男はそれと察したらしく、お常の掌から女の××に当てがわしたと見るや、くいと腰をひねると有無もなかった。美事なものが秘肉を××に巻込れるような快感と共にジーンと身が痺れた。
「どうだ？逃げるかい？」

ヤツと吸込んでいた舌を離して言う。

「ああ、ひどいひとねエ」

恨みながら見せた。濡れぬ先こそ露をも厭えというが、こうなった以上は、毒を喰わば皿までの例へ通り、

「関東の男ッて凄いと聞いていたけれど、ずい分だわ」

と背中を抓ってやると

「何がずい分だい？」

と呆ける。齡は五十を越しているが、普段精力絶倫に意を払っている川崎氏は自信があつた。

五十男に三十女……お互に異性の肉体を知り尽している二人である。どうすれば相手が歓喜に蠢くかを知っている二人は、相手の出方を待ちながらそれに応じようと、ジツと抱擁し合っている。

「どうだ？ いいかい？」

と男の方から訊ねる。

「ええ」

お常は三十近い今日まで、男がこんないいものとは思っていなかった。

病身の良人はそれこそ廃身同様で、

「お前、好きなひとがいたら、浮気位したっていいよ、俺に操を立てることはないんだ、健康なお前のことだ、体に毒だよ」

と浮気をしてもいいと言うが、五年も連添った亭主がいるのにそんなことが出来る筈がなかった。それこそ前に言つた通り、旅館の女中をしていると、いろいろと誘惑されることもあるが、

今日まで綺麗に身を守り通して来たお常であつた。一度でも男の肌を知っている女にとって、男なしでは寂しいものである。それがこうして男にがんじ絡めにされて見ると、それこそ身も骨も蕩けて了う程快い気味である。さんざキッスされながら、指で急所を××られた挙句に、ピンと怒脹した××××もので、えぐるように奥まで××××られては、どうにかなりそうである。五十男の巧みなわざ上手というのか、ジワジワと奥の方をえぐるように××かれる気味の快さに、

「ああどうしよう、あたし」

思わず着ていた着物の裾を高く腰まで捲上げると、裸の下半身をびったりと男の腹に摺寄せながら、太腿で男の両脚を締めつけた。

「こうなつた以上、どうだね、着物が邪魔じゃないか？ 脱げばどうだい？」

と女の滑々したお臀を撫でて見ると、女盛りの豊満なお臀の肉付が固く締っている。

「ええ、でも……」

もじもじしていたが、
「じゃ、脱ぐわ」

と帯を解くと男も手伝つて肌に着けているものを剥がせば、
「お客さんに裸を見られるのは恥ずかしいわ」

と流石のお常も羞恥心で顔を男の胸に埋めると、

「いい肌をしているね。まだ子供を産んだことは？」

と訊ねると、

「七ツになる女の子と四ツになる男の子がいますわ」

「へえ、そうは見えないね、このおツパイの膨み具合なんかまるで独り身見たいだ」

「あら、そうか知ら、でも、こんなことになるなんて、うちのひとに悪いわ」
「何を言う、わかるものじゃなし」

川崎氏は横抱きにしていた女を掬上げるようにすると

「あら、いやだわ、こんなに……知らないわたし……」

とお常は肥った男の腹に股がると、男は己れの目に垂下っているむっちりとした双の乳房をぐっと掴むと、親指の腹で乳房を揉む、女はそうした男の愛撫の仕草を見下すと、

「男ッていいわねエ、旅に出るところとして旅の恥は掻き捨てられるから……女はその点損ねえ。良人に気兼ねしない浮気しなくっちゃならないんだから」

「じゃ浮気はしたことないのかね」

「そうよ、初めてなのよ、お客さんが悪いんだわ、恨むわよ」

「は、は、は、いい思ひをさせてやって恨まれちゃ、やりきれないね、どれ、娘達が帰らない間にひと汗掻かせて貰うかな」

と下からぐっと両膝を曲げて腰を持上げると、お常は上からぐいぐいと腰を使ひ初める。

小気味よげに××したものが奥まで××快感と、乳首を揉まれる官能の疼きにお常は夢中になって×××しをっずける。

「ああ……どうしよう、あたし……」

思わず口走るその時、男は思いきり××の辺りを××まくる。ジーンと背筋を走る快感……お常は病人の良人と一ツ床に寝たのは久しい前である。考へて見ると良人は濃厚な愛撫を毎夜の如くつづけていたものである。

瘦せた体に似ずに良人は精力的な所作で、お常の体を思ひきり上げさせると、裸の体をあっちこっちと撫で廻した挙句、小さな瞳孔を一パイに開けて股の間を覗込んで、万年筆の軸で悪戯をするのが好きであった。

「ねえ、いやよ、そんな悪戯は……あたしせつなくって……」

思ひ切り股を上げたまま、うつとりと目を閉じていると、良人は万年筆の軸を尿道に刺込んではいじり廻す。何とも言へない官能の疼きにお常は陶然となっていたものであったが、川崎氏の場合は違う。良人のもちものよりは何層倍も大きい、それこそ馬にも負けない程の美事な持ちものである。骨身が糊のようにどろどろと蕩けて了うようなせつなさと共に、腰を使うたびに背筋に寒気が走る思ひで、どうにもこうにもならなかった。

「このまま死にたいわ」

鼻声でフンフン言っていたお常は、上から男を覗込んで言うと、

「そんなにいいの？」

と訊ねながら、腰をの字に廻してぐっ和高く持上げる。下腹深く小気味

よくきしみながら×る。

「ああッッ」

思わずお常は粗相をした。こんなことは初めてであった。尿を洩すなんて初めてである。

「もう、もうあれし駄目ッ、駄目よッッ、シートが汚れるわ、あッッ、あッアレッッ」

そのまま錐揉み式にぐいッぐいッと上から×を××ている中にお常は「ああッ駄目だわッッ、かんにんかんにんしてエッッ」

叫びながら×を××ているその時、「お父さん、ただ今ッッ」

とカラッと障子を開けたのは川崎氏の娘の文江であった。(つづく)



◆文献資料◆

女郎蜘蛛

後篇

早川 千鶴子 作



夜の芝草

「ですが——一寸——」

運轉手は定子を呼ぶと車から少し許りはなれた木陰へ誘った。定子はおいでなすつた

なと思つた。

「とに角、あつしや一つ走り行つて来やしよう。あつしや今でこそこんな小さな町の運轉手をしてやすが以前は東京でも少しばかり鳴らした男でさあ。ところで先刻お禮は充分すると仰言つたが、どうでしょう。さつくばらんにいうが、あの若い娘を取り持つちやくたませんか」

「若い娘つて——」 定子は飛んでもない要求にあきれながら、ちどりか、美那子かどちらだろうと考えていた。

「ほら。あの頭に桃色の布で鉢巻をしている娘でさあ」「あ、ちどりちゃん」

「ちどりつてんですかね。あの娘でさあ。車に乗つた時から目についてたんだが、あつしの初恋の女に生き寫しで、もうどうにもやり切れなくなつたんで——」

「でもねえ——」 定子はあごを胸に落すと思案した。

「駄目ですかい。駄目ならいゝんでさあ。あつしやこのまゝ歸らせて頂きやしよう」

「ま、待つてよ。」氣の早い人ね」

本當に歸つてしまひ相な男の様子に定子は忙てた。いま此處で歸られたら明朝からの興行が全然出來なくなつて、ばく大な損失である。といつてむさくちどりをこんな男に與えるのも業腹であつた。こゝは一つだまして車が動く様にさえなれば何とかま
た思案もあろう。男が暴力でくれば、これだけの人數なら結構防げるだろう。思案を
決めると

「そうねぢやあんたの願いきくわ。その代り大至急行つてきておくれよ」

そのまゝ車に戻ろうとすると

「ちよ、ちよつとおかみさん。たゞそうあつさり口約束だけぢやどうもねへゝゝゝ、

あの娘を一しよに連れて行きてえんで――」

「え、一しよに連れて？駄目よ。あんな足弱なんか連れて行つちや、第一あんたの邪
魔でしよう」

「なあに連れてくつたつて、ついそこまでさ。一丁片づけて腰を軽くして突つ走りま
さあ」男はうすく笑うと「さ、早く呼んで下せえよ」

と催促した。定子はこれは一筋縄で行かない男と覺悟を決めてしまつたどの道竹藏の
手に掛る女なら、いま此處でこの男にちどりの處女を興へれば或は竹藏の浮氣の虫が
少くともちどりに丈は止るだろうと思つた。可愛想だが反つてそれが自分にも良いの
かも知れないと思つた。

「ちどりちゃん」「はい——」

「一寸こゝへ來て、なあにそのまゝでよいから——」

車の上からばつと身輕に飛降りるちどりに「ちどりちゃん、済まないけどね、この人
と一しよに町まで行つてくれない？おねがいよ」

「あたしが？何しに？」

「何つて、まあつきそい見たいなものよ。ね、たのむから——」「そう」

何だか譯が分らないまゝに、ちどりは妙な緊迫した空氣を素早く感じていた。何かあ
るに違いない。それは處女の本能とでもいうか敏感に覺つた。

「ちやあ、おかみさん。行つて來やすぜ」

男はちどりに連れてくる様に目で促すと、すた／＼と歩き出した。

大きな月が明るく峠を照らしていて、男とちどりの影が長く尾を引いて流れていた。

男はぐん／＼大股に歩いた。後ろのちどりを意識しないような歩みであつた。

だが男の頭の中はこれから起る——いやこれから自分がまき起す暴風の推移に酔つて
いた。余りにも似ている。

あれ程信じ、あれ程愛して、そして無慘に裏切られた初恋の女に——。

男は信三と言つた。初めてちどりを見たとき、と胸をつかれる思いがしたのであつた
それは無佳ななつかしさと、言い知れぬ憎しみと、どうにもならない性の昂ぶりとを
この見知らぬ旅藝人の女に覺えたのであつた。

彼は何處で、どの様にして、この無垢な女を手に入れようかと思案していた。道は單々たる坂の一本道である。

慎重に事を横道にそれさえすれば格好な場所はいくちもあるが、彼は運ぶ考えだつたなるべく手荒な事はしないで、出来るなら合意でやりたかつたゆつくり口説いて見てそれでどうしても駄目なら力づくで行こうと思つたこんな小娘の一人位、いさといえは問題ではなかつた。

坂を下り切つた所に暗い草原がある。彼はそこを目的の場所を選んだ。

そこは無論家も遠く、今大休道から少しばかり入り込んでいて、人目にもつかない格好な場所であつた。彼はだまつてその原に入り込むと、くろりと振り反つてちどりを迎えた。「おや？行かないの町へ——」

ちどりはうす氣味惡そうに、信三の二間ばかり手前に止ると言つた。

「な、ちどりちゃんといつたな。町は後でいゝんだ。それよりどうだいねえちゃん、

一寸寝て行かねえか」

彼はそういうと、反応をうかどう様にちどりの顔をながめた。

「寝てゆくつて？何言つてんのよ。さ、早く行きましよう」

「いやかい。お前まだ男を知らないんだろう。どうせお前的一座は不具ばかりだ。だが、あんな者を男と思つたら大きな間違いだぜ。どうせ一度は女になるお前だ。どうだいこの俺と一丁しつぽり濡れて見ねえか。おかみも承知だぞ」

「え、定子さんが——まさか」

「嘘だと言ふんかい。ふふふ、ぢやあ何の為にお前を寄こしたんだい。部品を取つてくるなあ俺一人で沢山の筈だ。その為によこしたんだぜおかみは——」

ちどりは自分の豫感が適中したのを悲しく思つた。

それにしても定子がどうしてこんな男の餌にするのか分らなかつた。或は自分の秘かな竹藏への思いを女の鋭い感で見抜いて、その報復の意味で取つた處置だろうか。何

にしてもこの場はうまく逃げねばならないと思つた。

「でも、そんなこと、いやです」

「な、ねえちゃん、よく考えてみなよ。お前の決心一つで明日の興行が打てるか打てねえかつて境なんだぜ。それに一座を助けるつて立派な理由も立つちやねえか。な、それよりもねえちゃん、お前は俺の初恋の女にそっくりなんだ」

信三は一二歩ちどりに近づいた。ちどりは五六歩後ろに飛びすさつた。彼はもうこれは口では駄目だと思つた。力つくで行くより仕方がない。彼はスキを見て矢庭に躍りかゝると、ぐつとちどりのゑり許に手をのばした。だが危くちどりはその手をすりぬけ、くろりと背をむけるとさつと逃げ出した。「待て——。」

彼はそうさけぶと大股に追いかけた。ちどりは遮二無二逃げた。そこはトラック道の裏側になるのだが、まばらな松林の中に逃げ込んだ。もうはあゝと息切れがしてくる。ひり／＼と咽喉が干いて足がつる様になつて動かなかつた。

男はすぐ後に迫っていた。彼にしてみれば思うつぼであつた月光をさえぎつた暗い松林の中は、下は程よい芝草になつていて、全くもつて來いの場所である。

女を追いかけるスリルというものは、全く慾情を昂らせる。彼はもう一物をほてらせ走るとそれがズボンにつかえ、それが又余計慾情をあふり、もうちどりを捕える一念の他何もなかつた。

一方、ちどりは必死だつた。捕まればもう終りである。男の足音がすぐ後ろにして、あせつたのか思はず足を滑らせ、不覺にも仰向けに倒れてしまつた。

途端に男が荒々しくのしかゝつてきて、それと同時にちどりが激しい勢で起上つたので、びり／＼とブラウスが裂け、丸々とした肩の肉がまる見えになつてしまつた。

「あつ——」とちどりは悲鳴をあげ、再び逃れようとしたが、信三は素早くちどりの腰を抱え込むと、その場え自分の身体もろとも倒れ込んでしまつた。

「あ——つ」とちどりは悲痛なうめき聲をたてた。

しつかり抑え込まれ、恐ろしい力で抱きすくめられると、もう抵抗する力も抜けてしまった。はあ／＼と大きく肩で息をし、男の手がじわ／＼と胸に這ってくるのにもそれを拒む力もなかった。

ブラウスが荒々しく引きはがれ、両の乳房が無惨にも夜風に白くさらされた。男はぐつたりとなつたちどりを見て、薄氣味悪く舌なめすりした。

乳房をもてあそぶのもどかしく、矢庭に手を股にのばすと、ズロースを引きむしる様にしてすりはがし、太い毛深い指で××をいじつた。

「あれ一つ。だめ——」というのを素早く口で齧をしてしまい、女の兩股を膝でこじあげ、ぐいぐい指をくい込ませる。

さすがにちどりもその場は必死で拒んだが、到底男の力に適う譯もなく、いまはもう兩股をひろげた恥かしい姿で、男の弄びに委せた格好になつてしまった。

信三は中指を××にさし込み、ぐり／＼こすり廻すと、指先に固いぐりぐりが感じら

れ、掌はようやく生えそろつた若草の柔かみ程よく、それがますます慾情をたかめるまもなく指先がぬる／＼とぬれて来て、ちどりの門内よりぬる／＼とした熱い××がじく／＼とあふれて來た。

「なんでえ、いやだ／＼といつていながら、お前だつて氣分出してゐるんぢやねえか」と信三はちどりの口を放すといつた。

ちどりは押えこまれてからは、強い男の体息と、指先のいたずらにだん／＼先程の嫌きは消え、殊に男の指が××深く××の壁につき當ると、ぞく／＼と背筋に寒氣がくる程の刺げきがあり、だん／＼氣分がよくなつてきた。

「でも——めんまり亂暴しちやいやよ」

「ふ／＼、あんまり亂暴しちやいやよか。可愛い／＼事いうぢやねえか。お前一体幾つなんだい」「十八よ」

「番茶も出花つてとこか、色氣のつき盛りだ。どうだい今夜はゆつくり可愛がつてや

るぜ」「あら、でも早く歸らないと——」

「承知々々。部品さえ替えりや、それで万事OKさ、そう急ぐねえ。濡れぬ先こそ露をもいとえつて文句もあるぢやねえか、な、こゝまでくりやお互いしつぱり濡れようぜ。それにしても可愛いゝ目してるなあ、お前は——」

信三はちどりの目の中を深々とみつめると、その目に熱い唇を寄せた。

その時、先刻二人が立止つた場所あたりから

「ちどりちゃん」と呼ぶ聲がきこえた。信三もちどりの思はず体を起すと聞き耳を立てた。聲は庄作の様であつた。

「誰でえ、ありやあ？」

「ふゝゝ、庄作つて一寸法師よ。何しに來たんかしら」

「きまつてるぢやねえか。お前に氣があるんで、心配でならねえつて譯で追つかけて來たのさ」「そうかしら——」

ちどりはそう云いながら、全くこの男の想像力に驚いてしまった。

「お前、その庄作つての好きなのかい」

「誰が、あんな——一寸法師なんか——」

「そうかい。ぢやそろ／＼××るぜ」男はそういうともうすつかりべと／＼にぬれたちどりの股間に身を乗り入れ、むくり上つた××を右手で持ち、ちよく／＼と××の辺りから、××にかけてこすりにかゝつた。

ぐり／＼と××で引つかく様にかき廻すと、ちどりはもうふう／＼息を弾ませはじめた。熱いすべ／＼したものが、××の上をする／＼となで上げ、とろ／＼とした気分になると一気に××に突つつくように襲いかゝる。

まるでその××だけが別な一箇の生き物の様に、縦横無盡に動くと、ちどりはいまはもう先刻は何故あんなに逃げたのか不思議に思う位だつた。その中——男は女のきさしを充分たしかめ、ぶすりと××に××立てた。

「——」ちどりは、むづかゆさと痛みの半々した感情を懸命にこらえた。

ナス色の、ふくれ上つた××が、じわ／＼と熱い海綿帯にくいこみ、男が腰を一振り二振りすると、すぼつ／＼と造作なく××××ませてしまつた。じーんと熱いものが背筋を走つた。

男の強い力にひしがれると云う事がこんなにもうれしく、幸福なものだとは思はなかつた。強い力で押されるまゝ、長々と足を投げ出し、男の愛撫に身を委せていると、泣きたい位、自分自身がいとしく、女としてのよろこびがぞく／＼と感じられた。

「どうだい。気分が悪くないだろう」と信三が云つた。

「知らないッ」

ちどりは眞赤に充血した顔で優しくスネた。皿の様な××が、××の中をあらいさらいすくい上げる様にかき廻し、時たま直突に奥まで××こまれると、ふつと思はず氣が遠くなる位だつた。

信三はちどりの××の素晴らしさに氣もそぞろになつていた。×をしつかりくわえこみ、先天的にそうなのか、××をくわえ込む様に××肉で壓迫する。

じく／＼した熱い××が絶えず××をぬらしその余りが表にあふれ、する／＼と女のこう門の方へ流れてゆくのが分つた。彼はほか／＼した××の中で、××がしめられこすられ、又はさまれると、もう氣分は最高潮に達して、いまは我慢が出来なくなつて來た。

「うーむ、もう××そうだ。ぎゅつとしめてくれ——」

「あたしも、——何だか腰の辺りがあつくなくて——」

「うん、もう少しだよ」

信三はもうこらえ様もなく、ぎゅつ／＼と××まくると、ちどりもそれに合せて、いまは恥かしさも何處えやら、下から腰を持上げてこね廻す。丁度餅をこねる様に××の先が、ぐちや／＼の海綿帯に柔かく包まれ、もう我慢も出来ない。

「うーむ、××ぞ。××／＼」「あゝあたしも。早く／＼」
ぶるつと二人同時に激しく身をふるわすと×を×つてしまった。虚脱した様な二人の上に、夜風が涼しく渡つていった。

小人あらし

庄作は全く気が気でなかった。

定子と運轉手が何かこそ／＼話していて、その中運轉手がちどりを連れて行つてしまつたので、定子をしつこく問いつめた所、一件を自白したので、もう眞赤になつて後を追つて來たのであつた。

もう追いつく頃と思つて、轉る様に走つて來たのだが、何處にも二人らしい影はなかつた。あのいやらしいヒゲむじやの男に、ちどりがあられもない姿で組み伏せられ、悲し氣に救いを求めている妄想で頭が一杯であつた。

「早く行かねば——早く行つて助けなければ——」庄作は氣ばかりは焦るが、何處とも見當のつかない探し物で、泣きたくなつてくるのであつた。と、道端に見覚えのあるちどりの桃色のターバンが目についた。

しいたげられた花の様に、ゆがんで投げ捨てられてある様が妙に不吉な豫感をそゝられ、庄作はふつとそこから續く松林に目をやつた。そしてそつと足音をしのばせて上つて行つた。

彼はいつも竹藏のお下りばかりで、その點一應女というものの、經驗は豊富だつたが、それ丈に生涯に一度でもよい、竹藏の手のつかない女——處女にあこがれていた。そして結局求める所はちどりであつた。

すんなり牝鹿のように伸びた足、ひく／＼と生き物の様に動く下腹、弾き反す様にはずんだ腕の丸み、そしてあの息のつまる様な胸のふくらみ——。

庄作はちどりに偶像を感じていた。そしてそれがはげしい思慕になり、今ではもうど

うにもならない宿命の様になつていた。かすかに人聲がした様に思つて、庄作は立止り。ぢつと聞き耳を立てた。松林の茂みの様であつた。

「ちどりかも知れない——」庄作はそう思うと、もう胸が早鐘のように高鳴り、眼がらんらんと燃えてきた。そしてぢり／＼と迫つて行つた。

ちどりは生れて始めての男との交りに、魂を遠く空に飛ばしていた。こんなによいものとは思はなかつた。手も足も力がみんな抜けた様に立上る事も出来ない感激にひたつていた。信三はそんな女の様子に、征服慾を満足させながら

「どうだい。逃げかくれする程のものぢやなからうが」

「ふふふ、知らないツ。ひどい目に合せて——」

「そうかな、ひどかつたかなあ。ぢや、もう一度ひどい目に合せようか」

「あらツ。また——」

「そうだよ。何度でも体のつゞく限りするのが本当のたのしみなんだ。いやかい？」

「ふゝゝゝ、そうね」「勿体振るなつて事よ。好きなくせに」

信三は邪険に再びちどりを押し倒すと、今度は腹の中に顔を突つ込み、××から××にかけて、さら／＼した舌でなめまわした。

「あらツとても——よいわ。あつ——」

ちどりは余り突然な男の態度に最初びつくりしたが、××をその様に舌でくすぐられると、再び陶然とした気分になり、ふう／＼鼻聲を出しはじめた。

「これがこの世の極楽よ。へゝゝゝ、どうだいねえちゃん」

男がそうしてヤニ下つている所に、丁度庄作が暗闇から顔を出した。大きくらん／＼とした目を光らせ、憎しみと怒りに口はみにく／＼ひん曲つていた。凶暴なものが己の体全体にみなぎつていた。

庄作はそこに落ちていた太い木片を手にとると、そつと男の後ろに廻つたそして再び股間に顔をうずめ様とする男の後頭部に無言で力強く木片を打下した。

「がつ」とにぶい音がして、男の頭の骨がくだけてしまった。

「畜生、々々、々々」と庄作は始めて聲に出して、尙も男を打ち続けた。

もう最初の一撃で息絶えた男の肉体に、それは空しいにぶい音を立てた。

「あつ、庄作さん、何するのよ。まあ、殺したのね。殺したのね人殺し——人殺し——」
ちどりはようやく事態を呑みこむと、恐怖のさけびを上げた。

男の死んだ事がさほど悲しいとは思はなかつたが、しん／＼と底から迫ってくる様な恐怖におそわれ、思はず庄作の顔を仰いだ。そしてはつと息をのんだ。

何時もちどりを見る時のあの優しさはなく、そこにあるものはむき出した憎悪だけであつた。その目の光りには妥協も情もなかつた。「——」

ちどりは目に見えない恐ろしいものに押される様に、ぢり／＼と身をのけぞらせた。

「ちどり——き、き、きさま——よ、よくも——」

「あ、庄作さん、かんにんして——」

「許せぬ。おれはお前が好きだ。世界中の誰より好きだ。俺のたつた一人の女と思つていた。そ、それを、こ、こんなやくざな男と――馬、馬鹿野郎――ちどりの馬鹿野郎」

「ね、かんにんして、あたし馬鹿だつた。ね、庄作さん」

「き、きさまに俺の氣持が分つてたまるか。おれは人殺しだ。もう生きてはいられない。お前を道づれにするぞ」

「あ、いや。あたし死ぬのいや――」

ちどりは恐ろしい圧迫から逃れる様に、じりんと後ろにすさつた。

「ちどり、よく聞け。おれは片輪者だ。一寸法師だ。道化者だよ。だがおれだつて男には遠くないんだ。女も欲しくなりや、自由も欲しくなる――いや、片輪者である丈にそれが余計強いんだ。だが何時からか、おれはお前が好きになつた。生命と替えてもよい位好きになつた。お前のためならこのおれはどんな事でもやつて見せるつもりだつた。そ、そのお前が――けつ、けつとくその悪いこんな野郎と――」

ちどりは何時もとすつかり調子の違ふ庄作にすつかり氣圧され、舌がこわばつて口がきけなかつた。ひし／＼と迫つてくる何ものかゝあつた。本當に殺されるかも知れないと思つた。

庄作は一步々々不氣味に近寄つて行つた。彼はもう頭の中が煮えくり返つていた。怒りと絶望と、云い知れぬ悲しみに物を考える力も失せ、たゞ一途にこの己を裏切つたちどりが憎かつた。

ちどりはじり／＼と仰向けのまゝ背中で這つて逃れていた。庄作は一瞬唇を妙にゆがめたと思うと、ばつとちどりに躍りかゝつた。

「あゝつ」とちどりは恐怖の悲鳴を上げたが、それは庄作の太い腕で咽喉を締められ聲にはならなかつた。

ぐつと息がつまり、目の中が眞赤になつた。それからだん／＼灰色のくらい色に變り氣が遠くなつていつた。

庄作はぐつたりとなつた女を下に見下し、深いため息をついた。そしてあられもない格好で倒れている女を見ると、本来の本能的なものがよみがえつて来て、その何の抵抗も為し得ないちどりの体にいどみかゝつた。だん／＼死後の硬直が訪れるちどりの体を、この奇怪な一寸法師はあく事なくさいなみつゞけた。

若しちどりに意識があつたら、この庄作の見事な一物に、信三から與えられた喜びの何倍もの喜悅を感じた事だろうに――。

庄作は今もう完全に息絶えたちどりからはなれると、ふら／＼と立上つた。そして魂のぬけがらの様な体を、死場所を求めてさらに奥の林に分け入つて行つた。

夜がらす

定子は運轉手とちどりを町に出したあと、急に気分が悪くなつた。もと／＼自動車には弱い性だが、いろ／＼な事があつて気分がむしやくしやして、それが余計体にひど

いた。青い顔をして、げつそり寝てしまった。一人喜んでいたのは三郎であつた。いゝ機会だと思つた。この前美那子を口説きそこねてから、今一度の機会をねらつていたのだが、全く好機であつた。

お金は何を考えているのか、うすく目を閉じて定子の枕元に轉つてゐる。

「な、美那ちゃん。とうしていても退屈だし、少しそこらへん歩いて見ないか」

と三郎は云つた。「うん。行こうか——」

美那子は何の疑念もなく立上つた。この女は物を考えるという事は全然ないらしい。二人は連れ立つて車を下りると、ぶら／＼とK町の進行方向に歩いていつた。

「な、美那ちゃん。この間は済まなかつたな。お前親方に大分しかられたかい？」

「うゝん、少しもよ。それより今度向うについたら、いゝもの買つてもろうの」

「え？いゝもの買つて貰うつて——そ、それではお前——親方に」

「ふゝゝ、三ちやんと何してたつて聞かれて、三ちやんに女にしてみろうんだと云つ

たら、ぢや俺がしてやるつて——あたい女になつちやつた」

「ば、馬鹿。美那のばか——ぢやあ、あの夜——」

「うん。川原に行つてね。親方つたら変なことするのよ」

「ど、どんな事したんだ。な、美那ちゃん云つてみな」

「それはいろ／＼よ。一寸口ではいえない。でもあたい痛かつたわ。その代りよ。親方が買つてくれるのは——」

三郎はくら／＼と目まいがし相な怒りがこみ上げた。こんな少女にまで猥慾をのばす竹藏にはげしい憎しみを覺えた。それと同時に、この傷めつけられた幼い花に、むらむらとした慾情を感じた。

「な美那ちゃん。この間は失敗だつたけど、もう一度おれとやらないか」

「でも——あんな痛いんだつたら——」

「うゝん、おれは親方と違つてそんなに痛くはないよ。ね、美那ちゃん」

「うゝ、いゝけど――でも、何處で？」

三郎は左右を見廻はすと、丁度右側が雜草地帯になつていて、手どろな夜の衾になり
そうであつた。

「こゝでいゝだろうこゝならトラックが動く様になつてもすぐ分るから」

三郎はそう云うとそこに腰を下し、美那子の座るのももどかしげに、横だきに抱きつ
くと、矢庭に押し倒した。「――」

美那子は心得えた様に、物も云はずに黙つてころがると、はや息をはづませ、はあは
あ云つてゐる三郎に

「ね、三ちゃん。早くしまつせよ」とうながした。

そして自分でスカートをまくり上げ、ズロースも脱いでしまつた。長々と仰向けに寝
て、ちつと男の為すがまゝにしていると、どんなに男というものが喜ぶものか、この
間の夜の竹藏との事で、美那子は白痴ながら覺つた様であつた。

三郎もあわてゝズボンをぬぎ捨て、パンツ一枚になると、美那子の横に仰向けに体を寄せた。美那子は下の方から手をさし入れ、早や棒になつてゐる三郎の××をひきつかむと、ちゅつと口をつけて吸つた。

三郎はぶる／＼と身ぶるいした。半むけの先に美那子の柔かい舌がくすぐり、吸はれると頭の方から力が抜ける様な気がし、たつた一夜の中にこんな技巧を身につけた美那子にはげしい嫉妬と慾情を覺えた。

「ねえ、こんなもの外しなさいよ。そして早く×れてよ」

まるで先夜とは逆である。三郎はパンツを外すと、やわらかい美那子の腹の上に乗つた。美那子は仰向けのまゝ、三郎の××をしつかりつかみ、先夜竹藏にされた様に××から××にかけてこすりはじめた。三郎にとつては、穴の入口までのぞいてさよならの格好なので物足りない事この上ない。

「ね、美那ちゃん。もういゝんだらう。×れさせてくれよ」

「だめ。まだよ——でも一寸×れさせたげるわ」美那子は××を持ちそえ、そこへ當てがうと、自分から腰を浮かす様にして持上げた。

三郎は無論の事であつた。××に柔かい熱い、ぐちやぐちしたものを感じ一氣に×き立てた。半むけの××がぎゅつとまくれ上り、何とも云えないべとぐししたやわらかさの中に、とけこむ様な感じであつた。

美那子が更に大きく足をひろげ、三郎の腰に足をからませると、×の入口が開いて、ぶすくと三郎の××は全く影を没してしまつた。

美那子は下から腰を右に左に動かしたすると××内をかき分ける様な刺げきがあり、それがまた三郎の××に與える快感もすこぶるよく、二人ともふうふう息を弾ませはじめた。

「美那ちゃん。お前うまいなあ——親方の仕込みだろうが」
三郎は半ばヤケながら云つた。

「ふん、こうすると親方が喜んだから——三ちゃん気持ちい？」

「うん。もう頭がしびれるようだ」

「ふん、あたしも何だかよい気持ちだわ。ね、三ちゃんあたしの口を吸つてよ。ね」

「こうかい」

三郎が口を寄せると、美那子は吸いつく様にそれを受け、三郎の口の中へ舌をさし出した。べろ／＼のなめらかなものが、三郎の口の中でべろ／＼動き、三郎はそれをつえると夢中で吸った。あま酸っぱい女のだ液が彼の口の中に流れ、びつたり合はさつた肉と肉の感触が、はじめての三郎には天國の宴の様に感ぜられた。

だん／＼××の先がぼうちようしてきて、美那子のはげしく尻を動かした瞬間、どくどくつと×××してしまつた。

頭の中がぐる／＼廻轉した様な目まいを感じ、きゆつと××をはさまれたまゝぐつたり力を抜いて美那子の胸に顔を伏せてしまつた。

だが、しばらくすると、若い三郎の肉体は再び元氣をとり戻し、××を××こんだまま、びん／＼張つて來た。この年ごろの性慾は無限である。

生れてはじめて交つた女体に、三郎は全く宇頂天だつた。もうトラックも竹藏もわすれて、美那子を相手にあくない性の歡喜に時のたつのも知らず戯れるのであつた。

頭の上で何に寝ぼけたか、夜がらすが一羽恥かしそうに鳴いた。

定子受難

お金は妙に心がしすんで、たのしくなかつた。ちどりも庄作も何處かへ行つてしまつたし、氣がついて見ると三郎も美那子も姿が見えない。みな良いように自分自身をたのしんでいる。

胸が苦しくなつた。今ごろは何處かそこの草むらで、めい／＼彼らは勝手な事をやつていると思うと、むしやくしやしてならなかつた。

秋の夜更けとはいえ、生あたゝかい風が吹いて、妙にやるせない晩であつた。目をつむると、先夜庄作にいどまれた時の事が、まさ／＼とまぶたに浮んでくる。ねつとりとした男の唇の感触が、お金の官能をくすぐり、今晚は特にやるせない思いがするのだつた。

「お金ちゃん」と寝ていた定子が弱々しく聲をかけた。「うん、なに？」

「済まないけんどね。どこかそとに水ないかしら。熱があるせいか咽喉がかわいて仕様がなねん」

「水？さあこんな山の中にあるかしら」

「そういはないで一丈見て来ておくれな、頼むさかい」

「うん、ぢやあ一寸見てくる／＼」

お金は器用に両手で体を浮かすと、トラックから下り、一寸あたりを見廻したが、先刻三郎と美那子がたどつた道を上りはじめた。全くばからしいと思つた。

一人残つていた爲にこんな録でもない用事までしなくちやならない。ほんとに美那子も三郎も何處へ行つたのだろうと、ぶり／＼しながら歩いているお金の耳に、ふと人聲がきこえた。道路からすぐ右脇の草むらで、まつくらな中にうごめいている人影が美那子と三郎だとお金には分つた。

何故ともなくむら／＼とした怒りがこみ上げて來た。しいたげられ、踏みつけにされ、誰からも相手にされないふんまんが一時に爆發したともいへた。

二人は全くお金に氣づかず、若々しい性の喜びにひたつていた。もう先程から三度目ある。すればする程三郎の感興はわき、度を重ねる毎に益々元氣旺盛になつた。

今はもう下半身むき出しになり、上になり、下になり、×いたり、××たり、まつたく痴戲そのものであつた。

お金はらん／＼と目を光らせ、息をつめてながめていた。竹藏と定子に見られない、そこにはたくましいものがあつた。若さと若さがぶつかり合う……熱と火があつた。

お金は身内がかつかつと燃えてきた。あまりのはげしさ、あまりの情熱が二人からお金にもえ移り、いつか口の中がから／＼に乾き、じく／＼と××から××液が流れはじめた。しかし、それだとしてどうにもならない。

こんなもの見たくない。お金は急いで目をふさいだ。が、目をふさげば尙いけなかつた。その中に想像が加はり余計生々しい情感を呼び起され、すぐ目を開いた。全くやり切れない思いであつた。

一その事世の中の一切のこの様な状態が消え去ればよい。お金はせつ那的にそう思つた。そして、つい先夜も思い至つた女という女が一切いなくなればよいという妖しい想念に支配されて行つた。

三郎と美那子はすぐ自分達の横にお金がちつと眼を光らせて見ているとも知らず、あくなき狂態をくり返していた。お金は人もなげな、自分に當てつける様な二人の性のたわむれを見ていると、ますます胸が苦しくなり、もう一その事二人ともこの世から

消えてくれ、ばよいと思つた。そしてむら／＼と殺意を覺えた。辺りにはあいにく何も得物はない。お金は再び音もなくトラツクに引返すと、運轉台から金槌を取り出すと、先刻の場所に引返した。

二人は何回目かの虚脱状態におち入つて、びたり体を合せたまゝぐつたりと倒れてゐた。腹と腹、腰と腰、胸と胸、唇と唇がびつたりくっついて、本當の一身同体という状態であつた。

そこには性のよろこびに酔つた甘酸っぱいものがふんだんに漂い、肉と肉から發散する生臭いものが、お金の嗅覺に異様にうつたえるのであつた。

お金はふわり／＼と宙を浮くように音もなく近寄ると、虫けらをつぶす様に無造作に金槌を二人の顔に打ち下した。一聲、二聲けたゝましい悲鳴が聞えたが、あとはしんとして再び元の静寂さにかえつた。

しばらくして、のろ／＼とお金が出て來た。無表情な、何の感動もない面持であつた

が、何の涙か故しらぬ涙がほろほろとお金のほゝを傳つて流れていた。

「どう？ お金ちゃん。水あつた？」車に歸ると早速定子がたづねた。すっかりお金は忘れていたので「あの——まだ、なか——」

「ないのかねえ。こんな低い山の中だから無理かもしれないねえ。それはそうと今なにか変な聲がしたが、あれ何だつたの？」

「あゝあれ？ あれは三ちゃん和美那ちゃんの聲よ」お金はあつさり答えた。

「三ちゃん和美那ちゃんて、どうしたのよ。何かあつたの？」

「うん。二人とも死んぢやつた——」

「え、死んぢやつた？ まさか——でも、どこでよ、それ——」

定子はお金の様子からなにか只ならぬものを感じておどろいてたづねた。二人でなにか喧くわでもしたのかも知れないと思つた。

「うん。すぐそこの木のそばよ。第一だらしないわよ」

「まあ、何をいつてるのよ。さ私を案内しておくれ——なんだか氣になつて來た——」

定子はもの憂げに体を起すと、お金をうながして車から降りた。今晚は妙な事が連續しておこり、不吉な晩だと思つた。

「うん、そこを右に入つた、木の中よ」お金はのろ／＼と後からついてきながら言つた。定子はおづ／＼と中をのぞいた。お金の様に闇の眼のきかない定子には一寸分らなかつた。

「ほら、そこよ。そこに二人とも倒れているでしょう」

お金の指先に視線をやると、三郎と美那子が顔をめつた打ちにされて、血に染つて倒れていた。生々しい血のにおいが、ようやく定子にも分つてきた。

「あつ、こ、こりや、どうして」思はず面をそむける定子に

「ふゝゝ、金槌でたゝいたんだよ。子供のくせに生意氣だからよ」

「えつ、金槌で——一体誰が——だれがそんなひどいこと——」

「ふふふ、あたしよ。カーンカーンと二つ三つでもうこの世のお別れ、たよりもないものね、人間つて——」

「お、お金ちゃん。お、お前本當にそんなおそろしい事を——」

「ふふふ、しやくにさわるからさ。人の眼の前でさん／＼ふざけ散らして——お定さん、お前さんもだよ。いちや／＼と親方にいちやついて、あたしや女がでれ／＼するの大嫌いなんだ。一座の女も男もみんな殺してしまつて、と前から思つていた。そしてふら／＼つとこの二人を殺してしまつたどうせこのまゝちや済まないんだから、お定さんお前さんも道連れになつておくれ」

「ま、まつておくれお金ちゃん。どうしてあたしが道連れにならなきやならないんだい。ね、お金ちゃん。私しや何にもいはないからね、助けておくれ——お前のいう事あ何でも聞くよ」

「おらはね。親方一人だけを残したいんだ。ふふふ、親方一人だけをね——」

いゝ終らぬ中に、いつ手にしていたのか細引をばつと定子の首にかけ、ぎゅつと締め上げた。「あつお金ちゃん。かんにんしておくれ。かんにん——」

恐ろしい力でお金がしめ上げ、病い者の定子は一たまりもなかつた。三郎にうつ伏せる様に倒れると、ぐつ、ぐつと咽喉をかすかに鳴らし、眼を白く反すと息絶えてしまった。お金は妙な笑いを口許に漂はせながら、のろ／＼と立上り、トラックの方に戻つていつた。

お 金 狂 い

一方竹藏もK町でやきもきしていた。汽車が不通だということは彼も分つていたが、何とか車でゝもやつてくると待つていたが、いくら経つても来る様子がなく、その中夜もだいぶ更けてきたので、ようやく不安になつてきた。

ハイヤを雇うと、彼は夜の街道を走らせた。妙な不安がいつになく彼の胸をかすめた

人気のない夜の街道をハイヤーはまつしぐらに走つていった。そしてようやく峠の、あのトラックのエンコした所まで来た。

「旦那、トラックが止つてますね」運転手が素早く見つけて彼に聲をかけた。

「そうか。一寸止つて見てくれないか」

彼は自動車を下りると、つか／＼とトラックに近づいた。だれもいない。彼はとに角運轉手を帰すと、トラックに背をもたせて誰か歸るのを待つていた。

それにしても揃いもそろつて皆が不在とは意外であつた。ぼんやり考えこんでいる竹藏の背後に、お金はくらい茂みからふら／＼りと這い出して来た。

ハイヤーの音で素早く横手の木の茂みにかくれたのだが、それが思いもかけず竹藏だつたので、お金の胸が早鐘のようになり出した。全く天の興えといつてよかつた。

一座の者のだれもない今宵、ゆつくり自分の氣持を竹藏に聞いてもらいそしてせめて今宵一夜なりとも竹藏にし／＼み愛してもらいたかつた。

お金はふわりと竹藏の首にしがみつくと

「あらつ、いつお出でになつたの——」となまめいた聲でいつた。

「おつ、お金か、一体どうしたんだ。だれもないぢやないか」

「えゝ、いろ／＼譯があつて——でもあたゐ一人でさびしかつた。ねえ、一寸來て下さいな」「え、どこへ行くんだ」「うん、すぐそこ。一寸お話があるの——」

いつにないつきつめたお金の表情に、竹藏は不思議に思いながら後について行つた。すぐ右手の木立の中に分け入ると柔かい芝草が生えており、月光を重なり合つた木の葉がさえぎり、丁度そこだけが洞のようになつて見えた。

お金はそこにべたんと座ると、しげ／＼と竹藏の顔をながめた。

「どうしたんだいお金。いやに改つて」

「ねえ、親方——あゐ親方に聞いてもらいたい事があるの——あたゐ、あたゐ親方が好きなんです」お金は思い切つてそれだけいうと恥かしそうに身をくねらせた。

すると不思議な色氣が漂い「おや？」と竹藏の眼を見張らせるものがあつた。

「ねえ——そいで一ぺんでもよいから、あたいもお定さん見たいにして可愛がつて頂戴——あたい、いつも親方の寝間のぞいていたの——一ぺんでもよいの。ねえ、親方——」

「うむ。お前も年ごろだから——だが、お前のその格好ぢや無理だろうと思うが——」

「だから、だから、この間の晩のように——」「え？この間の晩つて？」

「ほら、親方が後ろからお定さんの足を持つて、お定さんの股をひろげて車を押すようにしていた——」

「お、お前あれを見ていたんか。適わんなあ。まあ、あれならお前の体でも出来るだろう。ところで一体皆はどこへ行つたんだ。すつかり空ぢやないか」

そこでお金はトラックがエンコした事、庄作とちどりが一緒に町まで行つた事、定子は同じく下まで水をもらいに行つたこと、三郎と美那子は何處かへ遊びに行つた事、自分が三郎も美那子も、定子も殺した事はいはなかつた

「そうかいそれで分つたよところでお金、お前本當にあゝいつた事したいのかい？」
「うんいつも晩になると、胸が苦しくなつて、あたい親方に——」

「よし分つた。可愛そうに、ちや俺がゆつくり女にしてやろう。お前は顔は申分ないんだからな」竹藏はそういうと、一寸氣持惡そうにお金の毛むくじやの足を眺めていたが、つとお金の顔を抱くと、その可愛い唇を自分の口でつまみ上ると、ちゅつと吸い上げた。お金はぶるつと身ぶるいした。

「どうだいお金、これを持つて見な」竹藏はびん／＼張り切つた××をパンツの下方から引きづり出すと、それをお金につかました。お金は毛むくじやの手で、それをつかむと、ふ／＼と深く息をついた。

この大きなものが、こんな太いものが自分のあそこに入るのかと思うと、お金は期待にぞくぞく心が戦いた。

「あの——あの、これどうするの？」

「うん、そいつをくわえて見な。」

竹藏はお金に××をくわえさせると、お金の股に手をやつた。定子も毛深い女だが、これは亦なんという毛深さであろう。

身体が黒々とした密毛に覆はれていて、××を探すのが一苦勞であつた。お金は生れて始めての男の××に、もう宇頂天になつて夢中でしゃぶつていた。

ぐつと深く吞み込むようにすると、さらさらした男の××が口辺にさわりくすぐつた。氣持がよかつた。竹藏は毛すれを心配して、丁寧にきき分けていたが、ようやく××に手をさし入れると、「あつ」とおどろいた。

もうすつかりお金はべとべとに濡らしこれは亦なんという柔らかさであろうか、びたびたとくいつくような××である。

「うーむ。これは上物だわい」

竹藏は腹の中で、ほくそ笑み乍ら、自分は仰向けに倒れ、お金の尻の方から、自分の

××の上に引きつり上ると、左手で毛をかきのけ、右手で××を持ち、そのべとくの部分に××を当てると、ぐつとお金の尻を引き寄せた。普通の女の子より大分大きい××はぶす／＼と竹藏の××を何なくくわえ込み、××どころか、××全体を呑み込むように×れてしまった。

あの毛深いお金の××も、こうして×れてしまうと毛と毛のすれ合う具合がなんともいへず氣持よくどうして今までお金をほつておいたのか竹藏にはくやまれた。

先天的な技巧なのか、××をくわえ込むと同時に、お金の××はぐつとしまり、××をきゅつ／＼とはさんで圧迫してくる様は、全くなんともいわれない。

「お金。素晴らしい××ぢやないか——こりやいよ」

「そう。あたいもずつと奥の方を親方のこれで突かれると、×が出そうになる——」

「うむ。どうたお金。こりや××ぢや。一度や二度ぢや治まりそうもねえゆつくりやるで」

「うん。親方の好きな様に——」

竹藏は今も、お金の味の良さに舌なめすりし再びお金の顔を引寄せると激しく接吻した。そして、先夜の定子に試みたように、お金を裏返しにすると、兩足を廣げさせ、自分は座つたまゝ大きく足をひろげその中へお金の尻を誘い込むとぐつと××立てた。「あーつ」とお金は快いというあきを上げた。

「もつと——、親方——もつとついて——」

「うん、まてまて。これでどうだ。」

竹藏は遮二無二つきたてる。行けどもく一面の泥海のような奥行の深いお金の××は、いつかかつかつと熱くなり、竹藏も精が抜けるような陶醉に誘はれて来た。

「お金おれは生れてはじめて、こんなよい××にめぐり会つた。全くお前は素晴らし。うーむ、はや××そうだ。」

「お、おや方、あたしうれしい、私のような女でも、こんなことが出来るなんて——」

親方、あたし、あたし、あたしもう——」

「おう。お金——しよにやろうぜ。うむ」

「あい、はやくはやくはやく。あゝ親方——」

「うーむ。××ぞく／＼今だ、お金」 「あいあたしも／＼さ——」

兩人どく／＼と精を出して、しばらくは起き上れない位、ぐったり疲れてしまった竹藏の××はしびれたようになって、しばらくは元氣を回復しそうにもない。お金は竹藏の股間にかおをうずめると、その××の汚れをぺろ／＼と舌で拭きはじめた。

一種独特のなめらかな舌ざわりで××の表面から内××丸の辺りまでなめられると、どのような効き目があったものか、再びむく／＼と張り切つて来て、××首をもたげて来た。「あら、また××て来たわ——うれしい」、

「うむ、お金。くたばるまでやろうぜ——」

竹藏は妖しく眼をかがやかすと女にうえた男のように荒々しくお金にいどみかゝつて

行つた。お金はけろ／＼と笑つた。自分の思わく通りことが運んで、これ以上の満足はなかつた。一度笑い出すと、中々笑いが止らず、けろけろ／＼／＼と狂つた者のように笑いつゞけるのであつた。

女 郎 く も

庄作は死に切れなかつた。うろ／＼と山の中をうろついたか、どうしても死ねず、またぞろ車の所へ帰つて來た。

定子や他の者にどういゝ譯をしたらよいか、等のことはなんにも考えずたゞ夢遊病者のように、ふら／＼と帰つて來たのであつた。

無論車にはだれもいなかった。彼は妙にほつとしたものを感じ乍ら亦反而無性に人が恋しかつた。だれにでもよい会いたかつた。そして話しがしたかつた。その時であるすぐ右手の草むらで、けろ／＼とくるつたように笑うお金の聲が聞えた。

庄作は思はず飛び上つた。余り不意だつたし、それにほんやり考え事をしていたので顔色の変る位の驚きに打たれた。そしてなにか目に見えない糸に引かれるように、その声の方に寄つて行つた。

見ると、お金と竹藏がこゝを先途の最中である。お金が今まで見せたことのない喜悅の表情を現はし、殆んどつかれた者の様に這い廻つていた。

竹藏も素つ裸になり、お金との性交に可能なあらゆる姿勢で、いどんでいた。それは全く二匹の淫獣であつた。見得も体裁も、なにも忘れ果てた、本能だけの獣であつた。お金は全く疲れを知らぬ女であつた。けろ／＼とくるつた様に笑いながら何度も何度も竹藏にせがんだ。ゴム風船のように弾力のある不思議な××であつた。

さすがの竹藏も四回も立て続けに相手をさせられると、もうぐつたり疲れ果て、一物が立たなくなつてしまつた。お金はそれでもまだ慾情を顔一杯にみなぎらし、いろいろ工夫して××をいじるのだが、もう勘辨してくれとばかり竹藏の一物はおじぎをし

た切りだつた。

「ね、親方。もうだめなの？」

「あゝお金。お前の精力にやもう呆れるぜ。なんぼなんでもこれ以上は無理だ。少し休ませてくれ」「ふん。いくちないのね。親方つて弱いのね」

「馬鹿をいうねえ。これ丈續けられたら三人並だよ。お前が強過ぎるんだよ——」

お金は黙つて竹藏の傍をはなれると、まだ物足りな相に、竹藏の股間を眺めていたがもう一度引返し、ぐにやつとあぐらをかいている竹藏の××を再びいじくりはじめた両手で柔かく××をはさんで、くるくゝ廻すようにしてもみ、それから指を××丸の裏からこう門へかけてくすぐるようにしてかき下す。そして亦、××を口に入れるとべろ／＼なめたり、齒で優しくかんだり、唇で強くはさみ、ちゆつと吸い上げるようにして吸う。

竹藏はそうされると、もや／＼としたいゝ気分になるのだが、さつぱり息子がいう事

をきかない。お金はさんぐいじりまわすのだが、もう駄目だとあきらめ、今度こそ本当にあきらめてしまった。そして、なにがおかしいのか大聲で笑うと、ふらりと立上つた庄作はその一挙一動を、またゝきもせずながめていた。

竹藏があんなにぐつたり疲れる様では、お金の××はよほどの上玉にちがいない。一度あやかつて見たいと思つた。彼はお金の行く方向にしばらくについてゆくと、そつと後ろから聲をかけた。

「お金ちゃん。々々」「え？だれ？」お金はふり返つて、そこに庄作を認めると

「あら、庄作さん。ちどりちゃんも一しよ？」

「うんや、おれ一人だ。ちどりにいねえ」

「ふーん。ちやちどりちゃんはどこ？あの男も——」

「うんそれなんだ。実はな、お金ちゃん。おれ、おれ、ちどりも、あの男もばらしてしまつたんだ。おれが後をつけて行くと、奴らあ、町へ行かねえで、松林の中へ入つ

て——畜生ッ、やつてやがるんだ。そこでおれ——思はずかつとしてやつゝけてしまつたんだ」

「ふゝゝゝ、庄作さん、ちどりちゃんに惚れてたもんね」

「なあに、あんな奴、人の氣も知らねえで——けつ、あんな野郎と——おれ、でも——」
「でも？でもどうしたのさ」

「うん、先刻お前と親方を見ていて、うらやましくなつたのさ。親方があんなに馬鹿見たいに疲れる所を見ると、お前の品物は上物らしいな」

「ふゝゝゝ、上物かどうか——親方つて案外弱いね」

「どうだい、お金ちゃん。おれと一丁やらねえか——」

「おや、何いつてるんだい。この間汚いつてつばはいたくせに」

「そ、それをいうなよ。酔んだ事だやないか。な、お金ちゃん」

お金は庄作の一物については、前々から聞いているので、一つ試して見てもよいと思

つた。女達があれば口にするのは一体どの様な××なのか味はつて見たいと思つた
「ふゝゝそうね。けど庄作さんも親方みたいにくたばるんぢやないの」

「ば、馬鹿いうねえ。おれの品物は筋金入りだ。一晚や二晩ぶつ續けにやつたつて、
へたばるもんかい」

「そう？頼もしいわねえ。ぢやどちらが先に参るかやつて見ようね」

お金はあやしく笑うと、さつと長い手をのばすと庄作の首にまつわりつき、じり／＼
と引寄せた。それはまるで大きな女郎ぐもが掛つた獲物を引寄せるのに似た光景であ
つた。紅い大きな口から、眞白な糸が吹き出るかと思はれた。そして凱歌を上げる様
にける／＼と笑つた。

お金はそれに他の女に見られない、一種独特の体臭があつて、それがこうした性交渉
の雰囲気の中にあると男心をめら／＼と燃え立たせるのであつた。

「お、お金ちゃん——」庄作はしびれる様な肉慾をあふられながら、引寄せられるま

まお金に倒れ込むと、いきなり唇を求めてきた。

絶えず何か溢れている様な、べとべとの口に庄作の唇が重なると、そのまゝ吸いつかれた様に放れなくなり、長いお金の舌が触手の様に庄作の口の中をはい廻り、妙な香氣のあるつばがじく／＼と庄作の口の中に流れこんで来た。

庄作はお金の体臭にむせびながら、はやいきり立っている××をお金につかませた。

「あら、庄作さん。なんて大きいの——あんたの」

「へつへつへ、一寸おいらのあ並外れさ。その代り味は天下一品だい」

「そうね。これだけあつたら——ふゝゝゝ」

お金は馬の様な庄作の一物をもてあそび乍ら、たのしそうに笑った。全くこれは素晴らしい××であると思つた。初めて竹藏のをくわえて見て、こんなものかと思つたが今庄作のを見て、並外れではあるにしろ、こんな見事なものもあるという事はお金にうれしかつた。

竹藏の××で味えなかつた、奥の奥までこれならさらへてくれるだろう。お金はくるつとうつ伏せになると庄作の××を迎え入れる体勢をとつた。

「お、お金ちゃん。××でもいゝかい？」「うん大丈夫。ぎゅつと××込んで——」
「ちやあ入れるぜ——痛かつたらいえよ」「ふゝゝゝ、痛かないわよ」

庄作は逸り切つた××を、お金の兩足を持上げると、ぶすりとつき××たどぼ／＼つと音がして水に沈む石の様に庄作の××はお金の一尺五寸の身体の中に沈んでいつた「うゝむ。これはよい——お金ちゃん、親方がくたばるの無理ないや」

庄作はすつぽりはめ込んだ××の先が、柔かいものでぐつと締められる感じに宇頂天になりながら言つた。お金も竹藏の××では届かなかつた奥の奥が、熱いものでぐいぐいこすかれるので、ふう／＼息をはづませはじめた。

全くお金と庄作は、サイズのびつたり合つた同志であつた。天は皮肉にこの全く相反した二人の奇型兒に性器の逸物を與えたのかも知れない。

馬のような太い庄作の××が、情容しやもなく、ぐい／＼つきまくるので腰から体全体がかつと熱くなつて、こすかれる××の奥からじく／＼と流れる様に××があふれはじめた。

それが太い庄作の××をべと／＼にぬらし、ます／＼滑りがよくなる。べちやツ／＼と××込む度に音がして、むつとした生臭さがあたり一面に漂いはじめた。

「あ、庄作さん。あたいーあたいーいゝ気持だわ——もつと、もつと強くついてよ。やつぱりあんだのは素晴らしい——」

「ふつふつふ、こうかい？おれもお金ちゃん。お前の様な上物にや初めてだぜ。どうしてもつと早く気付かなかつたかつて事よ」

「そうね。ほんとにあ——、あたい、××そうよ」

「お、おれもだ。お金ちゃん——しよにやろう。うーむ今だ——」

「あい。いまいま——あーっ」

物すごい勢で精をやつた二人の××が、どく／＼とお金の××からあふれ出して、流れ出て来た。お金が生を引こうとすると、庄作は

「お金ちやんどうするんだい？このまゝで続けようや」と云つた。

「え？このまゝ××ないで？」

「そうよ。そこにこの庄作さんの持味があるのさ」

「ふゝゝゝ」お金は満足そうに笑うと、はげしく庄作に抱きついた。それから立て続けであつた。二人ともつかれを知らぬ者のように、いとなみ続けた。

しまいには庄作の××からもう精液は出ず、気がいつてもたゞ××がぼうちようする丈で、空ダマになつてしまつた。

そうなつてもなおピン／＼張つてゐる庄作の精力は全くすさまじいものであつた。

竹藏がいつの間にか起き出して、それを見ていた。はげしい嫉妬と怒りが彼の心を捕えたが、腰がぬけた様になつて体が起たなかつた。

「庄、庄作。き、きさま、お金と——」

一瞬びくつとしたが、今はもう庄作も負けてはいなかった。

「な、何言つてやがんでえ。腕で来い。腕で——」

「なにッ、庄。それがきさま、親方にいう言葉か」

竹藏はようやく体を起すと、お金に馬乗りになつてゐる庄作につかみかゝつて行つた。庄作もお金から放れると、竹藏に組みついて行つた。男と男の、女を中にしたみにくい、それでいてすさまじい争いがはじまつた。

上になり、下になり、かみつき、引つかく、二人の男の姿をお金は無表情に何か面白い見世物の様にながめていた。その中、何を思つたのか、氣が狂つた様にげら／＼と馬鹿の様に笑い出した。

二人の男があつ氣にとられて、争いの手を休めるのも知らぬ氣に、げら／＼といつまでも笑い續けるのであつた。

……完……

編集室ノート

方からのご投稿を期待したく、締切日を昭和58年1月末までとしましたので、ふるってご投稿願います。

○先月号で、「妻の情事」の投稿をお願いしたところ、早速、多数の読者から寄稿を頂きました。妻の情事を偶然発見して驚天した方、積極的に浮気を奨励して妻の変化を楽しんでいる方など々々、一言に妻の情事と言ってもいろいろな方が様々な経験をされているのに、今更のように驚かされています。更に多くの

○今日は、1・2月合併号をお届けします。この1年、復刊号をなんとか続けることができたのも読者の皆さまのご支援、ご協力があったからこそ、と深く感謝する次第です。昭和58年も本誌にとって多難な年になりそうですが、皆さまの一層のご支援をお願いいたします。年末年始の多忙な折、ご健康にご留意を。

「読者投稿」歓迎！

◆テーマ①「妻の情事」

妻の情事といっても、最近は浮気に限らず、夫婦交換や3人プレイ、あるいは夫公認の情事などいろいろですが、そんな体験をありのままに飾らぬ文章で書いてみてください。

◆テーマ②「SM手記」

SMあるいはフェチなど、ご自分の性向や体験を独白するようなつもりで書いてみてください。上手に書こうとすると一行も書けなくなるのが文章です。日記をつけるつもりで書くのがコツといえましょう。

◆規定・四百字原稿用紙（タテ書き）5枚／50枚。写真（カラー・モノクロ・ポラ）があれば添えてください。

◆原稿料・四百字原稿1枚700円・写真1枚千円。

◆締切り・58年1月末日

新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性は、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

株式会社

現代芸術研究会

（直接購読のお申込みは、きたん社へ）

投 稿 規 定

〔体験・告白・日記など〕

S・M・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ボラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

S・M小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はS・M、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛 先

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11
加藤ビル1F
(株)きたん社内
現代芸術研究会

